

# 学校・家庭・文化を衝く 子どもたちの現在

第1委員会<子どもと文化、家庭と学校のかかわり>最終報告

## 目 次

はじめに	(3)
第3回夜間公開研究会 “おとなになる”って何ですか	(5)
ヒアリング・定時制高校生のみた「おとな」観・仕事観 ——佐々木 賢氏に聞く——	(35)
第4回夜間公開研究会 学校——こう変えたい	(46)
見えてきた問題	
家庭と学校—この切り離せない関係	(82)
戦後の社会意識と相対五段階評価	(86)
子ども文化の消失と未来	(90)
学校改革への道	(94)
私学ブームをどう考えるか	(104)
居場所としての学校をめざして	(108)
子どもと教師が楽になるための発想転換	(111)

# はじめに

第1委員会が今期の活動の中心に置いたのは、子ども・若者、また親・教師たちのなまの声を聴くことでした。また、子ども・若者のことばを聴きながら「大人」の位置を自問しようとする人びとの考えをたずねることでした。そして私たち委員もまた、その視点を共有しようとつとめながら、子どもをとりまく現在の状況の事実を見つめ、討論を積んできました。

良くも悪くも混とんの中にある「子ども一大人」関係、とりわけ現在の学校の問題を考えようとするとき、そのことがまず欠かせない仕事だと思われたからです。

本委員会に課せられたテーマは、子ども、家庭、文化と幅広いものでした。しかしどのテーマも、「学校」の問題へとゆきつかざるを得ませんでした。そのことは結果的に、本委員会活動のひとつの答になっていると思われます。

子どもをめぐる研究の手法には、さまざまなスタイルが考えられます。文献・資料にもとづく方法、実態調査、アンケート調査など。私たちが選んだのは、「夜間公開研究会」という方法でした。学校へ行く子も行かない子も、勤めを持つ市民も、親も教師も、あらゆる立場の人びとが場をひとつにし、意見を話しあえるオープンな場面を作り、考え方です。

時代が滑るような速度で変わり、「子ども一大人」関係が揺れ動くなかで、子どもも、親も、教師もそれぞれに、とまどいの中にあります。応急手当や手直しの“改良”は通用しない事態です。根っここのところから事実のみつめ直しを始めよう——そのために、本委員会が学校へ行かない人たちを含めて、子ども、若者のことばを聴くところから出発したのは、必然のことでした。

4回の公開研究会に参加された人びとは、延べ370人にのぼります。これまでに開催した「夜間公開研究会」(以下公開研)とヒアリングは、以下の通りです。

- ①第1回公開研 「家庭の学校化」を問う
- ②第1回ヒアリング 青年たち、親・家庭を語る
- ③第2回公開研 いま、子どもの文化は——学校との大きなズレの中で
- ④第3回公開研 「おとなになる」って何ですか？
- ⑤第2回ヒアリング 佐々木賢氏に聞く——定時制高校生のみた「おとな」観、仕事観
- ⑥第4回公開研 学校——こう変えたい

上記の①から③までは、1992年8月に発行された『教育総研理論フォーラムNo.2——家庭と子ども・青年の文化』（第1委員会中間報告）に収めてあります。したがって本号には、④から⑥を掲載しました。

「中間報告」と同様に、本報告もなまの記録を核とし、そこから見えてくる問題を整理し提言するスタイルをとっています。語りことばが続くこのスタイルは、やや読みにくいという感想も、前回に聞こえていたのですが、大人の中にある既成の感覚や考えをいまはひとまず置いて、子ども・若者の声を文字にとどめることを、まず大切にしたいと考えました。子ども・若者の思いやことばがストレートに社会にとどくチャンスは、まだあまりにも少なすぎます。

私たち大人が、自分の位置から語ることが大切なのはいうまでもありません。しかしそれ以上にいまは、大人の位置への安易なひらき直りを自重し、その点検作業をすることが必要だと考えます。

子ども—大人の関係、とりわけ学校にかかる困難をひらくところに資するものであるようにとのつよい願いをこめて、この報告をとどけます。

1993年3月

小沢 牧子

## 第3回 夜間公開研究会

# 『おとなになる』って何ですか

1992.10.15

PM6:00~8:30

発題 味岡 尚子 (全国PTA問題研究会事務局長)

小沢 有作 (都立大学教授・教育総研)

佐々木 賢 (東京都嘱託教員)

吉岡由紀子 (高校生)

松下 紀子 ( " )

松本サト子 ( " )

小沢 牧子 夜間の公開研究会はきょうで3回目です。1回目は、なぜこのテーマを選「家庭の学校化を問う」というタイトルでした。そこで見えてきた んだかのは、学校は競争の場になっており、そこで少しでも上位にあがることに親も子どもも強く縛りつけられている事態でした。子どもは学校に行くものだという身分にあり、社会に出るとおとなといわれる。学校というのはおとなと子どもを分ける場である。学校にいる間はおとなに強制され服従しなくちゃいけないという身分関係にある。子どもとおとなを分ける場として、学校は機能しています。

ところが2回目に、子どもやおとなを取り巻いている文化の問題を考えたとき、こんどは子どもと大人がボーダーレスである部分が見えてきました。子どもとおとは同じ文化を享受し、子どものほうがおとなよりも詳しいこと、よく知っていること、得意なことがたくさんある。たとえば映像や、音楽にまつわる領域がそうです。

そこでは、おとなと子どもはもう分ける意味がなくなっているし、子どももそう感じているんじゃないいか。そのあたりが見えてきたわけです。そうすると、おとな、子どもと分けている「おとな・子ども制度」が今の時代の中でかなり無理のある「制度」になってきているということに気づいてきたのですね。

今日のテーマは、ここについて考えます。いま「おとな・子ども制度」は実状として、また両者の意識の上でどうなっているのだろうか、とくに子どもたちはどう感じているのだろうかということで

す。

過去には子どもとおとなを分けることが自然な時代があったと思います。生活が肉体労働で支えられていた時期にはそうでした。たとえば米俵を1俵をかつげること、あるいはゆかたをサッと縫い上げること。子どもはまだ筋力がないし、技術は身につけていない。子どもはおとなを見習って技術・知識・文化を吸収してだんだんおとなに近づいていったのです。

ところが、現在はそうではなくなっていて、学校での勉強は競争・序列化の道具みたいになってしまっている。かつて子どもがおとなに憧れながらおとなに近づいていったという形は消えかけています。

しかし、子どもをどういうものと見、おとなをどういうものと考えるかは、人によってとても考え方や感じ方が違うのですね。時代があまりに早い変化をしていくので、大人・子どもを問わず、とまどいが大きいのだと思います。自分はどう感じるか、考えるかということを、子ども、おとなそれぞれの立場から出していただいて、いろんな議論をしたい。よろしくお願ひいたします。

## 親も子も家族の中で同じウェイト

味岡 尚子

私は前回の「いま子どもの文化は」という公開研究会のときに「おとなも子どもも一緒なんじゃないか」という発言をしましたが、なぜそう考えるかということをお話したいと思います。

私の親は世の中の価値観に流される人ではなかったのですが、頑固というか、自分の価値観を押し通す人でした。親の価値観は価値観で通したということは、私はそういう意味ではとても尊敬しますが、子どもに社会の価値観とは違った価値観を押しつけることは、社会の価値観を押しつける今の世の中とあまり変わらないじゃないかと思っていたんです。

小さいときにはそういうことがよくわからなかつたんですが、学校の友達といろいろな話をくると、親の価値観は一つの価値観としてはいいけれど、それが絶対ではないわけだから、「私の価値観を持ってなぜ悪いのだろうか」というふうに思っていた。でもやっぱり、親の大きさに負けていたと思う。ただし、子どものときに

「おとなってすごく自由でいいな」と思った半面、世の中の汚いものも背負って生きているすごさ、ある意味ではきっと軽蔑していた部分もあり、ある意味ではすごいと思っていた部分もあったのでしょうか。

親子関係で言えば、親をおとなとして見た場合、子どもの私が何でも聞けばすべて教えてくれたというか、学校の勉強でも何しろわからないことは教えてくれた。親に聞きたくない、わからないことは百科事典で調べるということをずっとやってきて、大人というのは何でも、字でもどんなことでも聞けばわかる、親ってそういうものだと思っていたけど、自分が親になってみたら、漢字も全部知っているわけでもないし、いろんなことを知らなくてちゃんと親になれるわけですよ。

先日、子どもと話していて、私は親に対してこういうふうに思っていた、ああいうふうに思っていたという話をしたら、「何言ってるの」みたいな感じで、子どもに、「箱入り」みたいな人間なんじゃないか、たくましくないというようなことを言わされたんですね。

私が子どもを育てていくときに、自分が子どものときに自分に意思があった、それを親が抑えつけていたというか、私がはねのけられなかつたということを忘れたくなかった。抑えることが子どもにとってバネになるかもしれないけど、私は抑えつけられなかつたら自分自身が日々もっと楽しく、もっと豊かに、いろんな面でもっともっといい状況になれたのにと思っていたんです。子どもだからということで保護される部分も含めて、パイが小さいみたいなところが今の世の中もあると思います。おとなになるとタガがはずれて何でもできちゃうとか。そういうことで、小さいときからタガははめないで、それなりに考えて、たとえば間違ったときに親は一緒に引き受けちゃえばそれでいいんじゃないかと思う。親ってそれほど子どもに対して責任を持つるものじゃない、やっぱり自分のことは自分でしか責任がとれないんじゃないかと思っていたので、寄り添える感じでいいだろうと思って私は子育てをしてきたんです。ですから小さいときでも、何かするときには必ず相談したし、彼自身のことは私と意見が違うときには彼を尊重してやってきた。今19歳になったら、自分のことは自分で決めていくて、むしろ私よりは判断力があるような気もするし、たくましい。子どもだからといって大人と特別に違つてないんじゃないかな。

たとえば自分の子どもが何かあったときに助けるといつても、たとえばおとな同士が何か援助してほしいと思ったときに、あるいは自分にできる範囲のことはしますね、それと同じように子どものこともやるだけのことなんだろうと思います。私ばかりではなく、私が一緒に子育ててきて仲間の子どもたちを見ていても、お互いに人間として、結構小さくてもそういう感じでつき合ってきていて、何も不自由はない。制度のことについては触れませんが、家族についても、老人でも小さい子でも夫婦でもみんな同じウエートで考えていくのがいいんじゃないかと思っています。

子どものためとか、子ども中心とか言われる場合の「子どもを大事にする」というのは、実は母親なり父親なりの夢を実現させるための道具として大事にしているだけである。ダイアモンドが大事というのとあまり変わらないんじゃないかと思います。

そういうことを考えていくと、すぐ目の前にいる人をどれだけお互いに大事にできるかという視点に立てば、おとなと子どもというふうに分けて考えなくてもいいんじゃないかと私は思っています。

## 18歳になったら1年間旅に出る

小沢 有作

味岡さんからは、おとなも子どもも同じ重さを持っているんだよというお話があり、制度の問題を避けると言われました。僕は、制度の問題を中心に考えてみたい。

僕は、おとなと子どもに境目をつくるという考え方です。そのために具体的な提案は、「18歳になったら1年間旅に出る」ということです。空想的なプランですが、話してみたいと思います。

「18歳になったら1年間旅に出る」ということの狙いは、一つは、学校から1年間離れるということ。今まででは学校という生活世界しか知らなかつたが、それとは別の生活世界に出会う、入る、体験するということです。その中で何かに気づくんだろうと思います。何か問題に気づく、生き方に気づく。疑問を持つ。そのことが人生の節目をつくるだろう。そしてまた「おとなになった」という意識を持つだろうと考えるわけです。そういうふうに考えるようになったわけを短くお話しします。

近代になる前は、どの社会にも成人式がありました。日本にもありましたし、アフリカにもありました。それは子どもから一人前になる儀礼というものです。それをイニシエーションと言っていました。国によって違いますが、一つの試練をくぐるわけです。その試練をくぐり抜けた後、その人は一人前とみなされて村の儀式に参加する、おとなへの資格を得るようになったと思います。日本でも、武士の場合で言えば元服がございましたし、庶民の若者で言えば若者組に入るということがありました。先ほど小沢牧子さんのはうから話がありましたが、農村の男は1俵の俵をかつぐということ、それは生産労働と結びついて大事な資格としてあったように思います。僕が二、三度行ったアフリカでは、割礼という儀式がありました。男の場合も、女の場合もそれぞれ割礼ということがありました。今これは、衛生的でないというヨーロッパ衛生文化の影響もありましてだんだんすたれてきました。でもこのイニシエーションという儀式を通過することを通して、一人前の仕事ができるようになる。そしてそれは労働と生産と結びついていたのだろう。また、結婚の資格を与えたように思います。

うんと大ざっぱに言いましたが、そういう意味では前近代は、おとなになるための文化装置というものを持っていたと思います。ところが、近代化というのはそうした前近代のおとなになる文化装置を壊してきました。一方、新しいおとなになるための文化装置をつくり出すことはできなかったと思います。

その一つの大きな原因は学校だと思います。学校は、限りなくおとなになることを延ばしていました。かつては小学校を卒業して働きに出ましたが、今は、高校、あるいは大学、さらには大学院というふうになってきている。そして子どもたちの在学期間が長くなるにつれておとなになる年齢が引き上げられているように思います。たとえば心理学を見ますと、心理学は限りなく上限を上げているのですね。青年期というのは、青年前期、青年後期と分けていくわけです。そして青年期はずっと上に上げていく。そういうふうに学校というものは、おとなと子どもの境目をなくしたと僕は思うんです。卒業証書は成人式の代わりにならないと考えます。こうした学校がおとなと子どもの境目をなくしていった大きな一つの仕組みになっている。

もうひとつは、「おとなになる」ということは「責任を取る」と

おとなになるための  
文化装置を壊してき  
た近代

いうことの意識と結びついていたと思います。20歳になるとタバコを吸っていい、少年法の適用から除外される、刑罰を受ける。18歳には結婚してもよろしい。そういうふうに年によって責任を取る年齢が違っている。つまり近代化というのは、人間の各側面を個別化してバラバラにしていったと思うんです。総体としての人間がおとなになった、子どもになった、その境目を持つということでなくて、各側面を細分化していったように思います。そのことによってかえって人間全体が見えなくなってしまった。日本の場合にはその上さらに産業化が進んで、「生産労働からの遊離」という問題があると思います。具体的には物づくりをしなくなった。それもおとなと子どもの境目を曖昧にしていったと思います。

### 「旅の教育学」

近代化、そして日本は、おとなと子どもの境目を曖昧にしてきた。僕はそれに対しても、「1年間旅に出す」という方法を取ったほうがいいだろう、「旅の教育学」というものを考えるんですね。

モンテニーによるエッセーは、旅に出て自分が何に出会って何を発見した、そしてどのようにおれは成長したかというエッセーでもあるわけですね。日本にもそういう時代はありました。ことわざで言えば「かわいい子には旅をさせろ」。旅というものは、人間を人間たらしめる大きな契機をつくると思います。

私のゼミにいる学生が1年半フランスに行ってフランス語を勉強したわけですが、フランス語を勉強したこと以上に、向こうに行って何に出会ったか。フランスに行って日本の部落問題を調べたり在日朝鮮人問題を聞かれたりする。日本にいたときは何も関心なかった日本のマイノリティの問題をフランスに行って逆に気づかされた。フランスの学校でそれをレポートしてくれといわれて勉強し直す。

旅というのは、いろんな形で問題を発見させるというふうに考えるわけです。そういうふうに思うと、一度は学校から離れ違った世界に入る、そして違った生活世界を体験することが必要であると思います。

違った生活世界の中で日本の若者に一番行ってほしいのは、アジア、アフリカ、ラテンアメリカです。この日本の便利な消費社会に慣れきった感覚は、たとえばアフリカのケニアの農村に行きますと、夜は真っ暗ですし、もちろん水洗便所はありませんし、肉はお客様が来たらニワトリをつぶして出すもの。そして真っ赤な土の中で、そこで働くとは言いませんが、暮らすことも一つの方法だろう。ある

いは、障害者の施設で1年間一緒にボランティアとして生活をともにするということもあってもいいと思います。私の息子の1人はアトピーでずっと苦しんで、1年間寝たことがあります。病気も旅の一種だと思います。

そういうふうに18歳になったら何らかの形で、一度、スクーリングの世界から離れて違った生活世界に入ることが、今、日本の若者にとって必要だと思います、もちろんそのためには前提がある。高校は全入にする。今のような制度じゃなく、小学区制をとる。今の高校の教科書は難しいから僕は何もわからない。あんな難しいのは、みんな忘れるために勉強しているわけでしょう。あれはもっとやさしくすればいいんですね。

僕の世代は勉強をしない世代だったんです。敗戦の前後を小学生の高学年から中学生でしたから。学校でも教えることは変わりましたね。そういうのが2、3年間続いた。授業がなくて学校があるという時期を僕は何度か体験しています。大学生の頃は、1950年前後でしたから学生運動はにぎやかでした。学校に行かなくて街頭で学ぶ。安保闘争もそうでした。それから、僕が教師になってちょっとして大学闘争があった。そのときも1年間勉強しなかった。つまり、学校で授業をするなんて大したことじゃないんです。授業の外でいっぱいいろいろなことを経験して議論して勉強する。今のように学校の授業第一主義から解放されたほうがいい。でも個人個人が解放されるのは大変ですから、制度として、金持ち日本ですから、1年間、すべての若者はどっかへ旅に出るということをやってみたらどうか。そういう空想的なプランを描いているわけです。

司会 前に、第一委員会のメンバーで会議が終った後、ビールを飲みながら話をしたときに、小沢有作さんが「18歳になったらアフリカにボランティアに強制的に行かせなくちゃ日本の若い者はだめだ」みたいな言い方をされたんです。そのとき、ちょっと違うなという話で、いろいろ議論になったんですが、今のお話で、ああそういうところからの発想なんだなとわかりました。ただ、当の若い人々は、今のそういう提案をどう考えているか、ぜひあとでフロアにいる若い人々からも意見をもらえたならなと思います。

三番目に、子ども代表ということで、現役の高校2年生3人に話してもらいます。

子どもから見て「おとなになること」はどういうイメージでとらえているか、子どもとおとのの違いはどんなふうにとらえているか、思っていることを自由に話してください。

## 子どもから見た『おとなになること』

### ① 吉岡 由紀子（高校2年）

私が思う「おとなになること」を思ったままに話したいと思います。

私が小学生のときは、おとなになると仕事をしたり、一人暮らしをしたり、自分のしたいことができるから、早くおとなになりたいと思っていましたが、今、高校生になってみて、おとなになるのが近づいてくると、わからなくなっていました。高校生は今大半の人がお酒を飲んだりタバコを吸ったりしています。アルバイトをして自分の自由なお金ができる。みんないっぱいお金を持っていますね。友達と遊んだりするときも、高校生なのにブランド物の洋服を着たりバックを持ったり、指輪とかイヤリングもいっぱい付けていて、おとなと同じような暮らしをしています。私にとっておとなになることが近づいている今、おとなになることは何なのか、おとなと同じような生活をしているから、おとなになることが何なのか、今は全然わかりません。

今の状況では、自分の行動に責任をもてるようになったときがおとなになることじゃないかなと私は思っています。

### ② 松下 紀子（高校2年）

「子どもの成長したものがおとな」というふうにとりあえずは言われているかもしれないんですが、私は一口にはそうは言えないと思っています。確かに常識とかが身についたり、さっき吉岡さんが言ったように、自分の行動に責任がもてるようになったらおとなと言えるんじゃないかなと。大まかに言っちゃえばそうなんですが。でもそういうおとなにとりあえずなったとしても、そこが終わりではないわけだから、生きている限りはおとなと子どもの区別なく永遠に成長していくんじゃないかなと思っています。おとなというの

は確かに年を重ねているし、経験豊富であっても、生きてきた時間が長いからいいとかいうのではなくて、もしかしたら子どものほうが豊かな考えを持ったりしているのかもしれないし、だからあまりおとなも子どもも変わらないと思う。とりあえず年の開きはあるけれどあまり変わらないと思うので、どんなに若くてもそれ相応の権利はあるべきだと思います。

### ③ 松本サト子（高校2年）

私は高校生なんで、おとなと子どもの中間点にいる立場だと思いますが、私が高校生として責任のもてる行動をするときは、精神的にも自分は大人だと思っています。でも、学校にいかせてもらっていることとか、経済的なことはみんな親に頼っているので、そういう部分では自分が未熟だと思いますし、結局はあまり自分に責任がもてていないのかなと思うときもあります。

これは小さいときの話ですが、自分が小さいときに親とかほかのおとなから抑えつけられていたので、今自分が年をとるにつれて抑えつけられていたときのことを思い出すと、抑えつけられていたときがおかしいように思うんです。小さいときは自分の言いたいことも言えなくておとの意見に流されてしまう子どもだったので、今現在自分の意見をもつと、そういうおとなたちって何だろうと思います。

あまりよくわからないんですが、これからおとなになる自分にとって、おとなって本当によく理解できないです。

## 学校は、「おとなにしないところ」

佐々木 賢

最初の味岡さんの発言のポイントは、要するに子どもを子ども視しないで対等な関係で見ようということを提唱していらっしゃると思います。小沢有作さんのポイントは、ちょっと突拍子もなく聞こえるかもしれません、旅というものを契機にして、おとなと子どもを区別していいのではないか、旅の意味があるのではないかという提唱だったと思います。お二人はおそらく対立するであろうとい

う司会のほうの予測だったんですが、私はどうも対立という具合に感じないのですね。味岡さんのほうは、日常レベルでのおとなと子どもとの問題を言っていて、有作さんの方は制度としてそういうのを一つポンと入れたらどうかというお話だったろうと思います。

高校生の三人の方がお話しになつたんですが、そのポイントは、吉岡さんの「おとなと同じ生活をしている」というところが現代社会の一つの特徴で、これは最初に小沢牧子さんからありましたように、現代社会はおとなと子どもを区別しているが、どうも実生活の中では同じようなところにいる。あるいは子どものほうが映像の問題とか音楽の面では、おとなを上回っている面も出てきます。パソコンなんか見ていますと、子どものほうが早く覚えるというようなことがありますね。

松本さんは責任ということを優先的に考えていらっしゃる。松下さんからは、人間いつでも成長するのだからおとなと子どもと区切るのはどうもよくわからない、同じ権利をもっている者としてずっと成長し続けるものだという発言がありました。そこでも区切りがあまりはっきりしない。区切りがはっきりしない社会にいるということを我々は踏まえておいて、小沢有作さんの提案を考えたほうがいいのではないかと思います。区切りをきちんとつける旅ということ。

これは非常にいい提案ではないか。実現しなくとも、そういう発想がどうしても必要なではないかと思います。それは味岡さんのおっしゃったような意味の「対等に見る」ということにも通ずることだろうと思います。

私は定時制高校の教師をしていますが、今、定時制の生徒の半数近く、あるいは3分の2くらいが全日制を中退して定時制に入ってきた人たちです。その中退した生徒たちの話を聞いてみると、学校のイメージがおとのイメージと逆転しているんですね。学校というのは「拘束するところ」というイメージはもちろん持っているのですが、「おとなにしないところ」ということをきちっととらえていく。学校というのは、麻薬の中毒にかかっているように学校にとらわれているというようなイメージで、本当は抜けよう抜けよう、中退しよう、中退しようと思っていたけれども、そのきっかけがないのでズルズルぬるま湯につかっているように学校にいて、もうすぐ卒業だというので思いきってやめてきました、なんて言ったりす

る。やめた理由が「そこに学校があるからだ」というだけで、他にあまりなかつたりする。そういう生徒が増えてきているんですね。

松下さんの発言の中にありました、「人間は成長すべきもの」という考え方があります。学校を卒業しても成長すべきものと。それはそれでいいんですが、今、生涯学習とか生涯教育とさかんにいわれます。初めは「生涯教育」という言葉を使ったのですが、「学習」という言葉に切りかえたのだそうです。自ら学ぶ、そういう姿勢を全国民がつくれと。そういうわれると、何かいやな感じがしてくるんですね。学校を卒業してもまだ次の課題があって、まだ一人前ではないぞというような、そういう問題が出てきているのではないか。

### 『おとな・子ども』を考える時の3つの問題

さて、旅ということが一つ非常におもしろい到達点だと思いますが、どうも今の社会は、到達点を無限に引き延ばそうとする、そういう作用が働いている。

「学力」という言葉、これは日本にしかないんだそうですね。英語でもフランス語でもないんだそうです。勝手につくった「学力」は、学校の中での資格を得る可能性みたいなことです。これから「学力」という言葉をもうちょっと広くして、いろいろな職業資格を取る能力まで広げていくのではないかという感じがします。

私は生徒に労働現場の話を聞くことが多いのですが、労働現場で年老いた工員さんたちがとにかく研修が多くなっているというんですね。新しい機械が入るとまた研修に行ってこいといって、うちの生徒の若い工員さんをつかまえて「わしはもう疲れたよ、教育には」と言っているながら、次から次へ研修に行かされる。「おまえ学校に行ってるんだろう。学校に行っている間は、教育させられることに慣れる忍耐力を養うのだから、覚えなくともいいんだ。どんなに教育させられてもそれに耐える力だけはつけておけ」、そういうことを言う、と。これは時代を非常によく象徴することで、徹底的に教育し尽くす社会を言い表わしている。私は、それを拒否する姿勢をどこかでつくらなくちゃいけないんじゃないかなと考えています。

時代はどんどん変わりますから、教育する課題は次々出てくる。新しいME化がどんどん進んでいます。新しいものに適応したとたん、もっと新しい機械が出来まして、それを勉強せいと言われる

① 課題を与えられて、その課題に対して到達したらおとなになれる、そういうイニシエーションの問題について

んですね。年とった人たちがそれに適応できなくて右往左往して、雑務的なあるいは窓際的なところに回される。非常につまらない後半の人生を送るのを、「ミスマッチング」と言いますね。そのミスマッチング現象がどんどん起こってくる。そうすると、今まで一人前だったが、これからは違うよと、一人前の基準が逆転してくるわけです。コンピュータをやっている人は、30代が終わるともうお払い箱だとか、そういう時代に入っている。これは技術革新の方向性の問題としてちょっと疑問を出しておかなくちゃいけない。人間の尊厳の問題としての、到達率の問題ですね。

## ② 中央集権化している社会の中の問題について

次に、社会が中央集権化している問題です。これがくせ者で、中央集権は当たり前として見ている。そうしますと、若者たちが栄えるものとしてみんなから注目されるチャンスが少なくなってくる。昔は、4斗俵をかつげるとか、田植えだったら1日ができる労働ができたら一人前というのがあって、その中の1俵かつげるのが2俵同時にかつげたやつがいたりするとウォーとみんなが注目した。小さい地域だったら、注目される若者がたくさんいるわけですね。ところが今、注目されるというと、東大か何かに入る、野球で甲子園に出る、テレビタレントになるとか、注目される若者がほんの少数なんですね。これは地域社会、つまり分権社会が崩壊して中央集権的になってきているからだと思います。これを巻き返して、その地方で分権化して、ちょっと何かの面で秀でたりするとそれを讃めたたえるような小社会がたくさんつくれないものかと思う。それは小さなコミュニティの発想でもいいし、あるいはネットワークみたいな発想でもいいから。要するに大きいのはだめ、小さいことはいいことだというような発想で何かやっていくということですね。

## ③ モラトリアムの問題について

最後にモラトリアムがあります。これは強制モラトリアムになっていますので、どっちみち強制だったら小沢有作さんに大賛成なんですが、旅をさせるというのはどうか。強制モラトリアムを逆手にとって。生産性にとって直接意味のないことをする期間について、私は『教育という謎』という本の中で既に同じことを提案しています。変な言葉ですが「モバレイ」という言葉を使っている。「モバレイ」とは何かというと、「モラトリアム」の「モ」、「バカンス」の「バ」、「レイ」は「レイバー」です。これを若者たちに、1年と

はいわば、5年とか10年くらい生産力に応じて与えてはどうか。

「モラトリアム」というのは、ボワーッとしていてもよろしいという時期。ただ、国家がその期間生活を保障する。「バカンス」は、遊びですね。生産ばかりやるのではなくて。うちの生徒なんかサーフィンのハワイの大会に行って優勝したと生き生きしているやつがいますが、そんなのだっていいんじゃないか。おとなが生産指向になり過ぎているのではないか。もう一つは「レイバー」で、これは、旅をして外国に行ってもいいけれども、都市の人間は農村に行ったらどうか、山にいったらどうか。山とか農村の青年は都市へ来てとにかく1年間、これは国家の費用で生活してみる。そこがよかつたらずつとそこにいてよろしい。自動車整備工がやりたかったら1年間やってみる。ずっとやりたかったらそれでもいいし、やめたかったらスッとやめてもよろしい、そんな期間。だから幅広いモラトリアムの期間を設けてはどうかという提案を、まさに空想的ですが、小沢有作さんのおっしゃったことに非常に似ているわけです。そういう形のものは国家が用意してもよからうではないかと考えた。

時間がなくなりましたが、今、資格社会に入ってきて、学歴資格は大したことなくなってきていると思うんですが、職業資格は猛烈に増えている。その資格には二面性がありますが、資格試験だけはやたら難しくなっていくけれども、資格を取るときに勉強の内容が実務・実益な労働からは乖離する方向にある。その問題、先ほど言いました技術革新の方向性の問題、人間能力の発揮の場面の問題、それが乖離状態になっている現代社会をきちんと押さえておかないと、「おとなになる」ということの概念もはっきりしないのではないかと思います。

## 討 論

司会 佐々木さんには発題者の話もまとめていただいて、これから自由討論の参考になるポイントを整理していただきました。

これから1時間余り自由にいろいろな意見を出していただいてこのテーマを掘り下げていきたいと思います。第一委員会がこういう夜間の公開研究会を設けているのは、さまざまな立場の意見をたたかわせながら教育を考えていきたいというところにありますので、

積極的なご発言をお願いします。

大学生になると  
「おとな」か？

**男性A（青年）** 僕の行った高校では、教員採用試験があって、その学校の先生になりたい人は、必ず高校生や中学生を相手に授業して、生徒の方が感想文を書いて、先生を評価するというのを一つの大きな柱にしているんですね。その教員採用試験に大学4年生が来た。授業のとき、「子どもたち」という言葉を、まだ22歳なのに、何回も何回も連発するという話を聞いたんです。

人によって違いはありますが、大学生になると「子どもたち」と「私たち」というふうに完全に分類するような気がしてしようがないんですね。

僕自身は中学2年生のときに何日か学校に行かなかったという理由で、戸塚ヨットスクールみたいなところに行くことになって、その後、学校には絶対に行かなくちゃいけないんだ、学校に行かなければ生きていけない、一般社会の中にいることはできない、学校というものは絶対のものなんだというふうにずっと思ってきました。自分の中におとなのイメージが小さい頃からあって、小さい頃、20歳になつたら車の免許が取れる、みんなができるなら自分でも簡単にできるんじゃないか、別に努力しなくともその年齢になつたらいろんなことができるようになっていくんじゃないかとずっと思っていたけど、僕は今21歳になりますが、いまだに車の免許も持っていないし、親に頼りきりで生活しています。大人になるとは何なのかわからない。

先ほどそちらの方が、おとなになるのが心配というか不安だと話していましたが、こういうふうなのがおとなだ、こういうふうにならなくちゃいけないという既定のイメージが頭の中にあると思うんですね。でも、僕みたいにいいかげんに生きてきても、年齢はおとなになる。僕は一般的なイメージで、責任を取るとかそんなことはとてもできる人間だと自分で思っていましたが、それでも一応おとなとして扱ってくれる人は扱ってくれます。

**小沢 牧子** 私は実は、きょうこのテーマがあるものですから、授業の中で学生の人たちに、自分をおとなと思っているか、子どもと思っているか、答えてもらったんです。その結果を報告してみます。

大学生のうち、10対7くらいで「自分は子どもだと思う」という

ほうが多いです。数比でいうと10人が「まだ子ども」、7人くらいが「もうおとなだと思う」あの7人くらいが「おとなと子どもとそんなに分けられると思わない」というさっきから出ている考えをもっています。大学生は、自分がおとなだと、あまり考えていないんじゃないのかと思うんです。

さっきのかたが、大学生になると突然「私たち」と「子どもたち」と身分を分けると言われましたが、それは教師になる大学生だったんでしょう？教師になるということは、「自分はおとななんだぞ」とはっきり定義することで、自分の身分をそういうふうに立てる。教師はたぶんおとの代表。子どもの代表は生徒です。だから、「子どもーおとな制度」というのは、いまは学校制度なんだなと思いながら聞いていました。大学生は必ずしも自分をおとなと思っていない。ではおとなって何だと聞いたら、経済的自立と思っている。そういう結果だったので、一言ご報告させていただきます。

**男性B** 旅に出るということに関連して話させていただきます。ついこの間までアフリカに2年ほど住んでいました。その前も東南アジアをフラフラ旅をしてきたので、そのことでお話をさせていただきたいんですが、西アフリカで見てきたところでは、「おとなになる」ということは、私の主観も相当入りますが、まず一つは分別があるということです。これが全体にかかるんですが、ちょっと露骨な言い方ですが、まず生殖能力があるということ。それから戦闘能力がある。それから生産力というか稼ぎというか食料調達能力がある。この三つの能力がおとなと子どもを分ける境に、アフリカではなっているんじゃないかという気がします。成人式とおぼしきもので知っているのは、西アフリカ・ガーナのクロボ族の女子の成人式なんですが、この子が生殖能力があるよということが認められるとおとなになるんです。つまり、初潮を迎えて何年か経った後の最初のお祭りのときに、民族衣装を着ていわゆるおひろめになるわけです。男の場合はその機会に出くわしていないですが、昔の部族間の戦争で戦闘能力が十分あって、なおかつ家族を養えるだけの食料調達能力があるということが一つの目途になっていると思います。

現在の日本を考えると、食料調達能力がすごく曖昧だと思う。先ほどもお話をあったように、おとなでも子どもでもスーパーに行っ

アフリカで2年間過して感じたこと

て買物をしてくれればいいわけですから。食料調達能力という意味では、80幾つの人と、3つ4つの子どもと大差ない。ところがアフリカにおいては、狩りをする、畠でキャスターを採る、ヤマイモを採るという意味では、おとなと子どもの境がどうも日本では曖昧になっている。社会的な面が大事だと思うんですが、そういう意味で危機管理能力というふうに置きかえると、比較的日本にもあてはまるかなと思います。

今、日本はなにもないからいいんですが、私が旅したところは、雨が降らなくて、餓死者がもしかしたら出るようなところ。そういうときにどうすればいいか。関東大震災から69年目ですから、科学的にはそろそろ大地震が起こってもいいはずですね。そうすると地震が起きたときにどうなるか。子どもだと分別がないし、危機管理能力という意味では多少おとなに劣るのかな。

危機管理能力が十分にあるかないかというところで今の日本では、判断せざるをえないのかなというがアフリカで2年間過ごしてきた私がいま感じていることです。

なぜ、18歳で強制するの？

味岡尚子 先ほど小沢有作さんが、18歳になったら旅に出るといわれました。旅に出るというのは、物理的な旅に出るというか、自分を見つめる期間とおっしゃったんだと思いまして、それには私もとても共感したんだけど、18歳になったらというところがやっぱりひっかかる。おとのとの境目を18歳と決めるというところが……。

人によってはそれが16歳くらいでもありうるだろうな、10歳でも、区切りをつけたい人がいるかもしれない。逆に私は自分を考えるとそれが25歳くらいのときだったかなと。25のときではあなたは遅すぎちゃうと言われると、それも困っちゃうなと。私は私のことをとても好きだから、自分のいろいろ変化するのが好きです。それを否定はしたくないから、「おとなになったと思ったときに」と言ってくれるとおさまるという感じがすごくして、ちょっと一言言いたくなりました。

司会 18歳という線引きはどうして出てくるのですか？

いろんな人や物と出会って自分を見つめ直す

小沢有作 その気が起きたときに勝手にやればいいのだったらこんな議論は必要ないんですね。もちろん一人ひとり、おとなと子どもの境目は違いますよ。でもやっぱり制度化ということを考えて、

おとなと子どもの境目の制度をもつ、ちょっと格好よく「文化装置」なんて僕も使い慣れない言葉を使っていますが、それは僕はあったほうがいいと思っているんです。区切りでね。日本はお金持ちになりましたから。18歳というのは、学校の問題にとらわれているんですが、高校まで行ったら、その後、1年間、一つは学校から離れる。もう一つは自分の家、家族から離れる。そこでどんな生活をしてもいいと思っているんですね。

僕がアジアとかアフリカと言っているのは、若い人たちには、たとえばトイレは水洗でしょう。ニワトリをつぶして食べるということも知らないでしょう。夜は真っ暗であるということも知らないでしょう。それから川でトイレをすることとか、畑を耕してみる。物が金で買えないところがいっぱいあるんですね。僕のところの学生の話で言えば、外国に行ったときでも、都市だったらどこでも歩ける。でも、村とか野原になったら、もう歩けない。僕もそうですが、自然から離れている。

今の日本の我々は、産業化されて自然の生物世界から切れている。僕なんか年を取りましたからしようがないけど、若いうちに1度そういう体験をしてほしい。それに対して自分を見つめ直すということだけではなくて、それと同時にいろんな人と出会う、世界と出会う、ものと出会う、その中で何かに気づいてほしいんですね。

僕が旅というのは、1人で放り出され、家から離れてどこでもいいから1人で歩いてみたらどうかという気持ちからです。いろんな人や物と出会うときは、やっぱり18歳くらいだろうなと思っているんですね。感じでさしたる根拠はないんですよ。

**女性A** 小沢有作先生に質問させていただきたい。今、文化装置としての18歳の旅に出るというのを、制度として必要だとおっしゃられましたが、なぜ制度として必要なのかを説明していただきたいんです。

小さい時から親の価値観に縛られないで行動を

私は、旅に出るというのは個人的に賛成ですが、旅に出るというのも、味岡さんがおっしゃっていた親の価値観を押しつけられない、自分の思うとおりに行動するというのも基本的に同じことだと思うんです。両方とも自分の頭で考えて自分で自分の思ったとおりに行動するという意味では同じだと思うんですが、これを小さなときから習慣づけるというかそのような態度をとることができていれば、自分が思ったとおりにやって失敗したときも、自然とどんなふうに

対処したらいいかとか、どのような責任を取ればいいかわかってくると思うんです、経験上。だから、何も18歳になったからと線をつけないで、小さなときから親の価値観とかに縛られないで行動していれば、自然と自分で自分なりに行動することができるようになる。

それで私は、さっき初めに言ったように、何も18歳で制度として旅に出るというふうに限定する必要はないと思います。先生に、なぜ制度として必要なのかを伺いたいのですが。

**小沢有作** みんなに味わってもらいたいということなんですね。今、自分の判断で何とかなると言われましたが、たとえばラオスの村に行って食べ物を出されたときに、自分の胃袋が受けつけない方がいますよ。たとえばラオスの寄宿舎学校、それは長い場所の真ん中に通路があってあとはずっとたたきです。畳1畳分に、小さな箱の中に自分の物があるだけです。あとは全部共同生活なんです。

今の日本の若者は、これはだめなんですよ。大学の宿舎だって、みんな個人寮でしょう。ラオスの宿舎では、僕の場合は6人部屋でしたが、プライバシーなんて何もない。全部透けているんです。食物だって、チャーハンのたぐいも多いですし、日本の白米はないし、野菜は一つか二つで。僕も皆さんの生活も、相当産業社会化されているんですね。それは自分の判断で追いつかないんです。感覚的にどこか拒否するものがある。一度、どういうところで自分の感覚が拒否するのかということを味わってみるのもいいと思うんですね。

自分の判断できない違った世界がたくさんある。自分の判断の通用しない違った世界と出会ってほしいと思っています。日本はお金持ちですから、それは国費で、PKOに出さないで、PKOのかわりにやってみたらと思います。みんなに味わってほしいという意味で制度化ということを言ったので、別に制度化にこだわっているわけではない。

**雑木林が一番良い**

**日高六郎** 僕は小沢さんと故意に少し違った意見を出したい。簡単に言えば雑木林が一番いいと思うんですよ、日本全体の子どもたちが。サクラもあれば、スギもあれば、ヒノキもあれば、そういう状態が一番いい。すべての人に旅立たせるとか、ユートピアという思想が世界にはたくさんあるんだけど、ユートピア思想というのは、不思議なことに、すべて同じ着物を着ていたり、同じように生活していたり、同じように農業の仕事をさせたり、そういうふうになっ

ている。ユートピア思想というものはものすごく全体主義なんです。そこで、やっぱり金丸さん、ああいう政治家が存在するのは非常に貴重だと思うね。ああいう人が存在しないと政治の世界が見えないわけ。それから会社人間みたいな人が存在するというのは、本当に社会のへんなところが見えるわけで、みんなが何となく生き生きして、みんなが何か人間らしくなったら、その社会は相当危ない。それはソビエトとか東欧のように、文化装置が発達しそうでああいうことになるのではないか。だから、旅立ちたい人には旅立たせたらいいし、旅立ちたくない、やっぱり俺は東大に行くから1年ブランクしたら大変だから受験勉強をやるんだという人間は、哀れな人間だと思いつつ、そういう存在は認めるというくらいに考えていいんじゃないいか。

小沢さんに賛成なところもある。今、子どもたちが旅立てないんだ。制度的に旅立てない。たとえばこの間びっくりしたけど、近所の高校生に「1ヵ月くらい旅行に一緒に行かない？」と言ったら、そんなことしたら退学になっちゃうらしいですね。たとえば10月いっぱいアフリカに行きますよ、イギリスに行きますよということはできないんですか。あるいは私は1年間中国に行きたいとか、フィリピンに行ってみたいとか。するとその学校はその学生を帰ってきたときに必ず引き受けるだろうか。

昔は、1ヵ月とは言わなくても、1日でも、たとえば京都だったら、京都の商いをやっている人たちは、京都に歌舞伎が来れば南座に子どもを連れて行く。そういう日は学校を欠席するわけ。それに学校のほうから何も文句は出なかった。しかし今は、親は「いい芝居が来ているから昼間見に行こうや」といっても、子どもは「いや、そんなことしたら先生に叱られるよ」ということになってしまって行けない。そこら辺が問題だと思いますね。自由に旅立ちたいと思う人がいたら、それは自由にやってよろしいというようにしないと。

現実に、日本と同じくらいの国々ですが、たとえばオーストラリアの例をとると、オーストラリアの大学を出た学生たちは、たとえばある会社に就職が決まると、その会社に申し出て、私は1年間これから世界をグルグル回ってきたいと。もちろんペイはくれないです。しかし、1年間世界を回ってきたい、そのほうが私の見聞は広くなるだろう、そのことは結局会社にもプラスになると思いますから私

は行きますよと言って、実際に行っているんですよ。行って、またそこの会社に勤める。そういうことが実際に行われている。それは日本の状況から考えると驚くべきことですね。

それから日本では、会社が新卒の人間でなければなかなか採らないんだけど、オーストラリアだったら大学を卒業して3年目であろうと4年目であろうと、自由に会社の入社試験を受けることができる。日本だったら、「あなたはこの間ブランクだけど何をしていたのか」ということになって、悪いことをしていたようになっていくわけでしょう。しかし制度ということは、まさにそのような普通とはちょっと違う行動をする人間が存在していても、それは制度的に認めている。そこら辺、そういうふうになったほうがいいんじゃないかな。

僕はだんだん年をとってきて、子どもがいないものですから、自分が寝たきり老人になつたらどうしたらいいかなと思って考えていたら、一ついい案がある。それは、「すべての日本の大学生は寝たきり老人を必ず看護する」という法律をつくればいい。(笑い) それで大学生の若い男性なり女性の世話を受けることができる。それは絶対に提案したいと思っている。しかし、それも全部に強制すると問題が出てきそうで。僕は、我々の側に理想の若者像とか理想の○○像みたいなものがあるんじゃないかなと、ちょっとそんな気がしました。

おとなにならなくちゃいけないの？

**男性C（青年）** 質問ですが、おとなになるための儀式とか制度とかいろんなことを聞いたんですが、おとなにならなきゃいけないものなんでしょうか。そういう制度や儀式があるということは、子どもは18やら20になるとおとなにならなきゃいけないという義務があるということになる。おとなが子どもよりもすべて優れているわけでもないし、感受性とか思考の柔軟さは子どものほうがよっぽど優れていると思うし。おとなにならなきゃいけないと、そういうものも捨てなきゃいけなくて、そのかわり分別とか責任が生まれるんですが。おとなにならなければいけないものなんでしょうね。

**永畠道子** 私は女の立場から言えば、早く子どもたちが私から離れて生きていってほしいと切望したときがあります。いつまでもこの足手まといがいたら困るな、それは母親たちの実感ですよ。1人

で生きていってもらいたいと思うの。いつまでもご飯を炊いたりしなきゃいけない、それは早くおさらばしたい。

小学校に子どもが行った頃にグループをつくりまして、当時サロンと呼んでいたけど、そこで話し合ったことは、私たちはどうすれば自立できるかということでした。ということは、子どもを育てるのにどうしようと思ったことも全然なかったしね。そういう話を周りで走り回って子どもたちは聞いていたのです。自然にそれは染み込んだらしい。19歳で家を出て、20歳でインドを放浪しました。そういうふうに親が思っていると、自然に伝わるんですね。ところが、そういう思いを持っていない親もたくさんいる。だから18歳という区切りが出てきたんじゃないかなと私は思います。

さっき、「国家が」と。そんなうまくいくだろうかと私は思いました。今の政府は絶対にやらないでしょう。だけど何かそういう一つの区切りはどこかであったほうがいいような気もしています。でないと、骨の髄までかじる子どもがいっぱいあふれていますね。親の立場からしたら、これは痛切な問題でもあるんですね、正直言って。とても愛とか何とかでごまかせるものじゃないんです。やがてその愛がものすごく変形していって、離れられない母子関係とか父子関係が出てくるんです。

男性D では「おとなになる」とはどういうことなのか、その辺が全然はっきりしない。「おとなしい」という言葉があるでしょう。「おとなしい」というのはどういうことか。「おとならしい」というのと意味が近いんじゃないかなという感じがする。「分別がつく」という方があったでしょう。字はどういう字を書くかわかりませんが、なんとなくそんな感じがするんですよ、感じとして。つまり、聞き分けがあるとか、チョロチョロしない。そういうことも「おとなしい」でしょう。「おとなになる」ということに近いんじゃないですか、意味としては。おとなは聞き分けがある。残念ながらずるいし。いろいろ手練手管を使って子どもをだますから。おとなというのはそういうものだというふうになると、ちょっと感じが違ってくるんですけども。

そういう点から言うと、私は中学校の教員ですが、単純に20年前の中学校2年生と今の中学校2年生を比べると、たとえば一つのテーマについて話し合うということで言えば、20年前はこちらで何の手も出

「おとなになること」は、自分で稼ぐこと？

さずにそれらしいテーマがあれば話し合いができた。今は全くできません。幼児化とか何とか言っていますが、普通の話し合いさえできないようにだんだんなってしまって、ますます一人立ちできないという状態になっている。だから小沢有作さんのような発想が出てきて、それがなんとなくいいみたいに思えるようになると思うんですがね。ただ問題は、小沢さんが言われるようなことが仮りに制度ができたとしても、親が承知しない。そういう制度をつくるということ自体、危険なことですよね。徴兵制とダブって見えてしまう感じがするので、制度化の問題は勘弁してくれと思う。

私が子どもの頃でも、たとえば私は疎開して農村で中学生の途中まで生活しましたが、1日1反歩田植えができたらおとなと認められた。つまり一人前のお金をもらえた。そういうことが実際にあった。そんな大昔じゃない。それは仕事の面でおとなとして認められているわけです。区別はどこでつけるかといったら、働いて自分で暮らしが立てられるかどうか、大ざっぱに言ってそのあたりじゃないか。おとなであるかどうか、その区別みたいなものをするすれば、そのあたりじゃないかなという感じがしているんです。

それが、さっきから指摘されているように、限りなく学校社会が延長されて、労働という機会がない。小学生は児童で、中学生と高校生は生徒で、大学生は学生ですね。生徒は児童と学生の中間で、おとなと子どもの中間みたいなところに位置しているかと思います。その段階で、別に年齢は区切らなくてもいいと思いますが、いずれにしても、旅じゃなくても働き出すということがあって、もう1回学校に戻りたい者は戻れる、もしつくるのだとすればそういう制度のほうがいいんじゃないかという感じがします。

**男性E** 自分を振り返ってみて、自分が本当におとなになったなと思うのは、ある一つの秩序に入って、言いたいこともある、やりたいこともある、しかしあるときずっと我慢してその悩みをどういうふうにプラスの方向にしていくかと悩んだときから、おとなになったような気がするんです。

それから国家の費用で送る、それも強制になると私はまずいと思います。強制でやったとしても、国家の金ですよね。人の金で旅行しても、若者は成長しないと私は思う。私は1ヵ月ほど中国に行つてきましたが、日本の若者は、ほかの国の若者を圧倒するくらいの勢いでたくさん行っていますよ。たくましいものです。日本の学校

の中でなかなか行けないという制度があって、それはどんどん取りはずしていかないかいけないと思います。思いますが、たとえ国家がそれを手助けしたとしても、国家の金で現地の人たちの好意を無視したような形で平気で無責任旅行をやるような形になるとまずいと思う。自分で働いて、そのお金をどういうふうに使うかという责任感みたいなもの。その责任感みたいなものを持った、おとのの悩みを知った上での旅行であれば、どんなに若くても意義のある旅行になるんじゃないかと思います。学校の途中で働きたいと思ったら、また戻ってくる。あるいは、行かないよりはいいということであれば、親の金でもいいでしょうね。ただそれだけではおとなになれないと思います。

先ほどの大学生の方が、大学生になってからおとなになったような気分になったというんですが、実際に自分で働いて大学にお金を出して、いっているのであれば大丈夫だと思うんですが、親の金で行っているうちは、まだおとのの悩みを知らないんじゃないかという感じがします。あわせて、自分の言いたいことを殺すという悩みを持ったときから、いい意味でのおとなは始まるんじゃないかなという感じがします。

松下（大学生） 今の方が「稼いだらおとなになる」と言いましたが、私の友達も、短大を卒業して働きに出て稼いでいる人が多いですが、家に何万円か入れている人もいるし、全く入れていない人もいる。稼いでいるといっても親と共同生活していて、「結婚したり彼氏と一緒に暮らしていくまで家を出る気はないわ」という子もいて、稼いでいるといつてもずっと親に養ってもらっている。稼いだからおとなというわけでもないなという気がします。

もう一つ、「責任がとれるようになる」ということも言われています。私も一人で責任が取れるようになるようにと言われていましたが、ではおとなが責任をちゃんと取っているのかな、おとなが「取りなさい、取れるようになりなさい」と言いながら、責任を取っているのかなと思うと、取っていないと思うんですね。たとえば戦争責任とかでも、取りきれない範囲のことをやったり、いろんな形でいまだに「取った」「取ってない」という議論があるくらいだから、私もそこで責任を取ればおとなになるということでは全くないと思ったんですね。そう考えていくとおとなと子どもの境というか、「おとなになる」って何かなとますます思えてくる。

「おとな」という  
ゴールはないような  
気がする

私は、「おとな」というゴールはいつでもないような気がする。私がおとなになりたいと思うときは、自分がこういう人間になりたいと思う像を追いかけているとき。追いかけているのが「おとなになる」ための作業である。一般に、子どもを産んだらおとなとか、子どもを産んで一人前とか、家族を持ってとか、いろいろあると思いますが、そういうおとなというよりも、自分が「こういうおとなになりたいな」というものに自分の中で近づいていって、自分でおとなに少しあなたになったかなと考える。私としてはそんな感じだと思うんです。私は、アルバイトの上でも子どもとばっかり接して、小学生の子どもをいっぱい知っていますが、自分は子どもと何も変わらないでいるなと思っています。

18歳になつたら子を  
家から追い出す

**女性B** 私は18歳で息子を自立させたというか、巣立ちをさせました。18で自己資金をあげて、アパートを借り、そこに追い出しました。それを10何年前に考えたときは、こういう皆さんと議論する場もなかつたし、同じような考え方を持っていて話し合うという人々もいなかつたものですから、たぶん親として巣から追い出そうという本能的なものだったと思います。それを「18」と私も考えた。18というのは、自分で学校教育に対して「大したものじゃない」という気持ちと、学校教育を当てにしない気持ちと、大学というものを無視したような気持ちと、そういうものがいろいろあったんですね。18歳で実際に自立資金をやって、どういうふうにこれを使って生きていこうとも構わないけれどもこれで自立しなさいと。10年前にこういうふうに皆さんと議論していたら、変わっていたのかもしれません。

一つ伺いたいんですが。私は18で息子を出したんですが、18で出す前に、10年間くらい子どもとの対話がある。18歳で出ていくんだよと、子と親の間で、そういうふうにはばたいていけるだろうかと考える時期があるわけです。「18歳だよ、18歳だよ」と言う時期が必要だったんです。18歳になったときに18歳で「はい、出ていきなさい」と言っても、それはとても難しい問題じゃないかと思います。

**日高六郎** いわゆるヨーロッパやアメリカの例ですが、18歳で子どもを家から出すというのはほとんど社会通念になっているわけですね。大学生になれば、女の子であれ何であれ、1人でアパートで生活させるようにする。それは社会通念です。向こうでは子どもに

対しての誉め言葉は「インディペンデント（自立）」ということです。

日本だったら、たとえば自分の娘であれば、「私の娘は本当にまだねんねですよ」と、まだ子どもだ子どもだと言っているのが日本のおとの子どもに対する誉め言葉になっている。そこら辺の子どもに対する感覚、あるいは人間というものに対する感覚は、相當に違うと思います。

しかしヨーロッパやアメリカがそれですべてよろしいかといえば、その中でまた精神的な葛藤が起こったり、いろいろな問題もあちらにはあちらとしてある。

しかし僕は、さっき雑木林と言いましたが、ある意味では、たとえばイギリスならイギリス、フランスならフランスという社会は、雑木林的ではなくて、おとなと子どもの関係についてある種の社会通念がある。日本にもその社会通念がある。その社会通念と社会通念との差はかなり大きくて、ある意味ではショッキングなことにたびたびぶつかるわけです。それはむしろかなり不自然なことではないか。父親なり母親が自分の子どもはどうやって育てるかと考えるときに、自分の子どもたちは自立ということを一番大切なものとして教え込んでいきたい。今おっしゃったように小さいときからそれを教え込まなければ、18歳になってポンと出したって、それはどうしようもない。そういう価値観的なるものを持った親がかなりたくさん存在する。しかしそうでない価値観を持っている親もかなり存在する。一つの国の中でさまざまな価値観が存在していて、その価値観を親たち・子どもたちが自分でどちらがいいか選択するという形のほうがむしろ健康だと思いますね。

どちらかといえば日本の若者たちは、小沢さんが心配されているとおりに、本当に子どもたちが自立心を失ってしまってきているという全体の状況がありますから、僕は、18歳になったら子どもは必ず家から出るというような考え方を持った親がたくさんになることを期待したいんですがね。

ただ、それをまた学習指導要領的に全部やっていくということに関しては、抵抗があるんですね。そういうのは全部我々がそれぞれ考えたらいいんじゃないいか。それは親の子どもを育てていく選択として、自分の家は厳しくやりますよと。しかしある親はメタメタに甘くて、そういう親がいて、それで失敗する結果が生まれても、それは社会的に、ああいうふうに育てるとああいう子が生まれる、と

なりますから、それはそれでいいじゃないか。そこら辺、学習指導要領的に何か一つのパターンにするというよりも、こういうパターンがあるよということをみんなに宣伝するほうが積極的な気がいたします。

## 「自立」は心の問題

**女性C** 人間は環境の動物だと思う。環境との兼ね合いの中で自分をどう育てていくかという問題だと思います。たとえば、アフリカでのおとなの方と先進国でのおとなの方は、社会の適応性からいくと違っていると思います。基本的には同じだと思うんですけども、どういうところで生きていこうとするのか。アフリカで生きていこうとすればアフリカ的なおとなの方があるし、先進国で生きていこうとすればそこでのあり方があると思います。先ほどおっしゃったことは、心の問題だろうと思います。心がおとなにならなきゃいけないということじゃないかと思います。生物としてはいやでもおとなになっていく。またその中で生きている社会の枠組もあって、枠組の中でおとなとされてしまうわけです。

たとえば私の友人のお嬢さんがものすごい腕白で、20歳になるまでありとあらゆる悪さをしたんですね。学校に幾らでも呼び出されて本当に困ったと。ただし20歳になったとたんにそれがやんだというんです。なぜかというと、「あなたは新聞で少年Aじゃなくなるのよ」と。社会的な枠組として実名が出ます。彼女はもともと承知の上でそれをやっていたらしくて、20歳になったとたんにそれをやめた。そういうことに私たちはかなり縛られていると思います。

私も子育てをしている中で、18歳になったときに娘は免許を取ったわけです。そのことで自分はおとなになったみたいな気分も少し味わったようです。今タバコを飲むことがはやっていて、18になつたらいけないのだろうか私もよくわからないんだけど、それでおとなになったような気分になっていると思います。それから20歳になって成人式をしたり選挙権をもつということで、「おとなになったんだな」という感じがあります。私も、20歳になったのだからしかたがないな、抑えちゃいけないなという思いがありまして、たとえば夜遅く帰ってくることについても、万が一何かあったら仕方がないなど覚悟を決めるようなことで親の役目をやっているような気がするんですが。

子どもというのは、大きくなっていく中で「独立したい」という

気持ちはあると思います。1歳過ぎから既に反抗期というのがあって、反抗していって親の支配から逃れようというか、自分が考えて自分で動きたいという気持ちがあるわけです。これは生きていく力だと思いますが。これらは、どうやって育てていけるかという問題、これはおとなとの問題でもあると思いますし、また思春期にもそういう時期があり、自分の責任で決めて自分で判断して自分で行動したいという気持ちちは本来的にあると思います。「自分で生きていくているんだ」という思いが持てるということは、おとなになることじゃないかと思います。ですから、心の内面としてはこのまま残しておいていただきたいと思います。ただし外側はどうしてもおとなにされていきますからおとなにならざるをえないが、本来自分の中に自分で生きていきたいというのがあると思います。それを大事にしてやっていただきたいし、おとなも育てていくべきだと思います。

**女性D（青年）** さっきから気になっているんですが、働くことがいいみたいな感じに聞こえて、自立ということがお金を稼ぐことみたいに聞こえたりするんですが。

私は、今、不登校の子どもの居場所で子どもたちと接していますが、本当だったら大学3年ですが、4月から大学をやめたんです。大学に行くこと自体、意味がないと感じてしまったこともあります。自分では今やっていることを仕事だと思っているんですが、実際にはお金は一銭ももらっていないんです。私にとって「働く」ということは、ほかには通じないけれども、自分が自分として生きていくためにとても大切なことですね。だから、働いてお金を稼いでいれば自立しているということにならないと思うし、今働いて福祉的なことを追求していくような職業はあるのかなと思ったら、それはまたとても疑問に感じるところなんですね。だから、働いていれば自立とか、働いていればいいみたいなのはおかしいなと思います。

旅の話になりますが、制度化すると、行かなくちゃいけないというのと同時に、「行けばいい」みたいになって、今の世の中でそういうのを制度化してしまったらきっとパックみたいなものが登場して、こういう体験ができればいい、こういう体験をしてくれば、いろいろ出会えたみたいな、そういうふうになっちゃう可能性があります。行けばいいとかやればいいという問題ではないんじゃないかなと思います。

志を持って、「おとな」に近づく

**女性E（青年）** 私はいま大学生で、自分なりに「おとなになる」ってどういうことかなとこの時間の中で考えました。私は、旅行は全然しなかったんですが、農業体験を少しやったことがあります。今まで自分が心が落ち着いてなくて、いつもやむやにしていたところがあったんですが、実際に自分で初めから物をつくりたりすることが本当に大事なんだなとその時感じました。自分の無力さというか自分の弱さみたいなのをすごくそこから感じて。自分は何も力がないけど、でもこれでいいんだなというか、今まで自分が偉いと思っていたり、自分が何にでもなれると思っていたんだけど、自分で何でもないんだと思えた、そこから自分がおとなになっていくことが始まっていたのかなという感じがしています。だから、誰かがお金をくれたりとか、いろんな制度化したりとかで旅行にいったりするんじゃなくて、自分の心で決めて何かをするとか、どっかへ行こうとするときに、本当に「おとなになる」ということに近づいていくんじゃないかなという気がしました。

**男性F（青年）** 今、僕は18歳ですが、通信制の高校に通って、所得税を払うくらい稼いでいるんです。アルバイトなんですけど。でもそのまま仕事に就くよりも大学へ行ってみたいので、そうなるとお金もいるし。18歳で生活費を稼げばいいとか、大学の学費を稼いだりするのはちょっと厳しいなと思って。家では親のつくった食事で親が建てた家に住んで、大学の学費も親に出してもらいますけど、でも自分の力で生きていこうというのは今からすごくあるので、いずれ経済的にも精神的にも自分の力で生きていくことができればそれでいいと思うんです。だから今、おとなにならなきゃとか、そういうふうにはあまり思っていません。

**女性F** 私は、「おとなになる」という言葉を聞いて今気づいたんですが、恥ずかしくない人間になる、人になることを自分の中で知らず知らずのうちに思っていたということに気づいたんですけど。皆さんはどうでしょうか。

**司会** このテーマはまだまだ話尽きないと思うんですね。前にいる高校生から一言。

**松下紀子** 今、稼ぐ話が出ているんですが、今までみんなが論じていたことを聞いていると、お金を稼ぐことが偉いといっていると思われてしまうかもしれません、とりあえずお金があればとっても便利だし、それが一番だし、何でもできちゃうとは思います。

でもお金を稼ぐことだけじゃなくて、自分のやっていることがその状況においてよい道だったり、今まで世話をしてくれた人に応えるような道だったとしたら、お金を稼ぐことだけがそういう方法ではないと思います。

だから、自分でお金を出さないで留学とかしたら、それは自分でお金を出して行つたらいいんじゃないかという話が出していましたが、自分で稼いだとしても就職するときとかは親の世話にもなるし、必ず親とは一生かかわるというか、人とのかかわりというものは絶対に断てないものだから、もしもよその人のお金で外国に勉強しに行つたとしても、自分の志が高いというか意識がはっきりしていれば、ちっともかまわないんじゃないかと思いました。

だから、最初のほうで「責任を取るのがおとなになることじゃないか」と私は言ったんですが、よく考えると、皆さんに言われると気づくものなんですが、「いい」と一概に言えることじゃない。実際に責任が取れないのももっとなんですが。「いいかげんな暮らしを僕はしちゃってるよ」みたいな発言も最初のほうで出ていましたが、でも年には関係なくて、生きていく上だったら「いいかげんな暮らしをしているよ、今のところは」と言っても、どうにかそれから抜け出そうとするというか、前向きになっていくんじゃないかな。そうしないと生きていけないと思う。そうやって前向きになっていくことが、責任を取ることじゃないかと思うんですが。

司会 きょうは何かはっきりした結論が出るというテーマでもないと思うんです。子どもは子どもの立場で「おとなになる」ということはどういうことだろうと、考えていたと思うし、おとなはまたおとなで、自分はおとなだけど子どもとどう違うか、また子どもとどうかかわっていけばいいのかということを、ほかの人の意見を聞きながら考えていくべきやないかと思います。単に自分でお金を稼いで生活することだけでもない。障害をもつ人はどうするのか。子どももおとなも人間としては同じ権利を持っている。これはここにいる皆さんと同じ考え方と思うんですね。その上で日本の社会の中で一人立ちしていくことはいまどういうことなのか、きょういろんな角度から話しあうことができました。

最後に、佐々木さん、締めくくりをお願いします。

佐々木賢 締めくくりというのは非常に難しいのですが。感想は、非常に多様なんです。話を聞いていまして、おとなと子どもの現実

の生活の境がはっきりしないんですね。意識でもそうだということだろうと思います。ですから、「おとなにならなくちゃいけないの？」という質問があったり、「おとなになる」という定義を見るとまた多様に出てきたのだろうと思います。昔の「おとな」という概念があるとすれば、なかなかおとなになりきらないおとながいっぱいいたり、おとなでいながら急に無能化されたり、先ほどミスマッチングのことを言いましたが、そういう現象が起こっている。そうしますとここに何が出てくるかというと再教育ですね。教育、教育というのが非常に強くなって、私はこれはこわいんじゃないかという感じがいたします。私はどうも教育をこわがるくせがありまして。学校だけではなくて、教育そのものに対してみんなアレルギーを持ったほうがいいのではないかというのが私の感想です。

司会 今日はフロアの方からたくさんご意見をいただきて楽しい討論ができたと思います。本当にありがとうございました。(拍手)

ヒヤリング

# 定時制高校生のみた「おとな」観・仕事観

—佐々木賢氏に聞く—

1992.12.3

PM6:00~8:30

永畠道子 小沢有作 小沢牧子 山部芳秀 原田瑠美子

## おとなにさせない学校—学校外体験のすすめ—

■佐々木さんは長年、定時制高校で高校生たちとかかわってこら 高校へ行っていないれたのですが、「おとなになる」ということを高校生たちはどう考 人はおとなえていると思われますか。

佐々木 私は社会科の授業で「世界史」とか「政経」とかをやつてきたのですが、「自分史」というのを書いてもらうことがあります。読んでいると、いじめとか、中退とか、登校拒否とか、いろいろな問題について、かなり大人の発想と違うなということを感じますね。

書いてもらった文章の中に、「大人」という言葉がずいぶんたくさん出できます。全日制から中退して定時制に入ってくる子が非常に多くなってきて、卒業生の約半数か、あるいは過半数に達するくらいを占めていますが、なぜ全日制をやめてきたかというようなことを聞いてみると、たとえばこんなふうに書いています。これは女の子です。

「前の学校では、私の周りでたくさんの友達が高校をやめました。その人たちを見ていると、自分も別に（高校へ）行かなくてもいいのではないかと思いました。私の周りの高校へ行っていない人たちは、私より大人です。自分と比較すると月とスッポンといつていいほど違います。高校にいかなくても立派に一般のことを学んでいます。学力学力といった今の風潮は間違っていると思います。かえって学校に行っているからおかしくなったという人がたくさんいるのではないかでしょうか。別に勉強している人を批判しているわけじゃないんです。もっと自分に対してしっかりし

高校に入って不安になつた

てほしいだけです。周りに流されない自分になってほしい。きっと私は、こんなでかいことを言ってますが、周りに流されている自分のいいかげんさが嫌だから、こんなことを感じているのではないでしょうか。」

「中退した人は大人です」というような感じ、これは一つの典型で、これに類似した発言がかなり目立ちますね。

はじめて人に喜ばれる

これも女の子ですが、全日制に入って中退組です。「高校入学までは、なるようになるだろうと思って過ごしてきたので、自分の進む道を決めて急に不安になりました」。

「高校が決まつたら不安になりました」という言い方をしてますね。普通親御さんだと高校が決まるとホッとするんですが、中学校の時はファーッと遊んでいたけれども、高校（全日制の私立の普通高校）が決まった途端に急に不安になった。

「『本当にこの道に進んで大丈夫だろうか』から始まって、『高校に入らなければこれほど悩まなくてすんだのに』に至るまでいろいろ考えました。ですから、作文の題も『私にとって高校とは』というよりも『私にとって定時制高校とは』という題名のほうが書きやすいです。ここへきて少し物事を考え、行動することができるようになったと思う。ある先生がおっしゃってましたが、定時制の生徒は大人の人と話がよくできるそうです。確かに大人と話しする機会が多いのは昼間働いているせいかもしれません」。

昼間働かなくていいような境遇の子も多いのですが、定時制に入ってくると、アルバイトが多いとはいえ、圧倒的に働く子が多くなって、8割から8割5分という感じでみんな働き始めるんです。

とにかくこのように「大人」という言葉を文章の中に探すとパッパッと出てくるほど、「大人」という言葉にひっかかっている感じがします。学校（全日制高校）へ行っているうちはあるじやなかったという意識があって、定時制とか働いているというと大人になったみたいな気がして、また、大人として接してくれたということが嬉しかったりしているという感じが、かなり一般的な形で出てきます。

■作文の中に「中退した人たちは私よりずっと大人です」というのがありましたね。そういうときの「大人」というのは、どういうことを指しているのでしょうか。

佐々木 アルバイトの経験について聞いたり、作文を書いてもらつてものを読むといろいろなことがわかります。たとえばこれは女の子ですが、洋裁工場に勤めて、「お昼時間に先に同僚の人にお茶をいれてあげると人に喜ばれるということを学んだ。自分の周りをちょっと掃除しておくと人に喜ばれる。それに帰る時に挨拶するとか。」と書いてある。

お茶を入れてあげることと、掃除をすると人に喜ばれるということを、それまで知らなかつたんですね。帰る時に挨拶すると大人が喜ぶということを知らなかつた。それで、ことさらこのことをあげて、アルバイトして良かったという言い方をしてますね。

それから「幾つものバイト、どこに行っても気が合わない人がいるもんだ。それで自分で強くなるんだなあと思った。気の合わない人とつき合うこと」をあげてある子がいたり、これも同じようなことですが「否応なしに人と接すると自分の皮をめくることになる。決して青春ドラマのようにはいかないということがわかつた。」「お店に入って、自分が変わつたと思った。以前は自分の思ったことが人に話せなかつたが、自分の思ったことが言えないといろいろツケが回つてくるし、当たらざさわらず主義だとつまらないとわかり、誰かに嫌われても自分の思ったことを言うことにした。」などとあります。

自分の思ったことを今まで言わなかつた。学校にいた時は自分の思ったことを言わなくともそれで済んでいた。アルバイトに行って思ったことを言わないと後でツケが回つてくる。やっぱり嫌でも言わなくちゃいけないということがわかつたという言い方をしています。

これは男の子ですが、「デパートでレジ打ちをしたり、品出しをやりました。そこではいろいろな客を見ることができたと思います。いろいろな人がいて、それぞれ異なつた性格をしている人がいて、とても勉強になりました。」

これも男の子ですが、「駐車場の管理人、この仕事を始めて、お客様に対する言葉遣いが思つてはいたより正しく使って、話せるようになりました。」これは「どんなこと言うの？」と聞いたら「いらっしゃいませ」と「ありがとうございました」の二言。これがスムーズに言えなかつたのが、1ヵ月もしたらスムーズに言えて、我ながらうまく言えるなど自分で感心しているんです。

これも男の子で、デパートの配達のようですが、「配達の仕事をして、夏休みもあと少しの時、僕は家に帰ってびっくりした。なんと手や首が焼けているのだ。生まれて初めて日焼けした。僕はすごく嬉しい気がした。」

ちょっととかいつまんだだけでも、掃除する、人に接すること、思ったことを言うこと、言葉遣い、日焼けしたこと。我々大人ですと昔の少年たちは全部否応なしにやっていましたね。学校では掃除をしても、それは子どもとしてやらされているのであって、人に喜ばれるという感じはしない。

『授業』である限り  
拒否感がある

■学校というのは、自分の意志に関係なく従わされるところと認識していて、それは「子ども扱い」である。「大人」になるまで我慢させられるところと感じているのでしょうか。

佐々木 我々はあまり強制しているつもりはないけれども、生徒はそういう感じではないみたいですね。たとえば単位でしばる。単位があるから嫌だ。また、生徒の発言の中で「この学校は勉強にちょっと力を入れ過ぎて活気がない」とか、そういう言い方をする。定時制を転々としてきた子がいて、勉強は嫌だ、だから勉強のない学校へ行きたいと言う。(笑い) 僕は社会科ですから、何をやっても別に誰にも怒られるわけじゃないから、勝手なことをやって、自分史やったりしますが、「テレビが見たい」というので授業中にテレビを見せたりしたら、「先生、これ勉強?」「そうだよ」と言ったら、「こんなの家でやったほうがいい。早く帰してくれ、家で見るから」と。だから彼らが面白いと思うことをやっても授業だったら嫌なんですね。

「私の楽しみ」という題で作文を書いてくれたのを読んだことがあるけど、その中で一番多いのは「自分の好きなことをやってる時」ですね。それで「好きなこと」はわりとバラバラになる。ただ、それを除くと「授業の空き時間」が多い。「友達とおしゃべりをしている時」ですね。如何に授業が嫌かということですね。

音楽の先生などでも、彼らの好きな音楽、ロックならロックをやらせるとか、わりとさばけた教師が多くて、定時制の場合は時間講師の先生が多いんだけど、何をやらせてもいいというような感じの音楽の先生ともうまくいかない。音楽に関しては多様に分かれる。校内暴力が流行った時、音楽の先生はかなりよく殴られたんだそう

ですね。それは音楽の先生に対して生徒が一言あるんですね。ポリシーがある。ロックの好きな子といつてもロックだって多様にある。カラオケが好きな子がいて、比較的真面目な子は合唱が好きだ。それで合唱をやっているとロックグループが「雑音にしか聞こえない」とか言ってからかったりするから、うまくいかない。ロックをやっていると静かな音楽が好きな子が嫌がる。一斉の授業ができない。バラバラにやろうかとバラバラにやったら「そんなら俺、帰っていい?」とまとまらない。出席だけとっておいてあとは自由にしてよと。出席だけとってあと自由にするという授業をもちろん僕もやったことがあるけど、ウワーッと目茶苦茶になって他のクラスに迷惑をかける。「先生のクラス、何やってんですか」と言われるから、しようがないから生徒を集めて何とかやり過す。

面白い教材でも、教室でやるのはいや。牛の目玉なんかを解剖してみせるおもしろい生物の先生がいたのですが、生物室できちっとやっているのは嫌なのね。授業じゃなくて、たまたま彼が図書室の中で解剖して見せたら、授業に関係ない子がワーッと来て、「なに、それ」とえらい面白がって聞いている。授業と関係ないと面白い時間になるんですね。

警備員さんで子ども好きな人がいて、警備員室にいっぱい子どもたちが入りこんで、事務長さんが怒るんです。「生徒を入れないでくれ」と。そこには20~30人のいわゆる非行タイプの子がうわーっと集まっていたんですが、その人の横から見ていると、ずいぶん乱暴なお説教をしている。「喧嘩したら勝って帰ってこい」とか言って。こっちの肌には合わないけど、基本的に子ども好きなんですね。あれはちょっと真似できないです。学校っぽくない場所と教師っぽくない人のところに子どもが寄りつく。

■学校という場そのものを、子どもの身体が拒否してしまうので ほんとうはおとなと  
話したい

佐々木 私は生徒を喫茶店につれていっておしゃべりしたりするんですが、そこでは結構質問されますよ。教室の雰囲気とかなり違う。時事問題などで「先生、PKOって何?」と聞かれることがしばしばある。あとエイズのこととかね。あまり教師として意識させないで周りにホワーンといいる大人みたいな感じだと、わりと寄ってきて質問する。「将来のことを相談に行きたい」ということもあります

ます。それで、僕は心を入れ変えた時期がありました。10年ぐらい前ですが、自分の態度をコロッと変えた時期があるんです。意識的に。私は当時「熱心教師」だったので苦しかったんですが、無手勝流に、そういうものを捨てて生徒の前に立ってみようと思い始めた時期がありましたね。生徒と一緒にしゃがんでいたり、ボワーッとして、いろいろな校務があるのを放っておいて、暇な時にできるだけ生徒と一緒にボワーッといふという時間を多くしてみたら、半年ぐらいいたった時に少し関係が変わり始めたような感じがした。それから相談めいたこととか、昔の話とか、自分の秘密にするような「中学の時に少年院へいってた」なんていう話をチョロチョロとするような感じになってきた。教師の視線がかなり影響するのではないか。しかし戦略的にそうやるというのではダメなんです。自分から相手に何も期待せずにそこに座っている、そんな雰囲気ですね。

とにかくメッセージを一切拒否するという感じがあって、かなり親しげな自分の担任の生徒でも非常につれないんです。「単位が足りないよ」と話しかけても「わかった、わかった」とか言って、そのまま落第していくとか、姿を消してしまうとか、とらえどころがなくなつて。

校内暴力があった頃には「なんでお前はそんなことをするのか」と喧々諁々ぶつかって、逆にわかりやすかった、反抗されたりして。それ以降、7、8年ぐらい前からとにかくとらえどころがなくてスーっと相手がいなくなっちゃうという感じになった。

退学することが目的  
になっている

■学校的なものに拒絶感をもつことが、中途退学につながっていくのですか。

佐々木 嫌だというのが意識化された子はわりとはっきりしているのですが、意識化されてなくて、皮膚感覚で嫌だという感じのとらえ方なので、登校拒否などでもそうですが、たとえばその子に「学校は」というと「行きたい、行きたい」と言いながらいけなかったりするんですね。

たとえば中退経験のある子たちの作文を読んでみると、こういう言い方をしているんです。「全日制にいたころ、私にとって高校とは自分で何で行っているのかわからない所だった。ただ世の中の流れみたいなもので通っていた。どうして高校に行くのか、どうして勉強するのか、その後どうするのか、そう思いながら退学するきっ

かけもないまま3年間通っていたが、結局最後に3年生になって退学した。」

退学の理由は何も書いてない。ただ「退学したい、したい」と思い込んでいたが「きっかけ」がないからやめなかった。もうすぐ卒業となったら、これはきっかけも何もない、やめなくちゃいけないと思ってやめた。「子どもたちの中退の理由は何ですか」とぼくも聞かれることがあります、この子たちは理由を一生懸命探しているけど見つからないから困って、「思いきってやめてきた」という言い方をする。だから大人が考える中退の理由とは違う。そもそも大人がつくってくれたその流れが嫌で、流れに逆らうのが一つのテーマであって、中退は目標であって、理由じゃないんです。この種の作文は多いです。

そこら辺の違いを父母会などでも説明したんだけど、どうしても大人たちにはわからない、大人の発想ではわからないんです。生徒の発想からいうと、なぜ行かなくちゃいけないのか、なぜ学校に居なくちゃいけないのか、そういう問い合わせまず最初にしてくる。そんな具合で、毎年浮遊層が数十万人新しく出ている。50～60万人出ているという感じでつかんでいます。

高校中退が12万とかいいますが、「高卒無業」が文部省の統計に最近載り始めましたが、それが10万近くいる。それから大学・短大中退が統計資料にはほとんど出てないんですが、少しいるんじゃないかな。また、感じとしては専門学校中退が目茶苦茶多いと思うのに、発表しないんです。専門学校は営業上の問題があって発表しないから、これはかなり多いだろうと思うんです。高校中退と匹敵するぐらい多いのではないかと思う。これを少なく見積もって10万としても、高卒無業が10万、専門学校中退が10万、高校中退が12～13万となると、優に30万を越しますね。

高卒1年目離職が、労働省の統計でかなりはっきりしているのが21%で11万あるんです。2年目が7万で、3年目が4万ですから、これが24～25万になるんですね。すぐ辞めて横に動いてどこかに入ってるのかもしれません、とにかく出ていったのを単年度で見ると約58万8,000人という数字が出る。これは官側の統計で、専門学校のところだけは推測ですが、私が言うのはその層です。これは15歳から20歳までの動きですね。15歳から20歳までの総人口は800～900万人ぐらいの間を前後している。ですから浮遊率5～6%とい

う感じで、その層のことを私は問題にし続けているわけです。

その層は新たに出てきた。今までの歴史上かつてなかった。私は定時制の教師を33年ぐらいやってますが、こういう状態はなかつたんじゃないいか、それ以前にもなかつたであろうと思うんです。こんなに若者がプラプラするというのは。

これを新たな現象として見て、その意味を考えると、青年層でも「青年エリート層」とか「青年中間層」とか、いろんな層があると思うのですが、今の時代の一つの特徴をかなりよく反映しているのがこの浮遊層の数十万人ではないか。10年間やると数百万になるかもしれない。膨大な数になる。それは一つの時代現象としても見ておいていただきたいという感じですね。

仕事の場は「指先労働」

■定時制の若者たちの出てゆく労働の場は、どんな状況になっていますか。

**佐々木** 生徒の就職の世話しながら、僕が知っているのは中級技能ですが、中級技能が極度に単純化しつつある。徒弟的に修業した時代とは違う。昔の大工さんはきつかったけれども生き生き修業しているのがいたり、左官屋さんなども何キロのセメントを持つんだなんて説明してくれたり、仕事の話を生き生き話してくれるのが20年前ぐらいまでいました。30年前だと半分ぐらいの生徒が、仕事の話を口角泡を飛ばしてという感じでしゃべってくれたものですね。私は社会科の授業なので、仕事の話とか社会問題だけで教科書など使わずに討論でうまくいったというような時期があって、その時期がなつかしく思われるんですが、とにかく仕事に関してはだんだんその面白さの話がなくなってきた。

たとえば旋盤にしても、昔の手動の旋盤は技術がものをいって7年から10年、大工さんならカンナ削りだけで10年というようのが極度になくなってきた。コンピュータが入って、NC旋盤が入っている。エアコンの修理をやっている生徒がいるんですが、1年生でアルバイトしている。「君、修理できるの」と失礼な聞き方をしたんだけど、「できるよ」と。エアコンの裏をポンと開けると番号が出てくるんです。手帳に番号がバーッと書いてある。何番が出た時にここの部品を取替えろとあって、取替える。トランシーバーを持っていて、部品がないとそれで注文して、30分とか1時間待っていると巡回車が部品を運んでくる。「楽なもんだ」という感じで月

給をかなりもらっています。中卒で18~20万程度もらっている。その仕事は難しいことを覚えるというより手帳を持たされているだけですから。

自動車のセールスをやっているのもそうですね。非常にマニュアル化している。最初は自動車ナンバープレートの番号を調べてくる。そうすると買替えの時期を計算機に入れて調べるらしいんです。それで何日に訪問しろ、その家の奥さんはパートに出ているから何曜日の何時に行けと言われて、そこに行く。とにかくものすごくマニュアル化されて仕事が楽に楽になっていることが一つ。

調理師などでも、電子レンジが入ると直接調理するのが少なくなってくる。一方、調理するところもあるんですね。やはり調理するようなところに行った生徒が比較的長持ちしている。電子レンジ的なところに調理師として入ったのは転々と変わる。

「消去法的職業選び」と私は呼ぶのですが、最終的に何を選ぶかというと、人間関係で、どうも仕事の内容ではなさそうだという感じがしてしまったないです。仕事は誰でもできる、中卒どころか中学を出てなくてもできる、数字がわかればできる。そのようなごくごく単純作業、私が「指先労働」と名付けたものがあるんだけど、指だけをちよこちよこっと動かすような仕事もある。1日中立って機械のブレをパッと修正するような仕事をやらされている生徒がいて、「疲れたら休めよ」なんてわりと大切に扱われていて、工場もきれいなんですが、あれでは面白さとか自分の能力がどんどん伸びていくという感じはありませんね。20年とか30年前だったらそんな仕事はなかった。単純作業といえば同じような動作で体をかなり動かした。

生徒に仕事の話を聞くと「つまらなくもないし、別に面白くもないよ」というのが一般的な感想ですね。学校で勉強するというのは、社会に出て何かの役に立つということでやるわけでしょう。ところが、そういう仕事に就きながら定時制に通っていると、現に働いて月給は20万近くもらって車も買ってという生活をしているが、数学でサイン、コサイン、微分積分なんて出てくると「これ使わないよ、確信持って使わないよ」なんて言ったりする。エリートにならない生徒だからそう言うのかというと、ちょっとそこら辺は違う。石工をやっている子がいて、石材を切ってはめ込む仕事をやってますが、その子だけは面白いと言いますね。

そんな労働の場も残ってますから一概には言えないけれども、全体としては能力の出口が塞がれている。だからこそまた浮遊をし始めるという、そういう感じがしているんですね。

早くからいろいろな  
体験を

■佐々木さんは前回の公開研「大人になるって何ですか」の折に、モラトリアム、バカンス、レイバー（労働）—「モバレイ」と省略して一を子どもたちに、という発言をされましたが、それについてもう少し話して下さい。

佐々木 あれは思いつきみたいなところがありますが、先ほど生徒の作文で紹介したように、「流れに逆らう」ということが彼らのテーマで、「なぜか」ということではなくて逆らうことそのものが目的になっているというような生き方を代弁したつもりです。あれは私の生徒解釈なんですが、学校なんかどうでもいいから外へ出て働いて、修業して一人前の職人さんになろうとか、そういう生徒がポンポン増えてきたらそれは見上げたのですが、そうはならない。

「3K」の職場には就きたくないとか、アルバイトなどでもうまいアルバイトをしたい。何かうまい話を探して生き抜いていくみたいな、どこかこすいような青年像があるんですね。それで将来のことはずっと決めないんです。

そういう否定面もきちんととらえておく必要があるんだけれども、手出しがなかなかできないという感じがあるんです。たとえばここ3、4年、進路指導の係をしていて見えるのですが、この1、2年無職志向が増えてきた。何もしない。母親などが3月になってから学校に、「先生、どうしましよう。まだ何も決めてないんです」と言って来るんです。こっちも口をすっぽりして「大学へ行くか、専門学校へ行くか、就職するか。アルバイトのままならそれでもいいよ」と言うんですが、何も決めないでファミコン等のゲームだけはやるが他のことは一切嫌だ、友達とおしゃべりはする。そういう子がウワーンと増えてきた感じがしますね。

卒業生が訪ねてくるので、無職志向だった子がどうやって生きているのか、身近な情報を集めたりしてみたんですが、あまり統計的な意味はありませんが、消去法みたいにして進路を決めていく。消去法進路選択みたいな感じがするんです。いろんなことをちょこつとやる、「ここは嫌」という具合にうんと嫌なのを捨てていって、最後に比較的嫌じゃないところにスーッとおさまっていくという進

路選択じゃないかなという感じがするんです。それをかなりやらないと一定のところに落ちつかない若者像が出ているのではないかと思うんです。

それは何かというと、高校中退11万と言ってますが、高卒・就職・離職の率がものすごく高まっている。労働省と文部省の調査で若干数値が違いますが、私の学校の卒業生で言うと、職安を通じて高卒の資格で就職した子たちの統計を、2年ぐらいとると、8割～9割が辞めてしまっている。ほとんどがすぐ辞める。それは高校中退の現象と同じだろうと思いますね。それは消去法的な人生選択をやっているからなんです。しかしそれは、一方では、世の中の情勢にちゃんと合っているんじゃないかな。4、5年それをやってどこかに落ちつくんです。だからぼくのいう「モバレイ」というのは、学校を卒業してからじゃなくて、いろんなことを早くからさせたほうがいいんじゃないかなという意見なんです。学校にずっと閉じこめておくのではなく、早くからいろいろなことをいっぱいやったりやめたりすることができたらいいのではないか。それで子どもたちの状況がよくなるなどと楽観的なことは決していえないけれど、やらないよりやった方がずっとよい。

■「おとなになる」ための道のりが次第に困難になっていること、そしてその道のりを若者たちが模索しながら歩いている様子がわかつてきたように思います。ありがとうございました。

## 第4回 夜間公開研究会

# 学 校——こう変えたい

1993. 1. 29

PM6:00~8:30

発題 保坂 展人 (青生舎・ほっと塾主宰)

柴田 妙春 (葛飾区立常磐中学校教員)

坂斎恵美子 (あさおの会)

松下富美代 (和光大学学生)

永畠道子 この夜間公開研究会は、最初のテーマが、「家庭の学校化を問う」、二回目「いま、子どもの文化は……」、三回目「おとなになるって何ですか」、そして今夜四回目、「学校——こう変えたい」。

それでは始めます。まず、パネラーの最初の発言は川崎にある、不登校の子どもたちを考える「あさおの会」の、中心になっていらっしゃる坂斎恵美子さんにお願いします。

## 登校拒否の2人の子どもの生活のなかで

坂斎恵美子

転勤して1年目に登  
校拒否に

坂斎です。私は4人家族で夫が転勤族なんですが、埼玉県から宮崎県へ転勤して1年目くらいの時に、小学校3年生の長男が本当に突然、登校拒否になりました。

その頃、学校の先生とか教育センターとかに相談しましたら、親がいけない、母親がとくにいけないと一方的に言われました。母子分離ができていない、親子を離した方がいいということで、1ヵ月間合宿生活を、無理やりというかたちでさせました。相談所にいる間はすごくいい子で通していたようで、親の方でも何かおかしいなと思っていたんですが、学校の先生とか教育委員会の方々に勧められるまま、2、3年の間過ごしてしまいました。

それから2、3年たって、宮崎から川崎へまた転校して、初めて

「登校拒否を考える会」というのを知りました。それまではまったく知らなかった。そしてこの親の会で、今まで宮崎のときの学校が言っていたことがちょっとおかしいと、初めてわかり、それから生活を直すというか、子どもの味方になってやっていこう、というふうに生活を改めました。

そうしたら、次男、下の男の子の方も、まだ2年生だったんですが、その子も小学校に行かないと言いだして行かない子が2人できたわけなんんですけど、でも宮崎のときとは違ってすごく安定した暮らしというか、本当に楽しく4人で過ごす日を送っていました。その間2年くらい、長男は、まったく一步も外へ出ないときもありましたが、今は自分でやりたいことを見つけて、外へ出るようにもなりました。宮崎にいたときに、字が読めなくなるとか、数学ができなくなるとか、生活に困りますよ、ということをすごく言われた。小学校3年生くらいでしたから。でもそれが7年くらいたって、上の子は16歳になったんですけど、当初言わされたことが、全然嘘だったということがわかりました。

それで、ずっと遠くの「親の会」に通っていたんですけども、そこで同じ小田急沿線のお友達が何人かできまして、私もそこでずいぶん救われたものですから、やっぱり地域にもこういう親の会があった方がいいんじゃないかなと思って、小田急沿線の百合ヶ丘というところに「あさおの会」(麻生区ですから)というのを、地域に呼びかけてつくりました。

会員40名くらいで、月に1回15人くらい集まっています。みんなで本を読んだり、いろんな勉強をしあったりして会を2、3年やっています。

「学校——こう変えたい」という題で今日は呼ばれたんですけど、うちの子の場合は上の子が小学校3年、下の子が小学校2年生から、結局学校に関わらないで、上の子の場合は中学3年間まったく関わらないできてるんですね。それで卒業証書はもらっちゃったという感じなんですけど。それで全然困らなかっただし、今も全然困っていないし、自分で学びたいということもある。それはまた、今自分で見つけて、予備校にいってみたり、大検を取りにいったり、図書館でそういうものをみんな自分で調べてますし、学びたいときには自分で学べる、ということもわかったものですから、学校をこう変えた

い、といつてもこう変えてほしいというのではないですが、やっぱり「学校へ行かなくても生きていける」っていうのが、私の言えることかなあと思います。親の会をやってますので、親の会の人々に「学校——こう変えたい」という題だったらみんなどう思う、って聞いたんです。するとやっぱり、子どもが不登校になってまだ半年くらいしかたっていない人は、学校はもっとゆるやかな方がいいとか、クラブ活動とかもずいぶん厳しいようだから、もっと自由にした方がいいとか……。不登校の子どもたちにも聞いたんですけど、みんなやっぱり、もっと遊べるところがいいとか、何しろ自由がいいっていうか、「東京シューレ」みたいなところがいいというふうに親も子も言っていました。

司会 「学校——こう変えたい」ということばは学校という存在をすでに認めているんじゃないかと、坂斎さんからきびしく、テーマそのものについてもご意見がありました。本当に学校は一体必要なかどうか、という問題提起ですね。では次に、中学の教師である柴田さん、よろしく。

## 学校——解体し、つくり直しを

柴田 島春

### 業者テストの問題

坂斎さんのお子さんみたいな人がどんどん増えていくと、私などは真っ先に失業するんですね（笑）。学校がいらなくなるわけですから。学校に身を置いているものにとっては大変きびしいお話です。

私は、葛飾の区立中学校で、国語を担当しております。教員の生活も、もう30年を越えました。まず「変えたい」というテーマは、変わり方によっては職を失いますから、あまり変わってもらっても困るんですね。そこで、現状と経過みたいなことだけを、問題提起ということで申し上げたいと思います。

文部省が、例の業者テストを学校でやるなど決めたばかりですけど、全国的に見ると半ば公的にやっているところもあれば、校長会などが音頭をとってやっているところもある。いろいろあるわけで、東京でみると、現在、新教育研究会と進学研究会という2つの業者でだいたい二分されている。弊害はもちろんたくさんある。たとえば私立高校などの場合には、学校で一斉に行う学力テストの、3ヵ月連続の偏差値を持参してくださいと言う。条件として出されるわ

けです。子どもも親も、どうしてもその学校に行きたいとすれば、教員としては、それに合わせるしかない。これは、私立の方の、経営的な問題もある、子どもがどんどん減っていくわけですから。うちの学校は、大手の予備校と提携して、朝も特訓、放課後も特訓して、うちの学校にいれてくれさえすれば、国立大学にいれますという宣伝を約7、8年前からやってきています。

そういう中で公立の場合には、こう言ってはなんんですけど比較的安閑としていたということもあって、いわゆる私立志向みたいなのが強まってきたと言えるんじゃないでしょうか。そういう中で業者テストが、もうなくてはならないみたいな形に落ち着いてしまっている状況があるわけです。しかし学校でやるとなったら一体どうなるか。すでに大阪にその例があるわけですが、80%くらいの中学生が、塾で学力テストを受けている。学校でやらなくても塾で受けられるわけですから、その資料で親と子どもが「こういう結果で、私はここに行きたい」となれば、中学校としてはそれに対応せざるを得ない。つまり、テストをやる場所が学校から塾へ移動するだけで、本質的にはまったく変わりないと思います。

そもそも戦後の教育は40数年たつけれども、結論的に言えば、まったく昔と変わっていないんじゃないか。これは林竹二さんが『教育亡国』で書かれていることですけれど、文部省も、内務省や宮内省と共にG H Qによる解体の対象であった。しかし、結局これが生き残ってしまった。どうしてかというと、いわゆる東西の冷戦構造、つまり日本がアメリカ軍の基地として重要な位置を占めるという関係で、どうしてもそういう国内体制をつくらざるを得ない。朝鮮戦争に代表されるように、だいたい1951年を境に文部省が生き残ると同時に、方針転換をして、結局これが「地方教育行政の組織および運営に関する法律」という形で集約され、教育委員の任命制がつくられ、結局のところ戦前とほとんど変わらない形で文部省が残ってしまった。従って、本質的には何も変わらなかった、といえるのではないか。

昔と変わらぬ教育行政

しかば学校って何なのか。私の父方の祖母は、文久2年、1862年生まれ。母方の祖母は、明治11年、1878年生まれで、従って学齢期のときには学校があったわけですが、両方とも学校は行ってない。しかし、父方の方は92歳、母方の方は76歳、ちゃんと生涯を

全うした。学校に一日も行かなくても立派に生きてこられたという証明でもあるわけです。じゃあ一体学校って何なのか、時間の関係で結論を先に急ぐと、いわゆる国家が必要とした、官僚、あるいは企業の労働者の養成機関としての位置付けがずっと続けられてきたんじゃないのか。たとえば、小学校は中学校へ送り出すための機関であり、中学校は高等学校への予備機関、高等学校は大学への予備機関。結局大学が最終的な養成機関、仕上げという形でずっときたんじゃないのか。そこに貫かれていた方針は「富国強兵」ですね。

従って、現在「企業戦士」なんて言い方をしますが、直接戦はないが、まさに戦をしてると同じように働く。何しろ世界一の貿易黒字国ということはまさに企業戦士の働きの結果としてもたらされている。その中でくたくたになって、「過労死」なんてことばが国際語になるような状況が生まれている。結局、何も変わらない、ということが言えるんじゃないかと思います。

### 手直しでは難しい学校の変革

それじゃ何も展望がなくなるわけすけれども、「学校——こう変えたい」ではなくて、「学校——こう“解体”」じゃないか。つまり壊してしまう、解体こそが最良の道ではないかと思うんです。解体すると私は失業するんですけど、解体しっぱなしやなくともう一度つくり直す。解体した上につくり直すことをしなければ今の教育制度をはじめ、学校も、いくら手直ししても変わるのはちょっと難しいんじゃないか。ただ、簡単にはいかないと思うんですが。

最後に、私は現在の中学校に7年、その前に16年間、上平井中学校というところにいたわけですが、ここは15年間、広島修学旅行を続けてきた。私も最初の10年間、ずっと（広島に）行き続けていたわけですが、昨日そこで、人権尊重教育推進校の研究発表会というのをやっていて、私も行きました。ごく普通の学校になりました（笑）。つまり修学旅行はもう、3年前からやめてるわけですね。つまり、新しい試みをしようとなれば、それ相当のスタッフがいなければ難しいということだと思います。つまりそれまで担ってきた教員は、強制移動によって、全員外に出されて一人も残っていないんです。そういう中で、普通の学校になってしまった。

だから新しい試みをしようとか、変えたいということであれば、それ相当の裏付けが必要なんじゃないか、結局は人間の問題だと思います。

司会 どうもありがとうございました。本当にそうよね。つまりこれは、教師に関わってくる問題ですから。解体してつくり直す、というところに救われたような感じがしますけど。

では、次に、当事者である立場から、第1委員会の小沢牧子さんのゼミにいてこの会に何かといえばひっぱり出してしまう方です。松下さんどうぞ。

## 「学校絶対化」から視点をずらす

松下富美代

私は今、和光大学の4年 在学しています。高校時代は、1986年からの3年間で、当時、いじめ問題とか校則ブームとかがかなりマスコミに取り上げられていた時に、私もやはり学校の厳しい校則について反対の動きをやっていました。学校ではスカートの長さや、指定以外のコートなどを没収するような先生がいて、先生が廊下中生徒を追い回したり、セーターもとっちゃうとか、太股あたりを手の痕がつくくらいおもいっきり殴るような先生を見ていて、生徒たちが陰で「あの先生ってむかつくなよな」という風にみんなで怒っている、そういうところがあった。私は、何か、みんなで先生の悪口をいっているだけで気を晴らして終わらせたりしているのが好きになれなくてついて行けなかった。そういう厳しい管理をやっている学校がつまらないなと思っていたときに、ひとりの社会科の先生と出あって、みんなで愚痴をこぼすというのではなく、自分で実際に何か行動を起こしてみるとことの方が自分にあって楽しいな、ということがわかってきたんです。それからは、学校内外を問わず、こういう場で発言してみたり、生徒会活動や、また個人的にいろいろやるようになりました。

大学に入ってみると、少し高校時代のことが客観的に見えるようになり、私たちが「校則反対」と一方的に言っていたが、実際は校則があった方がいいとか、そんなに学校悪くないんじやないかとか、生徒の数がこんなに多いんだから、先生は管理でもしなきゃやってられないんじやないかとか、いろんな立場の人たちがいることがわかつてきました。また、私たちが「校則反対」と言っても必ずしも自分たちが満足いくような形には変えられないという、ある種の無力感みたいなものも抱えていました。私にとって都合がいい学校

にしても、一方でそれ以上に、そんな学校いやだと思う人たちがいて、結局変わらない。誰がやっても結局は、全員に都合のいい学校なんてないから、見込みがないのかなとも思ったことがあります。

それで、学校と自分との関わりあい方についてちょっと視点をずらして考えてみました。学校を絶対化するのではなくて、そんなに学校にしがみつかないで、もっと適当にやっていく方法もあるんじゃないかな、という感じで。“学校”という風にイメージしちゃうと、なにかとても堅くて重くて、個人の力じゃどうしても変えられないようなイメージがあるけれども、「はい、学校」じゃなくて人と人の関わりあい方で学校との関わりを考えていったら、そんなに重たくないんじゃないかな。そんな風に考えて、今は学校を変えようという風に思わなくなっていて、もっと学校を軽くしていこうよ、学校は必ず行かなきや、というのではなく、もっと軽く、行つたって行かなくたっていいし、行かない日があったっていいし——そんな風にできたらなあ、と今は考えています。

そんな中で私は、両親が働きにいっている子どもを預かる「学童保育」で、3年ほどバイトをしています。それで今日は、来る前に子どもたちにアンケートをしてきた。子どもたちはどんな風に学校を捉えていて、どんな風に学校を変えたいか、こんな学校だったらいいな、と思っているか書いてもらつたんですね。

### 1年生から「たのしくない学校」

今日は残念ながら、4年生から6年生までクラブ活動があって、アンケートを取れたのが1、2、3年生までで、ちょっと抽象的ですけど、とりあえず報告します。「学童」は、1年生から6年生までで、2つの小学校から子どもたちが集まっています。学校の敷地内ではなくて、1軒の借家を借り切っていて、近くには公園などがあり、そこでみんなが遊んでいるようなところです。おもに6、7、8歳が中心です。「何が楽しい？」ってきいたら、「休み時間、遊んできるとき」自分が好きな図工とか体育とか、もう得意なことだけですね。じゃあ、「つまらないときってどんなとき？」ってきくと、授業のとき、算数、国語、勉強（笑）、1人で遊んでるときはつまらない。体育でも、好きなんだけれどもなわ跳びはいやだとか、休み時間がないとき、先生が怒ったとき・恐いとき、などもあります。まったくつまらないときがないという子もいました。じゃあ「どんな学校だったら好き？どんな学校だったら行きたいと思う？」とき

いたら、授業がなくて遊べる学校（笑）。給食ばっかりあるのがいいとか、毎日が休みがいい、遊んではばっかり、恐い先生がいない学校、いじめがない学校、楽しい学校、おもしろい学校、自分が好きな科目だけの学校、勉強がない学校、遊びだけの学校とか。子どもたちは6歳や7歳の小学校1年で、もう勉強はいやだとかいう意見が本当に多くて……何か、早いうちから勉強、勉強っていう風に仕込まれているような、そんなものを感じることができて、やっぱり遊びたい心がいっぱいだなあ、ということがつくづく伝わってきた。そんな中で私は、子どもたちと一緒に、本当に学校帰りとは思えないくらいのパワーを持った子どもたちと一緒に、ドッジボールをしたり、たまに責任者の方が、車で近くの河原へ連れて行ってくださるのでその河原へ一緒に行って、そこで水でピシャピシャ遊んだりする。子どもたちは学校でパワーを持てあましている、そのパワーを、「学童」でおもいっきり発散したり、学校でいやなことがあったりすると報告してくれたりする。そのとき、「そうだね、そんな先生はひどいのね」とか「学校は絶対行かなきゃいけないよね」という話のとき、「そんなでもないんじゃない」と相対化させるような言い方で、私は子どもたちと接していました。子どもたちが“これ”と思っている価値観に「必ずしもそうでない」と言うことくらいしかできなくて。そんな形で、「学校を変えよう」でないし、本当に学童保育という小さな狭い場の中なんだけれども、自分のこと、何か、子どもたちに、こんな大人がいるよ、こんな変なことを考える大人もいるよ、ということを言つていきたい。

司会 大変いい意見を言ってください。軽くっていう意味。私たちは何だか、ずっと学校というのは重いものとして受けとめてきた。そこへの、若い世代の抵抗だと私は思っているんです。たとえば、60年安保とか70年安保とかを体験したときの、あの切ないまでの真剣さみたいなものに対して、社会主义国の崩れとともに、なんとなくひとつ批判の目が若い人たちの中にある。その辺りは、やはり思想の問題ですから真っ正面からぶつからなきゃいけないことのように思うんです。学校という思い込みについては、そういう「軽く」という表現が、これは大事な問題提起ではないかと。

最後に発言の保坂展人さん。鞠町中学の内申書裁判、青生舎という若い人たちの拠点を作った人です。触れれば、血が出るような、全身で抵抗していたときから、いまや、一児の父。核心の発言お願

いします。

## 大胆な論議で教育のルネッサンスを

保坂 展人

### 英才教育の幻想

「学校——こう変えたい」、ということで、この1、2年くらい考えていることを話します。日本の社会は、全体として非常にソワソワした社会で、周囲が非常に気になるという社会だと思う。

ある月刊誌にいわゆる英才教育の取材を頼まれて、今日、本屋に行って公文式教室の代表の公文公氏が書いた『2歳で本が読める』をみた(笑)。胎児のときから読み聞かせろ、胎児も耳を持っている、という。それで1日に10冊20冊と読みます、1歳半くらいから「かな」を読みだして、4歳から5歳で、だいたい中学校程度の本が読めるようになる。で、月に2、30冊読みこなせるようになる。3歳6カ月で英検5級に合格したお嬢さんがいるということばかり書いてある。読めば読むほど、「あなたそのまでいいんですか」と脅迫してくるわけです。その中でお母さんが、わたしもこうチャレンジしますといって、1日10時間近く声がカラカラになるまで本を読みきかせてきた(笑)、と言っているんですね。おそらく、子育ての地域の輪とか、大家族もなく、必要な情報が得られない中で、週刊誌やテレビが取り上げると、何かみんながそうしているかのような幻想——私立の有名学校にいれようというのもそうかも知れませんけれども——に拍車をかけられているように思うんですね。

でも不思議なのは、社会全体としてみると、人材開発にトップの危機感があったり、現在の教育システムへの懐疑が語られている。一流大学を出て一流企業に就職した若者が、最初にもらった給料で漫画本を買い、翌日から出勤せず、それを読みふけっていた、という柴田さんのレジュメを見て下さい。「僕はお母さんに言わされたとおり、友達が漫画を見ているのに、じーっとがまんして勉強し、大学に入ったし会社にも入った。だから、今度は今までやれなかつた好きなことをやるんだ」(笑)と。これは見事だと思うんだけども、まさにそういう若者たちの状況に関して、やっぱり、財界や、企業、会社の経営者たちはかなりの危機感を抱いていると思う。僕は、雑誌とか新聞とか放送局で12、3年、「学校」や「子ども」「若者」の

テーマで取材をしていますけれども、まず、記者たちが取材をしなくなりました。なんでも聞きに来る。自分はこう思うんですが、保坂さんどうですか、ということは、もう、5、6年くらい前からなくなりました。全部聞きに来る取材ですね。で、何かあったらすぐ電話をしてくる、という感じになっている。記者に聞いてみると入る職場は別にどこでもよかった。名のある会社であればどこでもね。

いわゆる名のある大学を出て、名のある職場に入った人たちは、意欲のない記者たち無難なことをやりたがる。上司からここに行けって言われてそれをやってくるのはこなせるんだけど、本当に自分で悪戦苦闘して、たとえば、差別の問題だとか、社会的な非常にしんどいところで頑張って活動している人たちにマイクをむけたり、その人たちと生活を共にしたり、ということは考えてもみないことになっているんですね。それは学校だけの問題ではなくて、社会全体が非常に衰退にむかっているな、という感じです。そういう意味では、体制側の危機感というのもよくわかるんですね。反体制運動も起きないけれども、体制に邁進する運動も起きていない。どっちも起きなくて、何かもたれかかりあいというか。

明らかに企業の現場や、社会の現場には、自分で考えて適確に行動して、次々といろんなことを考えてやろうという若者がいれば、受け入れるだけの柔軟性は、まだまだある、と思うのに。どうしてかというと、「オンロード」「オフロード」という言い方をしてるんですが、いわゆる高校、大学という舗装されたみんなが行く道路へ、大勢の若者がワーッと歩いてるんだけれども、みんな没個性で、自分の力で考えられない人たちばかりになってしまった。そういう人たちが、テレビ局とか新聞社に入っても、伝票を切ったり、事務的な仕事ばっかりになってしまっていて、番組や記事になる企画を全部を考えてやるってことは、フリーランスの人たちがやるようになってきた。フリーランスの世界では、もちろん学歴や資格もほとんど関係なしで、何ができるかできないかっていうことで、争われている。

そういうことから見ると、今、学歴資格社会と呼んでもいいと思うんですが——その学歴資格社会が、日本でかなり早い時期に、高度成長期くらいに、ひとつの定型になりました。そして、その爛熟

期から今、腐乱期に入ってるんじゃないか（笑）。にも関わらず、若いお母さんも、あるいは父親も、同じように「2歳で本が読める」とか「有名学校へ」ということで、拍車をかけている。この、アンバランスというか、まったくの時代の読み違いみたいなことに対して、なんとか世論を喚起していかなきゃいけない、と思っているんです。

「過労死」という言葉は、海外でも通用する言葉になりつつあるんですが、今日、AP通信社の人からきかれて、日本の教育について僕が出した新しいキーワードが、「過学死」。学びすぎて死んでしまうという（笑）。これは実際、塾に行き、部活も頑張り、だいたい睡眠時間5時間前後で、いつも眠い。それで高校2年になって、風呂に入って心不全で死んでしまった男の子がいる。これはまさに、「過学死」。「過労死」と同じ構造になっている。

大人たちは、まだ少しストレスの息抜き場がある。それこそ飲み屋でいっぱいとか、いろんなことがあるんだけど、本当に朝から晩まで管理されて、回転が止まらない一輪車に乗り続けているような、そういう日常の中で、自分が自分でわからなくなる少年。学校に行かなくなる子、高校中退してくる子といろいろ話してみると、進学校でトップを切っていたという子もたくさんいる。で、ある時自分で自分がわからなくなる。まわりの世界がポーッと遠のいて頭がクラクラしてきて、もうこれじゃ生きていけないという根本的な悲鳴をあげる。

それで親に対して当たったり暴れたりして、俺はなんで生きてるんだ、なんで俺を生んだんだ、なんのために勉強するんだ、おまえなんのために親をやってるんだ、ワーッとやるわけ。非常に哲学的な問いで、今の社会の親たちや教師も含めて、昔は考えたけれど最近考えてない、みたいなことが多く含まれている。「自分探し」でもあると思うんです。

## 自主的につくり出す 居場所

不登校の子どもたちは文部省調査で6万7千人と言われていますね、事故とか病気は除いて30日以上欠席をした子。でも実際の数字は絶対10万人台になっていると思う。教育委員会が、人数を水増しして発表するとは思えません、逆だと思いますから。そうすると10万人の子が学校に行かず、年間12万人の子が中退するとなると、15歳から21歳といいういわゆる若者、青年の中で100万を越える大群がいわゆる「ボーダーレス学歴組」として、日本の社会に台頭しつ

つあるということですね。これ一種の新勢力なんですね。これまでの社会ではいろんなひずみや歪み、重圧を受けてものを言えなかつたし、差別や偏見もあった。だけどそれだけの数になるといろんな多様な進路もひらけてくる。学校へ行かない子どもたちの居場所やフリースクールというのも、「燎原の火のごとく」というのはちょっとオーバーかも知れないけど。

このビデオを昨年の春くらいから企画して撮り始めていって、半年くらいかけて作ったんですけども、関東地方の9ヵ所くらいの子どもの居場所。一本で作ろうと思ったんですけど、とてもとてもまとめきれない。作ってるうちにどんどん店開きしてくる。関東だけで40ヵ所、50ヵ所という子どもたちの居場所が、いろんな形でできてくる。これはやっぱり、ひとつの教育のルネッサンスの兆候があるんじゃないかな、という風に思えてきた。居場所とかフリースクール、「東京シューレ」が一番大きいけれども、まだまだ手作りで試行錯誤しながら親たちあるいは子どもたちが参加しながら作っている。

これも評価が分かれると思いますが、いわゆる出席日数に、そう 不登校、中退のもついう所に通っていることもカウントをしましょう、と文部省等が言い始めた。あるいは高校中退に関しても不登校に関しても、基本的には親のしつけが悪いんだ、子どもに問題があるんだと言い続けてきたところを転換して、学校にも問題がありはしないかということを言い始めた。高校中退に関しては、いわゆる「積極中退」ということがある、って言い出した。これは僕が4、5年くらい前から言つてることで、変な感じでしたが。要するに、積極中退がありうるということは高校に行ってこのままじゃ自分はダメになる、人間として腐る。人間として生きるために俺は高校をやめるんだという人がいるわけ、現実に。また、そういう状況があるということが少しづつ世間に知れ渡ってきたんじゃないかな。

実は、大変な犠牲のもとに不登校や高校中退の若者が、これだけ増えたっていうことは、今、ストライキとかデモンストレーションがないというけれども、これは、日本の社会の中で珍しいストライキじゃなかったか。現に今続いている、しかも無期限の、自己犠牲的な子どものストライキ。これを学校も、文部行政の側も無視し得なくなった。そういうふうに僕は捉えている。

さらに先に進めると、東西冷戦ゆえに解体されずにすんだ文部省は、いわゆる反共の砦として、対日教組、それから誰かの言葉で言えば赤化防止などを大義名分に温存されてきた。その根拠がベルリンの壁の崩壊と共に揺すられてきた、ということも同時に言えるんじゃないかなと思います。今の子どもの実態を見れば、ある意味では体制側も、体制を批判してきた側も入りまじりながら、かなり大胆な論議を展開していい時期に入ってきてるんじゃないだろうか。

例をあげますと、学校に「時間割」ってありますね、あの時間割には僕は、どうしても耐えられないんですね。皆さん、いろんな仕事をされてる方も多いと思いますけれども、45分おきに頭の後で鐘が鳴って、机が自動的に動いて、デスクワークしていたとするならば書類がなくなって、別のことを行なうに言われたら、適応できますか。あの時間割に基づく一斉授業というのは、ソワソワして落ち着きのない子どもをつくる。それから何事にも関心を適度には持つけれども、深くは決して追求しない、深くは考えないことに巧みな子どもをつくるんじゃないか、と思う。これは高度成長時代の大量生産に基づくそういう労働力を大量に必要とした時代には（本当はいけなかったと思うけど）あり得た、と思うが。ひとつのことを集中的に考えたり、3日3晩寝ないで何かをつくったりというおもしろさ楽しさは、子どもの中でいくらでも内側から湧きあがって来るものではないかと僕は思っている。ですから一斉に時間割に基づいて、教科書をパタパタやるっていうようなことも、あと7、8年は続していくかも知れないけど、そろそろ違う学び方に転換するべきじゃないか、と思ってます。僕は、もう1回子どもに生まれてきたらとてもあの時間割に耐えられない。

## 「教育」の原像が問題

最後に、女性民教審も含めて教育問題は、80年代から校内暴力、いじめ、管理、校則と語られてきて、ここ2、3年、去年くらいから論議が深まったんじゃないかという印象をもってるんです。なぜかというと、それまではいじめをなくすには、校内暴力をなくすには、あるいは過剰な管理から子どもを解き放つにはっていうことで語られてきた。去年の夏にアメリカのインディアナ州で、ついに学校を拒否したという13歳の男の子が、長野県の美麻村にフリースクールを作ろう、という所に来ています。僕は、やっぱり学校にいっていない子も多くいる「トーキング・スピーチ」というテレホ

ン・サービスをやっている仲間と一緒に、子どもたちも含めてその学校に泊まりにいって、そのアメリカの学校に行かない子と話をし、非常におもしろかったのは、「深く考えようすると次の教材を出してくる。そしてそれについて考えようとして、自分なりの何かを見いだしていると、次へ行け行けってせかされる。今の地球上に生まれてきて必要な、環境のことだと戦争のことだと、本当に今人間として考えなければいけないことについて考えさせてくれない。だから僕は、学校に行かないんだ」という風に彼が言ったことです。そういう意味で、たとえば体罰、過剰な校則、いろんなものが問題だったんだけれども、そういう目に見える問題が、もぐらたたきのようにして全部消えれば、いい学校が生まれるのかっていうと、それは違うんじゃないかな。やっぱり、教える、教えられるっていう関係そのものの原像が明治以来変わってこなかったということ、そこが一番問題にされるべきことでは、と思います。

昔は学校の南側に、廊下があつたらしいですね。縁側の延長で。今から百十何年か前に、廊下は北側にしなさいっていう規則ができて、110年間その規則は変わらなかった。去年くらいから南側もよくなつたみたいだけど。そんなようにどこの学校でも同じ形、四角い空間に黒板があって、先生が出てきてチョークの音がしてっていう、あの光景で本当に学べるのかっていう問い合わせが今、あちこちから、子どもたち親たちから出てきてるような気がします。

司会 ありがとうございました。私たちの思い込みをまず変えていくっていうことは、今日のここの大事なテーマだろうと思うんです。私昨日、木下順二さんの『あの過ぎてきた日々』という本が出て、かつての内田義彦さん、野間宏さん、そのあたりの人たちによって「資本論」を読む会、青年文化会議など次々につくられていった戦後まもないとき、青春の本を改めて読んで、そういう思索の時というのが許された時代があのころあったんだなあ、と思ったんです。子どものゆとりと同時に、大人のゆとりですね。私たち教育総研の代表である、日高六郎さんがここにみえていて、私たちの世代の、もう一回り上の世代の、グループの中心でもあった方ですから、一言発言をしていただきたい。

日高 いつもこういう時に何か言わされるのは、やっぱり非常に 学校を批判の対象として 時間割り的ですよ（笑）。

司会 なぜ私がそこへ振ったかって言うと、この会は、ぜひとも日教組をひらきたいという思いが切なのです。そのためにも……。

日高 ちょっとこの後に行きたい会がありまして、失礼するので。僕は本当に戦前派です。学校教育も戦前で、東京大震災の年に小学校に入って、1941年、昭和16年に大学を卒業した。だから「化石」なんですよね。戦前は天皇制教育で非常にひどかったということになっているわけで、まあ確かにそういう側面がある。しかし、一面は非常に牧歌的なところもあった。たとえば中学校を出ていわゆる旧制高校に入るわけだけれど、そのころ中学校の先生は、進路指導というのは一切しなかった。それに対しても親も不満を持たないし、結局なんとかかんとかいろいろ情報を集めて、自分の行く学校を決めていた。

ところがいま大学へ行くには、偏差値だとか、あるいは進路指導の先生だとか、行ってる予備校の人たちの意見とか、そういうことを聞かないで自分で大学を選択することができる少年、少女はほとんどいないっていうんですね。それは、やっぱりかなりすごいことだと思います。何か去勢されたって感じがするんですね。それから、保坂さんの時間割りの話は非常におもしろい。しかし一面、テレビのチャンネルをカチャカチャ回すでしょ。かなり自発的にやっていて、違和感を感じない。非常に悲惨なニュースがあったあとにお笑い番組があって、それを連続して見てて全然違和感を感じない。そういうパターンをわれわれは持っている。だから確かに保坂さんが言われるように、そういうことに耐えられないっていう人間もいるし、むしろ耐えられる、ひとつのことをずっとやれと言われたら、僕はもう死んじゃう、というようなタイプもいるだろう。

司会 ちょっと質問していいですか？ 学校は必要だと思われますか？

日高 僕はやっぱり批判する対象として、学校は存在した方がいいと思いますね。なくなっちゃうとね、そういう存在がなくなるわけでしょ（笑）。それからさっきの学生さんの話、あれもひとつのポイントだと思う。つまり、学校というものを絶対視しちゃうと、かなり問題がある。学校というのも社会的な存在で、それ以上のことはできないんですね。あらゆる集団がそうだ。あらゆる集団が100%、ユートピア的に完璧になったら、その中にいる人間は窒息しちゃう。相当いい加減だから自由もある、という側面もあるん

ですね。しかし、僕は今の学校がいいとは全然思わない。今の学校批判というのは当然のこと。学校が必要かと問いかけると、それは一人ひとりによってまったく違うんじゃないかな。まったく必要のない人もいると思いますね。

司会 ありがとうございました。それでは、質問ありますか。

女性A 坂斎さんに。子どもたちが学校に行かなくなった最初の頃、学校に行かないところいうことが困りますよ、と脅かされたと思うんですけど、その中身がどういうもので、そして坂斎さんが一番不安をもったことはどういうことか、ちょっと補足してください。

学校に行かない不安をのりこえられたもの

司会 ちょっと私も質問していい? ふたりの子どもたちが学校へ行かなくたって生きて行けるんだと、どうやって結論に達したのかを、具体的に触れていただくとありがたいんですが。

坂斎 学校へ行かなくても平気だと思ったのは、「登校拒否を考える会」というところに入って経験者の話を聞いて、中学にほとんど関わらなくても働いている人とか、大学にも行っている人がいるとか、そういうことを聞いて安心したこと。それでなくともうちの場合、朝になると具合いが悪い身体症状を出したものですから、無理に行かせることはできなかった。そこへ会の方々の話を聞いて、平気だっていう安心感をもち、生活できるようになりました。不登校になって最初の頃、やっぱり生きていくっていっていふことはいわれました。社会人にはなれないだろうとか。それにとくにうちの場合、外にあんまり出なくてほとんど家にいる状態が長かった。24時間続けてテレビを見てるとか、手当たり次第新聞とかをパラパラめくってるとか、そういう生活を上の子なんか2年間くらいしていたから、それを知った人から、親以外の人と話ができない子になるよ、とか言われると、ときどき不安になりました。でも「考える会」に行って先輩たちの話を聞くと「そういう時もあってもいいんじゃないの」と軽く言われるので、そうかと思って家に帰って子どもと一緒にテレビ見たり、おしゃべりしていました。そうしたら案の定とか先輩たちの言った通りに、自分で外に出るようになりましたし、自分で進路について考えることもできるようになりました。

昼夜逆転してるのはよくないと言われるんですけど、家の子どもも朝用事がないときは、昼間寝てるんです。朝、どうしても見たい

テレビがあるとかいうときは朝早く起きてるんですね。用事があれば起きてくるっていうのがわかったんです。不登校の最初は昼夜逆転して、それがだんだん直って昼間起きられるようになりますよ、と言われる親も多いんです。それが見ていると用事があれば起きてくる、外に出る用事があれば出て行く、人とも話が必要になれば話をしている。今は、不登校の子どもたちが集まっている会に毎週かよっているんですが、そこへも本当に自発的に行って、そこでみんなで今、文集作りというのをしてる。それも本当に自発的にやり、そのためにいろんな資料をそろえたり、人に話を聞きに行ったりとかしています。

司会 わかりました。「解体して作りなおす」っていう言葉が出てきたんだけど、どういう方向にすればいいのか、そのあたりも、本当はすごく聞きたいところです。自分の体験の中で学校はいったい何だったのかというのか。

現在学校に行かれている若い人たちが今日来ておられます。そのあたりから発言してもらおうかしら。

## 討 論

学校はどうでもいい  
ものに

女性B 学校には行ってなくて、区立中学校の2年C組の○○です(笑)。学校は自分にとってどうでもいいものです、もう。

司会 もう少し詳しく。どうしてそうなったの。?

女性B はじめから学校っていう社会があって、教師が支配して、その支配のもとで子どもたちが動くっていう関係が大嫌いだし、生徒はみんなあくせくあくせくまわりからはずれないように一生懸命グループをつくって、はみ出さないようにはみ出さないようにして、当の自分なんて全然見えてないし、本当にやりたいことっていうのもないくらいに毎日勉強に追われてるから。親と学校の勉強と塾と予備校、その他もろもろに追われてるから。つまんない世界だとしか思えない。

司会 何歳くらいからそういう風に思い始めましたか。

女性B 小学校の頃は、学校を楽しんでましたけどね。

司会 じゃあ、中学校に行ってからね。

女性B 中学では期待がすごくあったから、楽しいところだっていう何か期待が……。

司会 はい、じゃあお隣はお友達ですか。

卒業証書は額入り

男性A お友達（笑）です。今はフリーター、実際は仕事を探しての真っ最中です。おととしの春、商業高校を卒業しました。高校に入った当初は高校を卒業したらそのまま百貨店とかで、いろいろ品物を売るおにいちゃんになると、洗脳されてた。それで高校に入ったところで普ツッとその夢が消えたとたんに、何しに来てるんだろうとわからなくなって、学校に行ってるすこと自体意味とか理由とかなかったから、逆に行かなくてもいいやと思うと、親なんかに「頼むから高校だけは卒業して！」と泣かれたりして、さすがに親を泣かせてまで高校やめる鬼にはなりきれなくて（笑）。結局2学期3学期あたりは行ったりいかなかったりだったけど、卒業できるだけの授業日数はとれてたらしくて、卒業したんですけど。今、卒業証書なんて全然関係ないものだ、親は一番立派な額の中にいれていますけどね（笑）。本当だったら中学校のときから学校なんか行きたくなかった、と今思うんですけど、それでも当時行ってた頃の僕にとっては、もう絶対に行かなければいけないところなんだっていうのが、頭の中にびっしりこびりついていたから、学校に行かないっていう選択肢があるっていうことなんか思いもしなかったから、高校3年くらいになって、高校中退とか本とかテレビとかでみて、くやしいー（笑）とか思って。

司会 ありがとうございます。すごく具体的に話してくれて。もう少し、同年代の人たちに話してもらいましょうか。

女性C 高校を出て浪人中のような感じなんですけど、自由の森学園という私立の、わりと自由な校則のない学校で育ってきて、非常におもしろかった。中学校のときからいたのでとても家族的な関係というのか、そういうのが先生と生徒の中であって、授業なんかも、とてもおもしろかった。でも、偏差値みたいなものについてはテーマとして持っていたから、大学に行くっていうコースについては立ち止まっているところがある。というか私としては初めて、学校がおもしろくない場所もある、ということにぶつかって、小学校のときは考えたこともなく、中高はその場所が楽しくて、初めて大学というところで、あまりおもしろくないんじゃないかと、そう

いう現実を迎えている。もちろん受験学力がない（笑）という問題もあって、でも何かいろんなテーマをしていきたいという思いもあって、こういう教育関係の場所に顔を出したり……。

学校には感謝も

司会 今、自由の森の？もう卒業したのね、じゃあ浪々の身というか、自由な感じね。で、大学に行くとか行かないとかは、自分の選択で決めるということですね。わかりました。

男性B 今、大学の1年生です。小学校の頃からみんなに遅れないように、必死に勉強してたんですけど、中学高校にいくにしたがって、校則とかも規制が多くなってやだなと思いながら、ひとまず大学までいこうとかあと1年だから頑張ろうとか自分を励ましながら、無理やり大学まできた。大学までいっちゃえば、もう高校の校則とかは関係ないなって思ったんですが、くやしい思いがあったんで、いま教育関係とか、環境破壊についてとかいろんな研究会に顔を出している。どっちかっていうと今は、大学をやめてもいいかな……こんなものかなっていうのが何となくつかめちゃったから、とくにつまらない場所とは思いませんが、やめても別に僕には影響はないなと。今まで爆発しないで生きてきたから、こういう会に顔を出すようになった。ということは、いい結果になったんじゃないかなと、逆に学校には感謝しています。

司会 そうですよね、つまり、さっき日高さんが言われたようなこともあるのね。学校がなければくやしいと思うこともなかったわけですよね。高西さん、高西さんは大検の力で今、御茶ノ水の文化学院にいるんです。学校とは一体何だったんですか。

自由な学校では

高西 文化学院ははっきり行ってユートピアで、自由な人間が自由な発言をして生きてて、みんなも認めあって天国みたいな学校だと思っています。やめるのも自由ですけど、自由っていうか芸術家というか、やっていければいいんですけど、みんながそうじゃない。でもみんな、自分の学校を愛していると思います。

司会 中学校の何年までいったの。

高西 私は15のときに先生に受験しますかと聞かれて、しませんと答えて、そのあとまずアテネ・フランスに行き、そのあとなんだかんだで、文化学院の高等部に入りました。そこもドロップアウトして、長野の農場に働きに行ったり、肉体労働をしました。それか

らお金がたまつたので旅にでたり、本当はアメリカに行く予定だったけど、母親にパスポートを取り上げられた。あとでヨーロッパ旅行に行つたけど。大検を受けたのは、友人が受けるというので応援するつもりで受けたら受かった。でもすぐに学校に戻る気にはなれませんでした。その友人は上智の法学部に入りました。早稲田のサークル活動の人と知り合って、学校にもう一度行ってみようかなという気持ちになりました。やはり戻った場所が文化学院だったというのは、とてもラッキーだったと思います。

**司会** 一言でこういう風に彼女は淡々と語っていますけど、そのあいだ、かなり大変な心の戦いがあったんじゃないかと思います。じゃあ学校って何なのか、ということをちょっと。

**高西** 私の好きなジョン・レノンという人が言った言葉に「本当に自分自身に自信がありさえすれば制服はいらない」というのがあるんです。ジョン・レノンもポール・マッカートニーも中卒なんです。でも彼らはああやって世界に出てるし、私は尊敬しています。

**司会** そうすると本当に、学校なんていらないという人生を、み どうして学校をたてんな実証してくれてるわけですよ。ここでおとなの発言を聞いた直すかいんですが。柴田さん、たて直すというのは一言では言えませんか、どういうふうにたて直すのか。現場の先生として。

**柴田** 教員を縛っているものがあるわけです。さっき言いました法律、時間、学習指導要領、さらにいろいろな規則まで。もう、がんじがらめになってる。しかしその中でも、さっきスタッフと言いましたけれども、それなりのこちらの態勢、それがあつてある程度動ければできる。これは体験を通して言うんですけども。さっき言いました中学校というのは、実は広島に修学旅行に行ってただけじゃなくて、まず徹底的に教員の間で議論をする。前例がこうなつてますからこうしますというやり方はしない。学校行事も含めてあらゆる問題について教員の方でも十分検討するが、ホームルームでも議論する。ものすごい忍耐力を教員は要求される。待って待って、待ち続けないといけない。従っていわゆる学習、点数をとる勉強というのを中心におけないわけですね。もちろん中学において高校受験というのは厳然としてあるわけで、必要最低限受験に必要なものはもちろんりますけれども、それをめいっぱいやつた上で、なおかつそれぞれ一人ひとりが生きるような、端的に言えば、学校に来れ

ばすべての子に自分の居場所がある、そういう学校ということ。ずっとそうやり続けて、その代わり教育委員会にはにらまれる、組合からはいじめられる、地域からは批判される。こういうことを私は10数年、たまたま運が悪く、組合の分会長というのを15年間やらされてやめさせてくれない。そういうわけで組合の分会議というのは毎日のように深夜まで校内のことについて、議論して、それを週2回の職場会にかけて、どういうふうに子どもに活かしていくか、やり続けてきた。それで、メンバーがそれなりにいればやれることはないと見えるわけです。

よく育った子どもたち

その中で子どもたちは非常によく育つ、学校に来れば居場所があるわけですから。細かいことについては言わない、きちんと生きていけばいい。自分のやれることをやりさえすればいいと、そういうやり方を続けてきたんですね。従って、批判はずいぶんありました。子どもたちを野放しにしてるとか、泳がせているとか、一体進学はどうなるんだとか、教員が勝手なことをやってるとか。しかしその中で子どもたちは、本当によく育っていって、たとえば、広島の修学旅行でつかんできたものを、自分の進学先で、教員に投げかける。それぞれの進学先のほとんどの高校が、それ以来広島修学旅行をやる、あるいは原爆展を文化祭でやるとかいう形で。もちろん全員ではないわけですが。けっこういろいろな分野で活躍している子どもたちがいます。ですからこれは、ある程度学習指導要領など、無視はしませんけれども、当然教員定数とかいろんな問題がからんできて、お役所の方は規則通りにしかやりませんから、その網をくぐってやるわけで、相当の知恵を出してやらないと、簡単にはいかない。だから、どこででも誰でもできるということではないけど、やってできないことではないと、考えています。

司会 私ね、あまりに先生が立派であると、子どもたちってどうなのかなって感じはするのね。徹底的な討論とか、そのあたりが気になった。何かひとつの方向があるときに、子どもってどうなるか。本当にそれは恵まれている、だけど力は育つだろうか、どうでしょうか。

定時制からみると

男性C 工業高校の定時制に去年の3月までいた教師です。もう、30何年間か、ずっと定時制の生徒を教えてまして、柴田さんが言っ

たのはわかるんですね。なぜかというと、教師側に自由があれば生徒の側にも自由があるんです。いろんなことがお膳立てされれば生徒はだめになるんではないか、本当の自主性がでないのではないか、という心配ですね。そうはならない、子どもたちの考えもいろいろありますから。子ども同士ぶつかり合いが、ほかの学校と違って自由にできる、その保障をどうするかという問題がある。私は定時制ですから、若い方々の話を聞いて、ああ、全然ちがうなあと思った。うちの学校は中学を卒業してほとんどが働きながら勉強する。最近来てる子も、ほとんど働かせる。そうしますと、やっぱり全日制を出た人たちはあまいなあ、つまり社会に生きる姿勢が甘いんじゃないかな。いろいろ批判はしているように思いますが。私がいた学校の生徒はそんな批判は言えないけれども、今の社会に生きるということを体で知ってる。だからどうやってこの一生を生きたいのか、というのを自分で考える。もちろん、おもしろくない教師はたくさんいる、しかし生きていくには自分で力をつけるしかない。きらいな勉強もしなきゃいけない、ということで来る。工業高校でしたから、ほとんど女の子はいません。男の子だけっていうのは、非常に寂しい。しかし来るんですね。そこですよ。自分で力をつけたいという意欲をそだてる学校をどうつくるか。

「学校を変えたい」ということですが、僕は遅れてきたんで申し訳ないんですが、前提条件、とりまく条件がありますよね、そのとりまく条件も変えながら、学校を変えたいのか。あるいは今の状況の中で変えたいのか。そこをはっきりしないと議論がすれ違うんじゃないか。先ほど永畠さんの疑問には、少なくとも私の学校では生徒は自由になった、ということを申し上げたい。

司会 わかりました。今まで発言してもらった若い人たちは決して、恵まれた環境の全日制でやってきた人たちじゃないんですよ、ほとんど。挫折多くやってきた人たちがほとんどなんです。それは最初から聞かれているとわかると思う。むしろ私は、ごく普通の道をいってる人が来てないなあと、そのことを心配してるくらいです。

保坂 先ほど柴田さん自身が、学校を解体という言葉を使われて、その中身ということで現場での話をされたわけですけど、ありし日の組合が頑張っていた頃の学校の昔話かな、という感想をもちました。ちょっと申し訳ないんですけど。つまり、それだけの力量をもって頑張れる人が今どれだけいるだろうか。たとえば、柴田さんが言

真面目さ、ひたむきさのなかに落し穴がないか

われた「連日連夜」深夜まで頑張ってきたというひたむきさ、真面目さの中に、案外落とし穴があるのかな、という気もするんですね。僕自身の自戒もあるんですけど、土曜日はゆとりをもって過ごそうと言いながら、その土曜日にあくせく走り回って当の本人は休んでいない、とか。ある時、日教組の教研集会で、現場はしんどい、私は17年間妻と旅行にも行ってない、と叫んだ先生がいらっしゃって、僕はもう、今から行ったらどうですかって半分野次ろうかなと思った。というのは、あまりにもひたむき、真面目、真面目の上にまた真面目がつくような、ある種の猛烈な真面目主義というか、ひたむきの権化みたいなのは、学校を軽く、というのとは相反するエネルギーだなど。1日の半分は一生懸命やってあと半分はパーッと忘れるみたいな風にはいかないのかなと思うわけです。

司会 発言をしていただきたい人がいます。千葉の佐倉からはるばる来て下さった百名房子さん、おねがいします。

### 「待つこと」の大切さ

百名 先ほどから聞いてまして、登校拒否って裕福な人たち、今は日本は裕福なんだなと思いました。私はもう21年くらい前、高校を卒業して、専門学校に行きたいなと思ったときに行かせてもらえないかった。だから、みんな裕福で行かせてもらえるのに登校拒否ができる、ぜいたくができるって裕福なんだなという気がしてます。私の子ども2人、男で今27歳なんですが、高校に入ってすぐ、1学期頃からもう行きたくないって言い出した。それはもう受験から失敗したんです。1ランク上げて、頑張れば入れるからと子どもが言ったときに、先生が、僕が選んだ学校をふってそこにするのか、とすごく脅して……。で、ことあるごとに言われたんです。それで自分の入れるぎりぎりの下の線の工業高校にいっちゃいました。でも水があわなかったんですね。夏休みも終らないうちに行きたくないといいだした。親としては、行ってくれればいいんだろう、しかし親が安心するからといって、自分がいたたまれない所にはいたくない、と言う。父親というのが、是が非でも高校だけは、という人で、退学じゃなく、休学になって言ったんですけど、私は、そういうふうに子どもに逃げ道をあたえて行かせるのがいいことなのかと思ったので、行きたくないなら行かなくてもいい、ということで退学したんです。環境を変えたらいいかな、と思って千葉の方に引越したんですけどそれがなおいけなかった。自分の部屋も広くなり、閉じ込

もりっきりになって10年くらいいました。父親は、精神異常じゃないか、精神病院に入れた方がいいんじゃないかと言い出した。知ってる精神科の先生に、もう6年も外に出ていないと相談したら、「お母さん、待つことも大事ですよ」と言われまして、私よりも子どもの方がつらいのかなと思いました。それで今度は子どもとじゃなく、主人との戦いになった。やっぱり、うちにいたら人前に出られないんじやないかとか…そういうことは一切ないです。いまは仕事につきました。私が覚悟を決めたときから子どももホッとしたと思いますね。何もいわずにそっとしておきましたら、精神的にも落ち着いたようです。

司会 それでは梅村淨さん。女性民教審のメンバー小児科医です。今までの人たちは一応、働くと思えば働く人々ですよね。ところがそこさえも閉ざされがちの、だけどいま子どもたちの中に混じって普通高校へ行けるようになったお子さんをおもちの立場から、話してください。

梅村 うちの子は19歳ですけど、ハンディキャップをもっており、ハンディもつ子の高小・中学校は普通の学校にいきました。義務教育だったので。高校生活ということを考えるときに、どうしてハンディをもった子が高校に行かなくちゃいけないのかなということを本人も含めて考えて。点数が取れない子なものですから、いつも試験が0点で、中学3年間悲しく行ってた子ですから、何のために高校に行くのかを考えて、3年間いろんなことをやってきて、去年の4月から都立高校に入ったんです。どうして0点の人が入れたかというと、都立高校離れということも最近あって、定員に満たない学校だったものですから、たまたま2次試験で50人の募集のところに女の子が20人くらいしか来なくて、0点の娘も入れたということなんです。彼女は5回高校を受けて、5回目に合格した。4回は自分は通らないできた、それで5回目に、掲示板に自分の番号があった。番号がないということで自分は「ゼーんぜん」の人であると、思い続けてきたんですが、番号がそこにあって高校に受け入れられたっていうことで、自分は「ゼーんぜん」の人じゃなくて一人前であると、高校生として認められてきたっていうことを言ったんですね。「どうして頭が悪いのかなあ」ということをずっと言ってて、でも番号があってからは自分は「頭は悪くない」つまり一人前であると、そういうことを言っ

ていた。そういう意味では、学校から排除されている者にとっては、同世代の子どもたちが集っている場というものが一人ひとりの人格を認められる場であると思います。いろんな友達との関係をつくっていく場であることがあります。1年間通い続けてきたけど、住んでいる所がすごく遠くて1時間半くらいかけて行くんですね。足や手が不自由なですから一人では行きづらくて、介助の方と一緒にっています。あまりにも遠いので、最近では高校の近くに下宿を借りて、1週間に2日くらいはそこから通うこともあります。そのことを巡って今度は高校と私たちとの間でやり取りがあった。高校の管理の側としては、未成年者に一人で下宿させるということに、非常に危惧を感じると言われました。自立していくためのステップとして、アパートで若い方と一緒に生活する、ということを申し立てているんですが学校はあくまでも子どもを、親なり学校なりの保護のもとにおこうとしているというのがすごく見えていた。本来、学校は子どもが一人の人間として認められ、友達同士が行き交う場であるはずが、どうしても子どもたちを枠の中へはめていくとしている。そういうものとはやっぱりやり合っていかなくちゃいけないな、と最近では思っています。

司会 子どもの居場所をつくるっていうことを許さない学校も多いんです。困ると言われてしまう。そういう発想と同じなのかしら。ここで久田邦明さん、教育総研第3委員会のメンバーです。いままで聞いていていかがですか。学校というものに対して。

#### 数少ない集団生活の場

久田 感想を少し。松下さんが、学童保育の子どもたちの学校観を紹介された。そのとき、小さいうちからもう学校をきらいになっている、きらいにさせられてるというコメントがあったんですけど、私はむしろ、わがままなことを言ってどうしようもないな、という感じを持ったんですよ。私は、発言の中では、柴田さんと工業高校の元先生と、それから福田さんの、卒業証書を額に飾ったというお母さんの話に注目した。愛を感じました（笑）。保坂さんが柴田さんの実践に対し、17年間妻と旅行に行ったことがない先生の例をあげられけれども、私もこれは好ましくないと思いますが、ただ、柴田さんの実践を批評するのに、そういう極端な例をあげるのはフェアじゃないと思う。極端なヘンな人っていうのはどの世界でもいますから。それと元先生が若い人の話を聞いていて、みんな今は恵ま

れてる人が多いんだなとおっしゃった。言われた方は今は時代が違うと思うと思いますが、それでも元先生のおっしゃることは当たってる気がします。つまり、学校現場で教師がいったい何ができるのか、っていうことを考えなければいけないと思うんですよ。次に、学校について。日高さんがまるで長老のような言い方をされてたんで、ちょっと困るんですけど。私は、学校は、いま若い世代が集団生活をする数少ない場になってると思います。エロス的な関係、泣いたり笑ったり、人と信頼関係をもったりするというホットな関係、そういうものが可能性としてある、数少ない場になってるとみてるわけです。学校否定、学校批判をされる方とは対極に位置するようと思われるかも知れません。そういう学校の可能性というものを、むしろ積極的に切り開いていくことが、今求められているという考え方です。

司会 はい。対立点はかなり出てきましたね。学校というものをいったい認めるのか認めないのか、それから一生懸命やってくださっている先生たちというのがいて、だけど子どもっていうのは、なかなか思い通りに育つものじゃない。そのとこですね。子どもの可能性というのはもしかしたら、どうしようもない学校に行っているときに、かえって育つのかも知れないっていう、そういう気配が私にあるんですね（笑）。私はね今日、きれいにまとめようとは思っていないんです。どうです、誰か発言を。

男性A さっきの、一番いい額に卒業証書を入れられてる、福田 学校は「学べる」とですけど。親の愛を感じましたか？ 親の期待でしかないんですよ、ころの一つ高校を卒業してくれ、頼むっていう。その期待がすごく重たい荷物っていうか、十字架っていうか、そういうものにしかならないんですね。なぜ親のためにここまでやんなきゃいけないんだろうと思う時期もあったし、親の涙に屈してしまった自分が、ああ情けないと思うときもあります。ここで親と子の話になっちゃうんですけど、「親の期待には応えられないよ」といつも言ってるんですよ。最近なんか、もうまともなところで働いて、ちゃんと保険とかあるところで働いてくれ、と言われても「あ、期待には応えられない、ごめん」。自分でもほかに、芝居とかやりたいこともあるんで期待には応えられないよ、と言ってる。で、うちは今小学校3年生の弟がい

まして、その勉強をいつもみてる。いつも学校からプリント持ってきて教えるんだけど、やり方とか全然把握できない。なんでこんな単純なことがわかんないんだろうと思うんだけど、弟としては算数とかを覚える以前に、その勉強自体にアレルギーというか、嫌悪感を覚えてて。そういう嫌悪感を植え付けてしまったのは、その授業風景であり先生であり、学校であると思う。で、その学校から持ってきた宿題を、お父さんお母さん僕と弟で、こーんなこじれながら、勉強を教えても当人はなかなか覚えないっていう状態。でもそうやってずっと、すったもんだやってるうちに、なんだうちでも教えられるじゃないか、教えられることってあるじゃないかとなったりする。

ずっと話を聞きながら考えてたんだけど、学校でしか学べないことと、学校では学べないことと、どこででも学べること、っていう3種類があると思うんです。今学校で先生が教えてることっていうのは、どこででも学べることなんじゃないか。でも学校でしか学べないことってそのほかにもあるだろうし、逆に学校では学べないということも山ほどあるし。そのうちの二者択一っていうのは、あまりにもナンセンスというか、つまらないと思う。学校でしか学べないことは学校で学ぶ、学校では学べないことは、学校からはずれてほかの行きたいところに行って学ぶ。そういう、行きたいところのうちのひとつが学校、というくらいでいいんじゃないかな。だから、今ずっと学校に行ってる弟がふびんでならないです（笑）。

司会 いやあ、いい発言ですね。その通りですね。その額に入れたお母さんという存在も、もっと深く考えたいところだけど。久田さん、今の発言に対して、いいですか。

### 深刻な親と子の問題

久田 ひとつはね、日常生活が楽しくなれば、学校は楽しくなくなるんですよ。昔みたいに日常生活が厳しければね、学校に行ってるだけでも仕事しないで済むからホッとするわけですよ。ところが今家庭が快適になって、学校へ行くのがいやになる、家にいた方がいいということになっちゃう。これは、学校そのものの問題とはちょっと別のことだと思うんです。それともうひとつ、親が、子どもに期待をかけるとか無理強いするというのは、当たり前のことなんです。子どもとしては、あなたのように、迷惑なことだという風に気づいて大人になっていけば、それでいいんです。ただ、それがね、

親と子の間だけじゃうまくいかない場合が多いですよ。親が押し付ける、子どもが反抗する、と。その親と子の関係をみて、手助けしてくれる人がいるかどうかというのが大事なことだと思います。そりやあ、親はそういうもんですよ、期待かけますよ。で、子どもは迷惑に思う。あなたのお母さんはすごく苦労したかも知れないとね、学校のことで。だって世間のレベルで言えば誤解しないでもらいたいけど、たかが高校の卒業証書じゃないですか。それをそれだけ大事にするというのは、そこには親の思いがありますよ。そういう意味で愛を感じますよ。あなたも親の愛にみあうだけの子どもにならなきゃいけない（笑）。

**保坂** ちょっと質問があるんですが。今きいていると、徳川300年の最期を飾る白虎隊の隊長みたい（笑）。僕は学校の時代は明らかに終りつつあると思うんです。とくに、親の愛っていうこと、これはあんまり論じられてないんですが、埼玉の高校のベテランといわれる教師が妻と一緒に、子どもを殺しましたよね、ミュージシャンになりたいという長男を。それに対して、助命嘆願運動が起きました。教師仲間も親も、先生がかわいそうだと。だけど逆に金属バットで親を殺した少年のときには、ものすごい報道で、この異常な殺し方はなんだといった。あの事件についてどう思われますか。親はミュージシャンになるような生き方を認めなかった。やっぱり高校中退したわけでしょ、あの子も。親が子を殺してしまうということについてどう思われますか。やっぱり、親が愚かだっていう。

**久田** そりやそうですよ。でも他人が言うことですよ、それは。親は大変だし、教師の親は大変だし、教師の親をもった子どもも大変なんだと思います。

**保坂** いや、殺すまでにいっちゃったということに対して……。

**女性B** 親っていうのは、子どもにとって一番の味方であるべきで、親子っていうのは話し合えばわかりあえる部分っていうのは、絶対あるはず。教師っていうのは第三者としているものなんだけど、親っていうのは教師に期待しすぎるし、親とか教師っていうのは、何で子どもは自分の思いのまま動くと思ってるんですか。だっておじさん、そうでしょ（笑）。

**男性C** 私は戦中派で、戦争の厳しいときでしたが、学校は自由 教師よりも先輩としてでした。だから戦後の方が、自由がなくなってるわけです。それを

考えないと、学校をどうするか、というのは決めてくるんじゃないかな。学校の中身がその時代によって違ってきてている。その原因は何なのかをはっきりしないと、これから学校をどうしたいのかの出発点が見えてこない気がする。久田さんが反論を受けているのは、教師の口調で話しているからなんです。教師の口調で言うと押しつけととられ、意図したことと聞いている人の感じが全然ずれてしまう。私はずっと定時制できましたから、いろんな大変な子がいるわけで、いわゆる教師口調では成り立たない。人間と人間という形で、ちょっと年とてるから先輩だ、先輩は後輩にこういう期待をするんだという言い方をしますと、割りと素直に聞いてもらえるだけなんですよ。

定時制にきてる子どもたちを見てて、今日の発言を聞くとね、ちょっと違うな、私の世界だけが特殊だったのか、と思うほど違う感じがする。つまり、子どもたちはすごく生きることに悩んでた。それには必ず、自分の知識を伸ばすということが絡んでいた。だから学校を、たいていの子は捨てなかった。捨てたら生きていかれないなっちゃう。そのへんを、今日の議論でつきつめてほしい。学校を捨てても平気で生きていけるという人がいたので、どういう風に生きていくのか、どういう風に、系統的に知識を組み立てて集大成していくのか。雑学的なものはたくさん入るでしょうが。で、学校でやってる系統的なものは非常に難しい、いやなんですよ。僕だって自分で習ったときは大変で、いやいやだけど、やらされて力をつけた。自分だけでやっているといやなものは避けていきます、そこをどう切り開きながら、学校に行かなくても平気だといえるのか、そのへんをつきつめて議論しないとね。

司会 私は歴史をやってるんですけど、戦前戦中、いわゆる天皇制のもとに画一的な教育がなされて、あの戦争が起こったと思うし、思想の上では縛られ続けた学校だったと思います。ただし、みんなに教育が強制されない。家庭の貧しさで私なんかも15歳で学費うち切り、という家庭に育ちましたから。そういう意味での子どもの育っていく自由さはあったかも知れない。でも、いま問題になっているのは現在の学校です。私は、定時制というのは非常に好きで、定時制はどこに取材に行っても、本当に人間の温かさみたいのがあった。だから多分、先生のおっしゃってる世界と、いわゆる義務教育の世界とはズレがある。それは前提として申し上げたいと思いま

す。それで今日、この時間はもう限られてきて、「学校——どう変えるか」にもっていきたいんです。

伊志嶺 短大で一般教育などを教えております。今日のテーマが、あてにしないで利用「学校——こう変えたい」ということでいろいろ発言を聞いてますと、すれば—やはり学校を行かなければならぬと認めた上での重苦しさみたいな発言がほとんどで、私自身もまさにその通りなのですが。秋にカナダに行きました。カナダは世界一人権意識の高い国なんだそうです。登校拒否があるのかと聞いたら、あるらしい。ただ日本のように多くないし、ほんのごく一部分だったと思うんです。カナダとかアメリカの教育を見ていますと、文化がそうなんですけど、個人、個性を認める社会ですから、まったく普通の顔して生活しているようです。ですから学校が負担になるということは非常に少ない気がします。たとえば、障害のある人なども、社会の中でどう生きて行けるかのサポートだけを考えていく。たとえば大人の障害者の例を聞きましたら、バンキングという場面が出てきまして、お金を銀行から出し入れして生活するためにどう使うか、そこらへんの収支までボランティアでやってあげる人がいるわけです。そこまで面倒みてしまうような社会を聞きまして、私と一緒に行った大学の先生がじれて、なぜその能力を伸ばすことをやらないのかという。学校の統合教育を見ててもそれを感じるわけですね。日本だったらなんとかもっと引っぱり出して教育しようと考えるところを、もう伸ばさうでなくて、彼はそれが必要だからそれをしてやろうという社会なんですね。そういうことでさっき「学校を軽く考えよう」ではないんですが、学校を当てにしないで学校のもっている自分にいいところを利用する、そんなくらいの気持ちでいければ、学校も変わらざるを得ないのではないかと思います。

司会 ここで日教組の副委員長の上西さん。教研集会で、こんなにやっています！という報告を聞くと私はいつも抵抗を感じて、そんなにやってもちっとも変わらないな、という感じがしていて、だけどやっぱり頑張っている先生を励ますことが大事なのか、とゆれるわけです。今日の発言を聞いてて、学校というものをどう変えていくのか、はっきり言って日教組はどう考えてらっしゃるか、一言聞かせていただけますか。

生涯学習のひとつとして

上西 今日の発言者に直接答えられるような、日教組の回答というのは用意してません。ただ学校教育を再生するというのは、日教組にとって大きな課題です。学校とは何か、やはり生涯学習の選択肢のひとつとして学校がある、という風に考えたらいいんじゃないかなと私は思うわけです。これは、見解とか方針とかと少し違うと思うんですが。先ほどからのいろいろの発言でもわかりますように、今の学校教育はいろんな矛盾をかかえていることも事実です。そうした矛盾を有効に解決しよう、改革しようという意欲をもたない教師がたくさんいることも事実です。それじゃ、学校の再建に向けてどういうことができるかというと、ひとつは、今の均一な教師集団をどう、もっとフレキシブルな均一でない教師集団に変えていくかということになる。そのためには、いろんな人が混ざりあった教師集団を可能にするような教育行政が必要です。もうひとつは、分権といいますか、教育行政は文部省を中心とした中央集権化で、きわめて管理主義的な教育が行なわれている。それをそれぞれの地域に根ざした教育ができるよう、教師の採用もやはり地域からできるようなものにする。免許制度の改革も必要です。もっと社会人が学校で教師ができる状態をつくっていく。制度的には、弾力的な教育制度、たとえば就学の自由・出入りの自由ですね。もちろん教師にとっても出入りの自由が保証されるような学校でなければならんじやないか、ということを感じながら、聞かせてもらいました。学校を再生する鍵は、今の教育制度をどう弾力化していくか、ということと、教育行政の単位をもう少し小さくして、地域単位の教育行政というものをどう実現するかだと思います。もうひとつは、教育内容を基本的には一人ひとりの教師が選べる、つくり出せる状態をつくっていくことです。

司会 それを文部省と常に話し合って、戦っていかれるか、そこですね。本当にそこで渡りあって、今日私たちが話したようなことを伝えていただきたい。

上西 それは十分わかります。日教組として今の制度をどう変えるかという、ある意味では文部省にのった教育改革という形になってるわけですけど、やはりもう少し学校教育再生へ向けての大膽な発想の転換というのは必要じゃないか。もちろんそうなればその時点で文部省も不要になるし、日教組もいらなくなるという状態が当然くるかもしれません。

**柴田** かつて担任した子に「中学は、なんで3年あるんだよ」と 教員の価値観の転換言わされた。「2年でいいじゃないか」。要するに勉強がきらい、やりたくない。だけど学校は好きなんです。学校へは来る。今、子ども同士の集団の場が地域にない、学校しかないんです。そういう「場」としての学校の位置というのがあるんじゃないか。いい悪いは別にして。それから学校というのは、小学校から大学まで含めて結局は、権威と金、っていう価値観を与えるところですよ。で、高けりや高いほど、権威と金が高くなる。そういう制度になっちゃってる。日本の社会自体がそういう状況にあることは否めない事実です。だから「あいつは俺より頭がいい」。頭がいいってことは要するに点数をよく取る、っていうこと。つまり偏差値が高いということなんですね。そういうことで上下関係がつくられていく。つまり権威が高い方が上で、権威が低い方が下と。じゃ実力だけの世界、っていうと日本相撲協会。しかしあそこは天皇支配で天皇という最高の権威を持って保たれてる。そういう権威と金、という価値観が残念ながら社会にかなり蔓延していく、親も含めてそれに振り回される、という状況が現実にあるんですね。そういう一端を担っている自分自身をどこまで対象化できるか、要するに教員自身が自分自身をどこまでそういう風なものとして見えるかという、そのあたりの価値観の転換、発想の転換が出発点になるんじゃないかな、という気がしてます。

**松下** 学校がなくても生きていける、とさっき言ったけれども、 学校なしで生きられ今は本当に生きていけるなと思います。働くと思ったら働くし、すること バイトはいろいろあるしとりあえず1ヵ月分の収入くらいは得られる。学ぼうと思ったらこういうところや、またいろんな人からいろんなことを学べる。学校だけが学べる場でなくなっている。体系化されたことを暗記することだけが勉強じゃなくて、その場その場でぶつかったことを考えて、身につける勉強もあるんじゃないかな。学校というのはいやなところだったりもするし、大勢の友達に出会えるというよさだけなんじゃないかな、と感じています。今の若い人が社会に出て生きる姿勢が甘い、とおっしゃったけれども、決してそうではないと思う。危なっかしく見えるかも知れないけど、若者は若者なりに自分のやり方で模索してやっていると思う。長い目で先を見てほしいな、というふうに思いました。

**坂斎** 今の松下さんとだいたい同じですけれども、学校は子どもたちが今まで行きたいという気持ちだけでいっていたんではなくて、行かなければいけないところだと思っているのに体が動けず、行けなくて苦しんでいる、というのが不登校の子どもなんですね。だから本当に、学校が自由というか、行っても行かなくてもいいところだということが一般的に広まれば、不登校の子たちが体で苦しむ、っていうことはなくなるんだなと思いました。

学校は半日でいい

**保坂** 具体的に言うと僕は、「学校半日制」をずっと主張しているんです。3年くらい前それを言うと、組合関係の人から何を言ってるんだ現場を知らないものが、と嘲笑が起こった。だけど林竹二さんの世代の教育学者の人が手を打って「その通り」と反応があった。あまりにも過剰な、学校や塾や部活も含めて、寝る時間もないというのは異常ですよ。それに対して学校半日制。いろいろ論議があるけれども、半分でいい、半分でも多いかもしれないくらい。子どもも教師もいま、市民じゃない、つまり市民である実感を持てる時間がない。子どもの市民的権利を保障する子どもの権利条約がたとえ批准されても、市民としての時間がないから使うひまがないということになってしまふ。だから学校を半日にすべきだし、柴田さんが言われた「学校を居場所に」ということもすごく賛成で、午後はいろんな大人や地域の人が入ってきていろんなものをつくったり、身体を動かしたり、ミーティングをしたりする場になればいい。いま居場所やフリースクールができるっていう話をしましたけれども、僕も「ほっと塾」という、「学歴社会の枠に入ったら絶対にそれてしまうぞ」という危険な塾をやろうと思ってる。むしろ創造的なものを一生懸命つくることをやろうと思ってる。そういうものを、空き教室にいれるといい。東京や首都圏はすごく場所がないわけで、たとえば空いてる教室に在日外国人の語学教室もあれば、フリースクールもあるという具合に、学校という場を使っていくくらいの柔軟な提案を、学校の内部からぜひ声をあげてほしい、と思います。

若ものもみとめてほしい

**男性D** さっき若いやつらがわかってないと言った大人がいましたけど、わかるんですよその気持ちは。だけど時代が違うんですよ。システムになってるこの社会をつくり直すなんて無理ですよ。だけ

どちょっとづつの波が起これば、いつかはベルリンの壁のようになるでしょ。だから心の革命を起こしてほしい、どんな人間でも、50歳でも60歳でも。今の若者今の若者、って言うけど、はっきり言って自分ができないからそうやって八つ当たりするでしょ（笑）。で、結局俺らが30代になると、今の若者は、っていうことでまた溝ができるでしょ。教育がそうなんです。溝なんですよ、溝ができちゃったんですよ。もと自衛隊員ですけども、俺。今の子どもたちは、暗いでしょ。だから俺、今の日本は恐くてしようがないですよ。どこでも通用する人間なんていないですよ、みんな苦しみながらでかくなるんですよ。俺だって今そうですよ。だから、先輩たちのこと本当尊敬しますけど、もっと僕たち認めてほしい。遊んでるやつもいるけど、一生懸命真面目に働いているやつもいる。そういう部分をもっと、ひとつの角度じゃなくて多様な角度で、こういう討論会の場とかでも見てほしい。

司会 すごいというか、ニヒルというかどっちともつかず、非常にいい、つまりおとなっていうのは、いつも「今の若いやつは」という風に言ってきた。それをまことにちゃんと言ってくれたなあ、という感じがします。

小沢有作 東京都立大学で教育学を教えています。やっぱりそう 教職につくためには単純にいかない、という話をしたい。教育原理という授業を担当します。教育原理という授業を取らないと教師になれない。今のシステムのもとでは、学校を出ないと教師になれない、現実として。僕は、学校というところはいろんなことを教えるけれども、ただひとつ、学校とはどういうところか議論しないところだと考えてます。ですから僕は教育原理の授業で、学校とはどういうところか、っていうことをやります。やり方は非常に抽象的です。まず学習指導要領を全部読んでもらいます。で、その学習指導要領がどういう特徴を持っているか、それに基づいて教科書はどういうふうに書かれているのか、ということを調べます。それが第一。第二は、指導要録についての通知というものがある。これは、成績のつけ方を決めてる。これをみんな一緒に読みます。そしてこれに基づいて自分たちの通信簿はどういう風につくられてきたのか議論します。第三は、文部省が1年間の授業日数を決めてる、これに基づいて時間割がつくられます。その授業日数の一覧表に、学校の時間割とはどうなってい

るのかを検討します。そのうえで、学校によって自分がどのようにつくられてきたのか、エッセイとして学生諸君に書いてもらいます。つまり学校の問題は、学校は敵だ、で済む問題じゃないんです。自分の中にいろんな形で影響が入っている。そこをそれぞれエッセイを書いて、それをもとにして自分にとって学校とはどういうところであったか、議論します。僕にとって学校とは、というのは学校をどれくらいリアルに認識するのかという問題です。その中で学校をどう変えたらいいのか、が出てきます。授業をどう変えたらいいのか、通信簿に対して非公開という案もあります。それに対して学生が時間割がおかしい、とか異議を申し立てたり。そういう自分の中にある学校を見直すことを通して、学校のこの点を変えたいということが出でてきます。そういう教育原理をとった人間が、教職の試験に受かるかどうか、僕は知りませんけど（笑）。僕はそのときに、二重帳簿にしてほしい、と言ってるんです。本当に受かりたいんだったら指導要領を読んでその通りそのまま書けばよろしい、でも自分の心の中ではもうひとつの、指導要領批判を持って現場に行ってほしい。だから本当に教師になってほしいし、教師になる際に、嘘について教師になってほしい（笑）、と言っています。

**司会** 先生の教室からそういう二重帳簿をたとえ使っても本当の教師が出てほしい。それをつよく願います。

### 子どもの居場所としての学校

**小沢牧子** 私は「学校居場所論」をとなえます、いつも。子どもにもおとなにも、学校がないと困ると思うんです、やっぱり。ひとつの要素として、親は働いてますからね、今、お母さんも。おとなが働いてる間に子どもが過ごす場所がどうしても必要です。これは母親たちの本音だと思います。やっぱり昼間子どもが安全に過ごせる居場所が必要で、その場所はぜひ公立の学校であってほしい。

次に、その居場所が、子どもがいやなところじゃ困る。やっぱり楽しい所であってほしいし、何よりも元気が出るような場所であってほしい。学校がどういう所であつたらいいのか、っていうことは、学校ですごしてるのは子どもなんだから、子どもや若い人の言葉を聞けばわかるはずです。私がいつも感じるのは、子どもたちが一番望んでるのは、友達に出会いたい、っていうこと。いろんな人に出会いたい、友達に会いたい。勉強を教わりたいというよりも、友達に会えるから学校に行ってる。そこをもっと素直に見たい。久田さ

んはさっき、学校は子どもが集団生活を体験できる唯一の場になっている、と言われました。その意味もわかるけど私は集団生活って言わない。出会うっていう表現を使いたいのです。そこから先は子どもが勝手にやることで、おとながきっちりと決めたくない。ひとりでいる子もいるだろう、それはそれでいいと思います。

体系的に何かを学ぶ、っていう話も出ました。私自身もそういう学び方をしてきたからわからないわけではないんですが、さっきも打ち合せしてる間にちょっと冗談半分に言ったんだけれども、たとえば高校のとき習った確率とか順列組合せとか、競馬場に行って馬券を買うと、すぐわかるんですよね（笑）。生きた勉強をホットにてきて、競馬場っていうのはすごく面白い社会なんです。もちろん一例ですが。そういう学び方だって実際にはあるし、できる。何よりも、子どもが地域のさまざまな友達や教師という人々に会える、これは学びの土台としても、一番欠かせないものです。まずそれが基本だっていうことです。のために、今の学校をどう変えることができるか。案外簡単なことじゃないか。もっとあたりまえに考えていきたいと「居場所論」の立場から思っています。

司会 私もずっと働いていたから、子どもは学校へいってもらわないと働けない。うちの息子は音楽の仕事で生きているんですけど、ああ、これは学問がないと40代50代になったときに食べていけないなということが、働いてわかったんですね。それで、またなんとか自分の力で大学にいったんです。そういうものでいいんじゃないでしょうか、学校というのは。つまり自分が必要と思ったときにいくという、それで許されていいんじゃないか。だから、「義務教育」という「義務」に私はひっかかりますね。それはもう、明治以来の倫理という感じでおしつけられている。そこをこの場でぜひ詰めたいところですが、残念ながら時間がなくなりました。このテーマはあと1回くらいはやりたいな、という感じがしています。今日は寒い中、集まつていただきありがとうございました。（拍手）

# 見えてきた問題

---

家庭と学校—この切り離せない関係	永畠 道子
戦後の社会意識と相対五段階評価	山部 芳秀
子ども文化の消失と未来	小沢 牧子
学校改革への道	小沢 有作
私学ブームをどう考えるか	原田瑠美子
居場所としての学校をめざして	小沢 牧子
子どもと教師が楽になるための発想転換	原田瑠美子

---

## 家庭と学校—この切り離せない関係

永 畠 道 子

敗戦直後の家庭　敗戦直後、日本には敗者の男たちが復員してきました。女たちはもともと、近・現代の歴史のなかで、大部分が共働きであり、戦時中はことに夫の不在を埋めて、積極的に職場に出て、女が働くことへのつよい自信が育っていくのです。戦死者が多く、女は一家を支える働き手がありました。一方アメリカでは、いち早く第二次世界大戦直後に家電の開発が積極的に行われています。それを享受するために、女たちは家庭に押し返され、アメリカの場合、女の保守化は日本よりずっと早く進行していきます。

日本では、1953年の池田・ロバートソン会談を機に、イールズ事件までさかのぼるならばもっと早くから、文部省の戦後の決意が崩壊の兆をみせはじめます。しかしほぼ1955年あたりまでは何とかその初心が維持されてきたとみてよいでしょう。同様に女たちも、戦後の十年あたりまでは、必死で働く状況がつづいていました。

そこへ家電の開発が進行して、女のまわりを埋め始める。まず掃除機、洗濯機など。そして石垣綾子さんの「主婦はふやけている」という提起をきっかけに、主婦論争が始まっていきます。

ちょうど時を同じくして、学校もまた、勤評、教育委員任命制へと、急転換の状況に入ります。太平洋上でアメリカが、日本に対して迫った“教育による国を守る気概”と関連して、1957年2月、総理府の「調査月報」は“戦争体験を持たない十代への新ナショナリズムの昂揚”をはっきりとうたいます。その直後、学校での管理規制が強化され、校長会が組織される。初めての全国校長会が中央でひらかれて、現場はしだいに分断されていくのです。

ところがこのような風潮に対して、校長会は当時反対声明を次々に出しました。まだ、戦後の初心はたしかに受け継がれていたと思います。

ここへ高度経済成長が重なってきます。家庭も学校も大きく変貌していく時期が、1955年から60年代にかけて。それは「複合汚染」とも呼びたいほどです。1961年以降の高度経済成長のとき、池田ラッパが吹きならされて、核家庭の、いわば「サムライ社会」、男が働いて女は家を守り、子を産む、優雅な生活にさらに、使い捨てが奨励され、子どもを真ん中に据えた子育ての上に、受験戦争がもうに重なってきます。

塾元年はほぼ1955年と言われています。高校全入が崩れしていく過程とまったく合致しています。そのとき、大衆の女たちのなかから「これはおかしい」という動きが起り、高校全入運動の第一次の高まりが、1960年前後に起こってきます。女たちは、高校全入ということで高校をふやす運動に取組んだのですが、それが職業高校の増設へすり替えられていきました。このことへの反省が起こって、第二次高校増設運動は、「普通高校をふやす」方向へすすみます。

ところが、まもない1963年の段階で、女たちへの歯止めがかかります。厚生省が発表した保育七原則は、「母親よ、家庭に帰れ」を強調した。子育てを、母親の大切な仕事と説きながら、それとひきかえにパート労働をすすめるための大号令がありました。これは、そのまま、職場に出たフルタイムの女たちの肩たたきにつながっていきます。

同じそのころ、第二の非行が起こります。核家庭のなかからふき出た子育てのひずみ、受験戦争のひずみ、それが同時進行して、子どもたちの上にあらわれ、「受験と豊かさの非行」とよばれました。これに対して、市民運動があちこちで起こりはじめます。公害問題、高校増設の問題、P T A改革も。

「十代へ、新ナショナリズムを」  
(1957. 総理府)

複合汚染ひろがる

女たちへのハドメ企業の論理

1971年、パート奨励策が打ち出され、パートによって女たちの労働力は企業の安全弁となりました。これからの雇用形態のすすめとして、このことをはっきり図表に示したのが、当時の経団連です。常雇いを減らして、たとえ不況となつてもなるべく本体を揺るがせない方向へ。それに利用されていったのが、女たちの、あえていえば“いい加減の共働き”でありました。性の自立とは程遠く、機械の一部品に過ぎぬような女たちの労働がはじまり、企業戦士となつた男たちの生き方と重なつて、家庭はゆっくりと砂漠化していきます。

#### 日本列島改造と主婦蒸発

女という存在は一体何なのか、働くということは何なのか、しだいに考えていくときが、1969、70 年のリブの運動以降にあって、市民運動は実にさかんになりました。

そこへ1973年暮の石油ショックが起こる。これはあらゆる市民運動を崩すものとなりました。たとえば、合成洗剤を使わない、水を守る、受験戦争を隣の人と手を取りあってなくすための高校増設運動など、社会を揺さぶっていたそういう力が、いっきにそがれてしまい、他人のことはどうでもよい、受験戦争に我が子だけを駆り立てる、持田栄一氏の表現によれば、一人ひとり家にタコ壺掘って受験戦争をやる、そういう方向へ家庭は大きく動いていってしまうのです。

その後、1976年をピークに起つたのが主婦蒸発という現象です。これは、はっきりと生きがいをなくした女たち、「ペット化した子ども」という、自ら作り出した不安な存在に、生きがいを託してしまった女たちが起こした現象です。

取材のなかで、子どもをかわいがつた母親ほど、ある日、突然に蒸発するという、思いもかけない結果にめぐりあつていました。ことに工業団地周辺から多くの事例が起つっていました。日本列島沿岸地帯は公害の巣となり、工業が海岸線をみるみる埋めていった。それと同時に、女たちもまた、核家族のなかで頬廻をあえて自らに強いた、と私は思います。

1983年、イバン・イリイチが、私たちの生活のいたるところにリベラリストの証言、学校というプラグを抜く  
差し込まれた「プラグを抜く」ことを提唱したそのころ、「学校制度のプラグを抜く」本を一冊まとめました。そのとき、中教審会長であった高村象平さんの発言に、次の部分があります。“自分が

打ち出した「ゆとり」は行事のゆとりでは全然ない、お祭とかいろいろなこと、あんなバカなことをやってもらつては困る、授業を10分でも早く打ち切つて、教師と子どもがじっと目を向かい合わせて何かを考える、そういう心のゆとりを持ってほしいのだ、教案を校長がチェックするなんて、そんなバカなことを現場でやつてはいるのか。なぜ教師を信用しないのか。全国一齊にアサガオを栽培していくこともおかしい。中間管理職が「ゆとり」の思想をねじ曲げていったのではないか”大正リベラリストの象徴のような高村氏です。発言のなかで次期中教審にかけるひそかな抱負のようなものを伺つた直後、中教審は休止に追い込まれて、中曾根内閣直属による臨教審が持たれます。臨教審は企業の要請の色濃いものとなりました。

いま多くの親たちの意識、子育て真っ最中の主婦たちは、世間にたいして自分たちの家庭を誇り、家庭をうまくまとめていくことに力を注ぎます。かなりの教養がありながら、まず子どもを一定のコースに乗せ、その後に自分の人生を考える、そういう意識がしだいに強くなっています。

かつて戦後世代が決意した女性の自立の気持ちは、子どもを溺愛することで崩されていきつつあります。家庭科を、戦後の男女共修から女だけのものに変えていった高校校長会の働きを追うだけでも、日本の行政の保守化の過程は明らかです。女はやはり家に縛りつけておくもの、「女、子ども」という表現が、世の中では、根底のところで変わっていないのではないかでしょうか。

家庭科は一応男女共修に戻りました。しかし、これは国際婦人年十年のぎりぎりの要請で、日本は仕方なくそれを実行したのです。家庭科の中身については、どれほどの学校がほんとうに男女の平等を教えることができるのでしょうか。何をしてよいかわからない現場に、コンピュータの新しい市場が導入され、これはやがて学校→家庭へつながっていくシェアです。確実に。企業に活路を与えることに熱心な家庭科の目指すところは、いったい何なのでしょうか。性の教育についても、まことに不安を感じてしまいます。

夜間公開研究会をつづけながら、子育てについて、いくつかのことを考えています。第一に、子どもは家のなかでほんとうに幸せな理解者を持ちたい。学校はやむを得ず点数がつく、それを家庭に持ち込みたくない。家庭は唯一子どもの味方となる場所でありたい。

「溺愛」の不幸、いま家庭は

夜間公開研究会がめざしたこと

「教える」から、「学び問う」関係へ

第二に、少子化が進んでいるなかで、私たちの老後はいきおい子どもに頼らざるをえない。家庭は助けあう存在です。しかし今の子育てでは、老後は惨憺るものになりかねない。学校に振り回されている家庭からは、人間は育たない。そこを心しておかなければいけないと思うのです。

第三に、親たちがどのような人間として生きていくか、これから の子どもに大きな影響を与えることを、親自身が気づき、その責任を持ちたい。いまのような教員採用、いまのような初任研がつづくなかで、学校へのユメがどれほど叶うか。気がかりな時代に入りました。これからは、親が子どもにいろいろのことを語り、さまざまな人生を教えていく、そのためには子どもとおとの間だけでなく、先生と親のあいだにも「学び問う」関係をぜひ作りたい。親は生活の技術はあっても、深い学問の力は持ちあわせていない。先生たちの刺激を受けて、親は目をひらかれる。“親を変える”“親に影響を与える”教師の意味。教師もまた、親によって、子どもの姿がみえてくる。たがいに、育ちあう関係でありたいと思います。そのため にこそ、子どもと親と先生を結びつける役割を、第1委員会は夜間公開研究会に、こめてきました。この研究会がたしかに継続されることを、切に願います。

## 戦後の社会意識と五段階相対評価 —ピラミッド型とちょううちん型と—

山 部 芳 秀

今もつづく「義務教育」の恐ろしさ

第1委員会で、「不登校」問題を取りあげたおかげで、不登校の子どもたちがしっかり成人していることが確認できたが、同時に彼らが苦しんでいるときに「戦後の日本では子どもが教育を受けるのは『義務』ではなくて『権利』なんだから、学校へいけなければ休んでいいんだよ」と言ってやるおとながきわめて少なかったことも思い知らされた。

憲法・教育基本法制定から40数年たつ今日でも、まだ「義務教育」は子ども本人にとっての義務なのだという教育観が根づよい。それは政策的にも「日の丸・君が代」を国旗・国歌と誤解している国民に対すると同様、誤解を正しく直す努力をせず、逆に利用している

ものがあるからだが、同時に敗戦までの「義務教育」の恐ろしさも痛感する。

教育をうけることが子どもにとって最大の義務であった敗戦の大日本帝国は、図Aのようなピラミッド型で説明される。これは本来、封建制の図形で、土地Aの支配者a、土地Bの支配者b、同じくCのcなどが支配する上に、A+Bを支配するa'、さらにA+B+C+Dを支配するa'''といった支配構造である。それらの三角形の積み重なる最頂点がかつての日本では将軍であり、天皇でもあった。図Aはまた「日本社会の家族的構成」をも意味し、天皇は大日本帝国の大家父長であって、A一家の家父長a、B家のbはそれぞれ大頂点の天皇を模した、小天皇となり、日本社会のいたるところに「天皇」がいる「日本社会の天皇制構造」をも意味した。

また、この図は天皇に対する「臣民」の構図でもある。「臣民」は天皇の家来である「臣」と、家来によって支配される「民」とからなり、敗戦前の公教育の教師は「臣」であって、天皇に陪席するときの宮中席次（順位）である位階勲等を授けられていた。

社会的には上流、下層の間に中間層が形成され、有産階級と無産階級の上下の間を浮遊する「不安」を特徴とする「中産階級・中流階級」とよばれる存在だった。

文化的には上下の関係は、たとえば純文学と大衆文学、みやびな楽に対する俗曲、高雅な教養・趣味に対する低俗な娯楽・慰安などと対比された。学校教育も低次の小学校から中学、高校（高専）、大学と上昇して、社会的地位に結びつき、大学を「最高学府」と称して社会構造上の地位を示した。

戦後の憲法・教育基本法にもとづく日本社会は、このピラミッド型で説明される社会を崩壊させ、平等で民主的な社会へ進むものではあったが、なお旧制度とそれにもとづく旧意識が根づよいのは知られる通りである。

しかし社会意識や文化の変容からは、すでに図Bのような中間がふくらんだ「ちょうちん型」で説明されている。そこではたとえば文学に、純文学（芥川賞）と大衆文学（直木賞）はなお存在するものの、週刊誌の小説を中心に「中間小説」が生れ、芥川賞作家と直木賞作家の区別のない分野がひろがり、1960年代には定着する。それ

「義務」教育時代の  
社会の構造と文化、  
学校

戦後社会の「ちょう  
ちん型」構造

はテレビの出現で、音楽、美術、演劇など芸術分野ではきわめて顕著で、高雅なるものと低俗なるものは接近し、あるいは混在して、多彩な「中間文化」を形成した。

### 「中」意識が90%をしめる

より明白に「ちょうどちん型」を示すのは社会意識である。自分の生活程度を上、中、下のどれと思うかの質問に「中」と答える人が圧倒的に多い、いわゆる日本人の「中意識」がそれだ。

総理府の国民生活世論調査、経済企画庁の国民生活選好度調査のいずれもが、70年代はじめから、「上」「下」はともに5%前後で、中の上、中の中、中の下あわせて「中」が88%～92%を、この20年間一貫して示している。

マスコミはなぜかこの「中意識」を、「中流意識」と表現し、旧時代の中流階級と比較して批判してきた。それは、上下に階層分化している現象があるにもかかわらず「中流意識」に安住していると批判し、ある日まぎれもなく下層にある自分を発見してガク然とするであろうといった予測や、若者向けにマル金（金持ち）とマルビ（貧乏人）に分類する傾向を流行させ、ベストセラーになったりした。しかしこの「中」意識は今日でも90%を続けている。

### 相対五段階評価の産物の可能性

この「中」をよしとする意識は、上の尊大さや下の卑屈をさけ「中庸」をとる、普通、平凡を好む処世術的な意識も大きいと思うが、同時にこの五段階は、戦後の学校教育を意味で象徴する「相対五段階評価」から来るものではなかろうか。

子どもが小学校に入り、はじめて手にした評価は、低学年では3あるいは「ふつう」を真中に「すこし進んでいる」「進んでいる」の4、5と、「すこし遅れている」「遅れている」の2、1であった。親の方は5や1での喜びや不安とともに、「ふつう」の安心があればそれでよく、「すこし」の上下はさして気にとめず、むしろ健康や性向の方を重視する傾向があったのではないか。この五段階評価の分布はガウスの大数曲線だが、それを90度立てて、左右相似型にすれば、ちょうど「ちょうどちん型」になるのである。

### 競争主義がこわした相対評価

どうして40～50人のクラスに「大数曲線の分布」を適用するのか、5や4をつくるために1や2をつくる悪い制度だとして批判されるようになるのは70年代だが、それはあの1971年の中教審答申に先だ

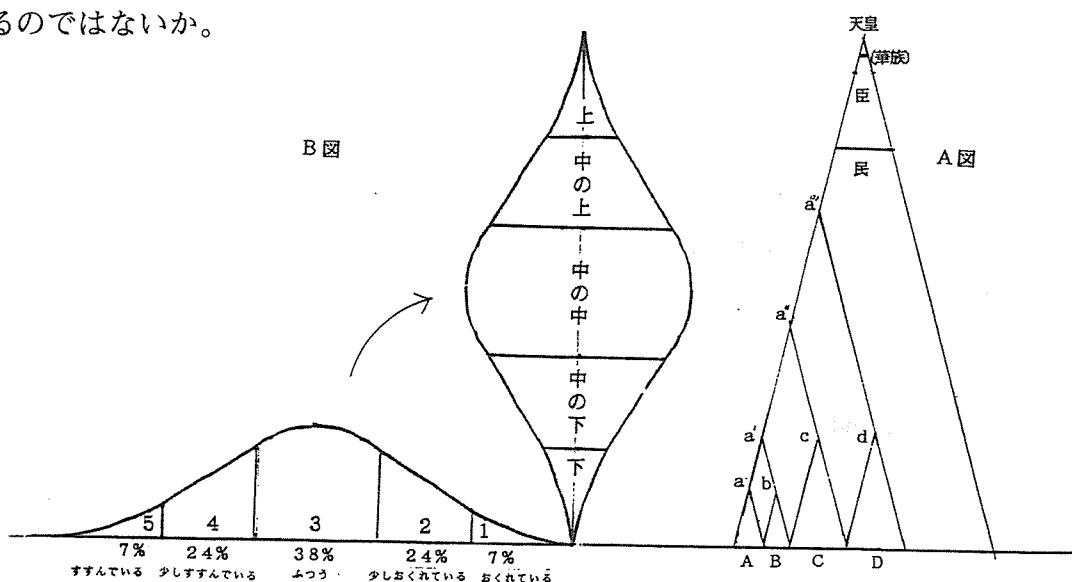
つ全国教育研究所連盟の「クラスの半数は授業についていけないでいる」の調査結果に始まる「競争主義教育」の時代からであった。

クラスの半数となると「ふつう」はまっ二つに割られ、子も親もびっくりして競争にまきこまれていった。それはピラミッド型が競争のトーナメント方式の図として復活してきたからであった。もはや90%もの日本人が「中」や「ちょうどちん型」に安住するのを許さない、という何者かの意志が働いたともいえよう。

国公立大学の共通一次試験にみられるように、北から南までの大学がみごとに偏差値で輪切りにされ、学生も教授も含めてトップの東大からどの位の何流大学か、といわれるような大学格差の序列＝ピラミッド型の出現は、戦前でさえ考えられなかった。

大学の序列化は高校、中学、小学校へと影響を及ぼし、成績点数で人間の優劣が定まるかのような序列化へと進んできている。上下にとんがりのない円のような社会をめざしたはずの戦後日本に、古い三角形が残存し、あらたな競争主義の三角形が生れて、「ちょうどちん型」と重なりあってみえる今日だが、国際化の進むなか日本人の競争主義のいきつく先もみえてきたのではないか。

すでに10年以上も前に、受験戦争のなかの子どもが「先生は『天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらずといえり』と教えてくれたが、実態は『点は人の上に人をつくり、人の下に人をつくる』ではないか」と嘆いたものだ。学校が強いる競争から降りた不登校の子どもからみれば、脱出して窒息からまぬがれた「学校社会」は、まさしく「点数封建社会」にみえたのかもしれない。そこまできているのではないか。



# 子ども文化の消失と未来

小 沢 牧 子

学校文化が子ども文化だったとき

子ども文化とよばれるものが、かつて確かに存在しました。私が子ども時代を過ごしたのは敗戦のあと、1950年前後ですが、わずかな子ども向けの書物、ラジオの子ども番組、そこから聞こえる歌、そして子ども集団が生みだしたおびただしい遊びが、子どもの生活を彩り、仲間をつなぐ財産でした。

学校文化もまた、確かに存在しました。子どもが読める本はごく限られていた時代に、学校教科書は子どもの文化財でした。新学期、始業式の日に新しい教科書が配られると、本好きな子どもだった私は、まず自分のものを読み、次にやさしく読める弟の教科書を読み、それから難しい姉の国語の教科書を背伸びして読みました。そんなふうに教科書は、子どもが手にできるわずかな読みもののひとつだったのです。

学校には、村でただひとつのオルガンがあり、理科の実験道具は魔法の道具のようでした。学校から群れをなして帰る道々、声を合させて歌うのは「あざやかな緑よ…」の“わかば”の歌だったり、「秋の夕日に照る山もみじ…」だったりしました。子ども世界の歌といえば、「文部省唱歌」が代表的なものでしたから。

すくなくとも30~40年前には、学校文化はそのまま子ども文化だったのです。運動会や学芸会は、子どもばかりでなく、大人たちのつどい楽しみの場でもありました。

しかし現在、状況は大きく変わりました。その背景には大きく分けて三つの事情があります。一つ目はメディアの変化、二つ目はハイテク社会の出現、三つ目は消費社会の到来です。この三つの変化に沿って、子ども文化・子ども社会の変容と現状について考えてみます。

活字文化から、映像と音の文化へ

さきにのべたような、私の子ども時代は、情報を伝える手段は、圧倒的に活字でした。もちろんラジオもありましたが、世の中のできごとを伝えるためには、新聞という媒体が大きな力をもっていました。つまり、活字メディアが支配的だったことをそれは示します。

「おとなはいいな、毎日新しいご本が読めて」、などと、新聞のことを、子どもの私は羨ましがったりしたものでした。「学校でよく勉強したら、新聞も読めるようになるんだよ」、というような答が、大人からは返っていました。学校へ通って読み書きができるようになることは、情報を手に入れることと直結していました。また、電話などのない時代、手紙という方法で、人との関係をつくるための大切な手段を得ることでもありました。

文字の読み書きに慣れるためには、手間ひまがかかり、“年季”が必要です。活字メディアを中心だった時代には、世の中の情報を手にすることができるようなるためだけにでも、子どもが学校へ通い続ける理由は十分にありました。学校のもつ意義について、子どもは納得していたのです。いつの時代も学校は、子どもたちにとって、第一には仲間と出会い過ごすところであったと思うのですが、大人の側から与えられる「勉強する場」としての意義もまた、かつてはそれなりに存在していました。その時代、学校文化とよべるもののが子どもの生活に影響力をもっていたことは、さきにのべた通りです。

しかしいま、電子メディアが活字メディアにとって代わりました。子ども文化は校門の少なくとも子ども・若者の世代においては、音や映像やコンピュータを中心とする文化が、活字文化を越えたのです。T V、ビデオフィルム、ファミコン、電話、深夜放送、あらゆるジャンルの音楽、漫画、視覚性の強い雑誌……。

子ども文化は、校門から外に出ました。こんどの媒体を手にするためには、長い修業は要りません。T Vを見るのは、幼児でも可能です。電話をかけコミュニケーションをもつために、多量な勉強は不用です。簡単な、やさしい、大衆的手段を、この時代は手に入りました。

子ども文化と大人文化の境目は、このような事態のなかで薄れ、両者の混りあいや、子どもが大人をむしろ凌駕するジャンルが出てきたりもしています。

子どもと大人がいっしょにひとつのT V番組を見、T Vゲームをします。カラオケのレパートリーも、年代による仕分けはゆるんでいます。

学校文化は、独自のものをすでにほとんど残してはいません。子

ども文化は、メディアの変化によって、学校外文化になったのです。

### 子ども一大人の枠組みが崩れた

次に、ハイテク社会と子ども文化の関係について、コンピュータの普及を中心に、手みじかに述べます。ハイテク社会の産物は、さきにのべたメディア形態の変化や、次にのべる消費社会の急速な進行とからまり合って、子ども・若者の世界にすばやく浸透しました。それは、ファミコンなどのゲーム機に代表されます。ワープロがついさきごろ世の中の話題にのぼったと思うと、それがあつという間に普及し、若者たちは苦もなくこれを使いこなしていきます。

時代の変化が年齢の変化をとっくに追いこしているのが、現代です。ここでもまた、子ども一大人の枠組みは崩れたり、乗り入れたり、さらには逆転さえしています。

この良し悪しではなく事実について言うのですが、学校という閉鎖されがちな場が、いま時代の中ではもっとも“遅れた”空間になっているといえるでしょう。

### 束ねる学校、個に分ける社会

第三に、消費社会と子ども文化の関係についてのべます。できるだけたくさんの商品を買わせるための市場開拓を至上課題とする消費社会は、一家にひとつではなく、個人にひとつの品物を持たせるための商品開発と売りこみを、激しくおこないつつあります。ウォーカーマンはその典型です。販売対象は、もちろん子どもにも及びます。子ども用の食品、衣類、玩具、生活用品……。小学生で個室を持ち、中学生で自分用のオーディオセットを持つことも珍しくありません。

ここで、個人がモノを持つ消費社会から、学校をとらえてみます。学校外の社会が人間を個別化してゆくながで、学校は集団主義を保ちつづけている場所といえます。個別化と逆に、学校は子どもを束ねます。年齢によって、教科書によって、時間割りによって。さらには校歌、制服、君が代や日の丸によって。表のカリキュラムである授業と、裏のカリキュラム（ヒドンカリキュラム）である学校によって望まれる行動と。一斉に揃えること、集団に束ねること、それが学校の基本的な方法と思想です。

学校的集団主義は、しばしば子どもを押しつぶします。また消費社会の個別化は、人間をバラバラに分散させてしまいます。どちらも、人びとが気分よく出会い、関係をつむぎ合いたいという望みを満たしてはくれません。

しかし、子ども・若者たちは、人と出会い、仲間を得たいという 仲間に出会う願いを強い思いを持ちつづけ、模索しつづけているように、私には思われ こめています。夜間公開研究会で語られる彼・彼女たちのことばは、それを伝えています。

映像を、音楽を、コンピュータ・ゲームを、さまざまなメカを、電話ネットワークを、マンガを、道具に囲まれながらのスポーツを……たくさんの商品に埋まるようにしながら、それらを介して人と出会おうとしています。たとえば、「オタク」と名づけられながら、「オタク度」を競うとき、そこには仲間が想像され求められているというように。

どの時代にあっても、文化とは、人と人が出会うための契機であり、その接点なのです。それはいまの時代、“異星人”と呼ばれたりすることのある子ども・若者たちにおいても、変わりありません。そしてそのような願いを叶える新しい文化のありようが、かつてのように学校のなかではなく、いまや学校の外で息づきはじめているのは、確かなことだと思います。

学校は、いまあまりにも特殊な場所になりました。ひとことで言うなら、一般社会の中に動く活力を遮断した、「死んだ場所」になったのです。子ども・若者の内側から発する文化へのエネルギーが生きることのできない場所が、子どもによって愛されることはありません。

たとえば音楽です。学校の音楽教室では、長く「正統」楽器とされ、校門から文化を迎えてきたピアノが、中心の位置を占めています。ピアノが弾けないと音楽の教師にはなれません。しかし学校の外でいま子どもたちに愛され、仲間をつなぐ楽器は、圧倒的にギターです。持ち運べて、手軽で、独習でき、いつも歌とともに、便利なすばらしい楽器です。年輩の音楽の教師にはなじみがなくとも、ギターを中心とする音楽と、大人世代をはるかに凌ぐリズム感は、まぎれもなくいま、子ども・若者の文化です。学校は、彼・彼女たちの新しい文化を音楽に限らずこだわりなくとり入れ、生き返ってほしいものです。

冒頭にのべた通り、かつて学校文化は子ども文化でした。いま、子ども文化が学校文化となる逆の流れを作ることが自然です。かつて文部省唱歌は子どもの声にのって学校の外へ出ましたが、いま音楽は、子どもの声にのって学校の中へ入ってくる運命にあるという

わけです。そこではじめて、子どもの文化が校門を出たり入ったりし、学校は子どもの生活の場に近づいてゆくのでしょうか。

学校は変わらなければ生き延びられない。高い塀に囲われた特別な場ではなく、社会の中のひとつの場であるために、また時代の中に生じているさまざまな困難をも共有する、ふつうの場所へと向かって、変わらなければならぬでしょう。そのとき実際に新しい流れを作る鍵を持つのは、まず、教師とよばれる人たちであると私は思います。場をほんとうに変えるのはいつも、個々の人間の願い、そして関係をつくる力なのですから。

## 学校改革への道

### 小 沢 有 作

学校の構造を変えよう

永畠さんから「教え習う場」から「学び問う場」へという問題提起がありました。僕も同感です。

僕は、今の学校は構造として、教師が教え生徒が習う構造になっていると思います。これは知識詰めこみ型の構造です。だから、「教え習う場」になるわけです。そこでは、教師が学校の主人公です。それを「学び問う場」に変え、子どもを学校の主人公にするためには、学校の構造を変えなければなりません。ここに、今日の教育改革の課題があります。

学校が子どもを縛っている

何回か青年たちの話を聞いてきました。青年たちが「学校に縛られている」という実感を強く持っているように感じました。学校に行くと、教科書通りに習い、学校の規則や先生の言うことに従うだけである、学ぶ自由はない、そういうところからストレスが溜って不登校に陥っていくという話でした。

学校が子どもを縛っているということは、いいかえれば、学校が子どもにとって抑圧空間になっているということです。これは「教え一習う」という学校の構造に由来することです。

ですから、不登校になるということは、子どもの問題というより、学校の構造の問題、学校が子どもを縛っている現実にあると受け取らざるをえません。

学校がどのように子どもを縛っているのか分節してみると、四つあると思います。一つは教育内容、もう一つは評価、三つ目は時間、四つ目は校則です。教育内容にしても、評価にしても、時間にしても、校則にしても、いづれも子どもたちは選べないわけです。与えられたものに従うだけの存在です。選べないと自立はできないと思います。

日教組は「参加・提言」をスローガンにしていますが、子どもも「参加・提言」できないと、学びの主体になることはできません。教師も子どもも、この点は同じです。

校則は学校の裁量のうちにありますが、他の三つは文部省管理の 1992年度に起きたこと下に置かれています。文部省が決めたものを、学校と教師を経由して、子どもに与えられるという構図になっています。子どもは、自分の学習なのに、それについてなにひとつ決定権を持っていません。

今年度（1992年）の新学期から学校の教育に新しい修正が加えられました。教育内容で言えば、新しい学習指導要領に基づいて編纂された教科書が使われ始めました。同じように改訂された指導要録に基づいて評価の仕方が変わりました。それから、学校5日制が始まりました。学校の時間の変更です。1990年代は今までと違った新しいやり方が文部省の手によって導入されたわけです。

文部省は、これについて、子どもの意欲を引きだし、個性を重んじる新学力観、新評価観の導入だと宣伝しています。それは子どもを縛っているものを緩めた、それをなくしたということを意味するでしょうか。僕にはそう感じられない。前よりもっと縛りが細やかになったと感じられます。

以下、92年修正について、もうすこし踏みこんで考えてみたいと思います。

92年度の春から小学校で新しい教科書が使われ始めました。それ 新教科書の問題点を見ると、これは学習指導要領の特徴を反映しているわけですが、幾つかの特徴を感じられます。

#### (1) 学校論の欠落

きょうのテーマに即して言いますと、何よりも学校について考えることを避けています。子どもたちが生きている中心の場所になっているのが学校です。その学校とはどういうところか。どういう問

題を抱えているのか、それに対してどういうふうに考えたらいいのか、そういう学校の問題は教科書には書いていません。

僕はよく思うのですが、学校の教科書を見ると百科事典のようにいろんなことを教えるのですが、でもその中で、学校とはどういうところかということは教えない。正面切って議論させない。つまり、子どもが自分の生活の中で一番身近かで疑問を持って議論できるところを議論させないような仕組みになっている。

教科書はどのようにして作られるのか。評価はどうしてこのような方法を取るのか。学校5日制はなぜ行なうか。そもそも、なぜ学校へ行くのか。子どもにもっとも深くかかわる問題なのに、これになにひとつ目を向けさせようとしない。おかしいです。

## (2) 男本位の見かた

男女が平等に生きる問題が話されましたか、教科書、とくに歴史を見ていると、これは男中心です。小学校の歴史教科書の中で、教えるべき人物として42人登場しています。そのうち女性は3人です。卑弥呼、紫式部、清少納言、との39人は全部男です。男も、天皇、公卿、武士、政治家が中心です。男が歴史を動かす。これに象徴されるように教科書は男本位につくられている。

なぜ男本位になるかというと、それは歴史を公のこと、統治を中心にして教えているからです。国家の歴史を中心にして教えると、国家を担ってきたのは今までずっと男だったわけですから、どうしても男が歴史の主人公になって、女は排除される。国家の立場からものを見ることと男本位の見かたは一体です。

もうひとつ加えると、国家と男が文字文化を握ってきました。文字が長らく支配の道具であった事実を忘れてはなりません。国家と男と文字文化は三位一体でした。

男本位の見かたを克服するためには、教科書の内容を国家中心、文字文化中心から、生活文化中心に組みかえたほうがいいと思います。生活文化というのは、モノ作り、衣食住、子育てです。生活文化を中心に据えると、文化の主人公として女性が必然的に登場してきます。また、モノ作りを重んじるようになります。だから男と女の問題は、学校文化の構造の組み変えとかかわっています。

学校文化をこのように組み変えていくことの必要性は子どもの生活スタイルが消費中心に変容した今日、ことに高まっています。手作りのモノ作り、それを生みだした働き人の知恵にふれないので、

子どもの人間化をいびつにします。人とふれあい、モノとふれあい、自然とふれあう。これから学校文化はこのようなふれあいを大事にしなければならないと考えています。

### (3) みんな覚えてみんな忘れる

新教科書を見て感じることは、依然として知識詰め込みであることです。あれもこれもたくさん知識を、短時間に詰めこむ。授業時数が教科別に決まっているから、どうしても早足になる。ついていけない子どもが生じるのは、当然です。ついていく子も、小学校6年間、中学校を入れて9年間に教わる知識のあの膨大な量は、試験が終わると忘れなければ生きていけません。みんな覚えてみんな忘れる。これが知識詰めこみ型学習の特徴です。それは子どもから考える力を疎外していきます。

ですから第2委員会で提起しているように、少なく教えて深く議論してよく考えるように、教科書の内容を組み替え、授業のあり方を変えなければいけないと思います。

学習指導要領は、学年ごと・教科ごとに、あまりにも網羅主義的に教えるべき事項(=知識)を規定しています。何が幹になる知識で、何が枝になり、葉になる知識か、見境がつきません。幹になる知識を重点的にゆっくり学ぶように変えたほうがよい。

また、学年別に細かく知識を積み上げる方式を取っていますが、これは順次性の方法と似て非なるやり方ではないでしょうか。第2委員会は、遠山啓さんの「術・学・観」の考え方を採用して、小1～4までは読み書き算を中心とした「術」のレベルに入れ、小5～中2までは問題の解決法を追求する「学」のレベルを重んじ、中3～高3までは事柄の意味や意義を深く考える「観」のレベルを大事にしたい、といっています。子どもの知的発達を大きく四つに区切って、それぞれに対応したこのような順次性ならば、僕にも納得がいきます。

### (4) 学力を点数で後始末する

それと、学校は、テストして、なんでも点数に換算しないと落ち着かない所になっています。点数に換算できない「学力」のほうが圧倒的に多いことに、それこそが生きた知識であることに、そろそろ気づくべきでしょう。さきほどの「学」や「観」のレベルのことは点数に換算できないし、また換算しても意味のないものです。

教師は「学力の点数化」の思想に骨がらみ捕われていますが、そ

これから自らを解放できるかどうか。それが、知識詰めこみ教師にとどまるか、課題追求型の教師になるかの分岐点になります。

### 新指導要録の問題点

学習指導要領が変わると指導要録も変わります。指導要録が変わることとは、成績のつけ方が変わるということです。

指導要録は文部省初中局長の通知によって改訂されます。成績のつけかたも文部省が決めていることになります。

1学期、2学期とつけ終わりました。先生がたの話を聞いていると、いくつか理に合わない問題が出てきています。

#### (1) 「意欲」の数字化

今度の指導要録の特徴は、第一に、学力評価において意欲を一番重視しなさいと言っていることにあります。各教科とも、観点別評価は4項目からなっていますが、第一位は「関心・意欲・態度」です。これまででは「知識・理解」を第一位に置いていましたが、今回、評価の重要度の順位を逆転させたわけです。

これは、学習指導要領が新学力観を唱えて、「自ら学ぶ意欲」を強調していますので、これに対応して、指導要録のほうも変更したわけです。この時期、「意欲」一やる気一をもちだしてきたのは、なんのためでしょうか。

先生がたは「関心・意欲・態度」をどのようなものさしなり方法で評価しているのでしょうか。3段階なり5段階で評価するわけですが、はたして「意欲」というのは段階別に区分けして評価できるものだろうか。よく取られている方法は、手を挙げる数とか、「はい、はい」と元気で受け答えをする態度とかをチェックして、いわば意欲を数字化するわけです。忘れ物も意欲を欠く証拠になる。教師はメモ魔にならざるをえません。

そうした形に表されるモノばかりで測られると、おとなしい子、内気な子はどんどんその網の目からこぼれしていくようになる。だまっていても、深く聞いていたり、考えたりしている子もいるわけです。「意欲の数字化」という困った問題が今度大きく出てきたと思います。

#### (2) 観点別評価と評定との矛盾

困った問題の第二は、観点別評価と評定とが異なった評価の文脈に立っていることです。

観点別評価は絶対評価です。ところが、評定は相対評価です。二

本建てになっている。そうしますと、観点別評価のところでは、少しオーバーに言えば全員に5をつけてもいいわけです。テストで100点を取れば、全員に5をつけてもよろしい。ところが評定に移ると、小学校3年生以上は3段階評価、中学校は5段階相対評価ですから、321あるいは54321に成績を分けなければいけない。観点別評価における絶対評価と評定における相対評価は矛盾するのですね。

矛盾をどのように解消するか。観点別評価において、はじめから相対評価の方法を取り入れる。そうするしかありません。そのうえで、換算表を作る。N市の表を見せてもらったのですが、観点別評価は四項目ありますから、かりに5、5、3、3だったら、評定の相対評価は4をつける。そういう、換算表を作る。

中学校では、高校入試をひかえていますから、評定を5段階相対評価の配分を守って、厳密に行なわれなければならない。絶対評価と相対評価の二本立の矛盾が際立ってこざるをえません。中学校の教師は頭を悩ませているように思うのです。

### (3) 人物評価の細分化

人物評価というと、文部省から叱られるかもしれません。「行動の状況」といっている、以前の「行動と性格の記録」から「性格」を削除している、と。ですが、中身は「性格の観察」、人物評価そのものです。

前回は9項目でしたが、今回は11項目。2項目ふえています。ふえた項目は「思いやり」と「自然愛護」。前回の「情趣の安定」は「明朗・快活」に変わったようです。念のため、11項目あげてみましょう。「基本的な生活習慣」、「明朗・快活」、「自主性・根気強さ」、「責任感」、「創意工夫」、「思いやり」、「協力性」、「自然愛護」、「勤労・奉仕」、「公正・公平」、「公共心」。道徳の徳目とほぼ重なっていましょう。

各学校では11項目についてABC、○○△でつけたり、あるいは○と何もつけないという形で表示しています。このような人物評価まで3段階の数量化の方法がもちこまれているわけです。

○○△も問題ですが、かりに11項目の全部に○をもらう子がいたら、その子は聖人君子にはかなりません。人間業ではありません。教師にも、どの項にも○をもらえるような人はいないでしょう。自分たちにされたらかなわないことを、どうして生徒にたいして行い、

評価するのでしょうか。それこそ人間を冒瀆する仕打ちです。

#### (4) 60も成績をつける

毎学期ごとにきちんと成績をつけるとすれば、何項目つけなければいけないのでしょうか。数えてみましょう。9科目ありますから、 $9 \times 4 = 36$ で36でしょう。評定は9。それに人物評価11、さらに「活動の状況」4項目を加えると、毎学期60項目もつけなければいけない。

1人の担任が40人の子ども一人ひとりに60項目つけるなんて不可能でしょう。中学校になれば教科単位で150人、200人の生徒一人ひとりに観点別に4つ、それに評定、あわせて5つつけるわけでしょう。 $200 \times 5 = 1,000$ 。こんな細かく見きれないはずです。外から見ていると、異状に思われるのですが、現場の先生方はどうやってしのいでいるのでしょうか。

子どものほうも、毎学期、50項目も60項目も、5 4 3 2 1 や○○△をつけられたら、たまりません。2や1が30も行列していたら、意欲、やる気なぞ起こるはずがありません。これがなんで子どもに意欲を起こす評価になるのでしょうか。

#### (5) 評価の網羅主義

「今度の指導要録は意欲を評価する新しい評価方法だ」と文部省はPRしていますが、子どもにとっては網の目のように細かく測られる悪い評価になったといわざるをえません。先生も、これでやると、以前に比べてもっともっと大変になったと思います。教師は神様にならなければやっていけないような評価項目の細分化です。学習指導要領における知識の網羅主義に対応して、指導要録も評価の網羅主義になっています。

なのになぜ現場の先生はこれに対して文句を言わないのか、僕には不思議です。僕の希望は、これに対して、わが日教組を中心にして指導要録改訂の運動をしてほしいことです。

一般に教職員組合運動は学習指導要領の改訂の問題には熱心です。でも指導要録の問題には1歩足を引くようなスタイルになっています。なぜでしょうか。僕は、子どもからの異議申し立てがあれば、これはストレートに教師の責任にかかるてくる問題だからだと思います。「先生の評価のしかたは疑問だ」と問われる。そのため身を引いているところがあると思います。

もう一つ、92年度から導入されたのは学校5日制です。学校5日制の問題点制というのは、学校の時間の問題です。今まで週6日で組み立てられていた学校の授業時数を週5日に組み変えるというのが学校5日制です。

1年間の授業時数は学年別・教科別に決められています。学校教育法施行規則や学習指導要領を見ると、一枚の表になって表示されています。これに基づいて各学校では、学年別・クラス別に時間割をたてます。時間割に従って、教師と子どもは一日をすごすわけです。授業時表を示すたった一枚の表が日本中の小・中学校の時間を差配しています。これを決めるのはだれかというと、文部省です。文部省が「学校の時間」を管理しているのです。

明治の学制以来、週6日制でやってきたので、週5日制に変えるのは、日本の「学校の時間」の歴史上、大きな改革であることはまちがいありません。それを、時代の流れのなかで、文部省がやると決めたわけです。日教組の先導がありましたが、これじたいは良いことです。

問題は、週6日制を土台にした授業時数を週5日でこなそうとするところにあります。そこに無理が生じています。無理をかぶるのは現場の教師であり、子どもです。

今は月1回ですが、それでもいろいろ無理が出てきて、行事を減らしたり、他の5日に授業時数を上乗せしたりしています。そうすると、ますます子どもたちが学校にいる間は過密ダイヤになります。これが月2回になると、既に文部省は実験校を置いていますが、その先生に聞いたら、行事はもっと減らす、小学校から6時間の日は何日も出てくる。中学では7時間の日が出てくる。だから学校に行っている間、子どもは息抜きはできない。机の前に6時間も7時間も座っていれば、集中力もなくなります。

授業時数を確保すればいい、というものではありません。そうすれば学力水準が維持されるというものでもありません。これらが至上目的のようになって、子どもは時間の奴隸、学力水準の子分になっています。本末転倒もはなはだしい。

ですから学校5日制を実施するには、日教組も言っていますが、授業時数を減らさなければならない。これに応じて学習指導要領をもっと簡素化しなければならない。指導要録も見直さなければならぬ。子どもが背負わされている荷物を軽くすることを合わせて考

える必要があります。

## 問題点が改革点

このように見えてきますと、92年度から、教育内容、評価、学校の時間の点で、以前より一層子どもに対する縛りが強くなったように考えられます。

縛りをなくすには、どうしたらよいか。僕は、問題点が改革点だとおもっています。話のなかで幾点か述べてきましたが、あらためて整理してみましょう。

### (1) 国家管理からの解放

こういう縛りをかけるのは、制度的には文部省です。教育内容も評価の仕方も学校の授業時数も決めているのはみんな文部省一国家ですから、国家が子どもの教育を管理している。その結果、上からの知識詰め込み型教育になっている。これに教師も親も子も従わざるをえない状態になっている。こういう状況を変えなければいけない。だからこれは、個々の学校現場でできるだけ穴を開けていく努力とともに、学校への国家管理をなくしていかなければならないと思います。これが根元にある改革点です。

### (2) 子どもに学ぶことを選ぶ自由を

教育内容については、学ぶ側が選ぶ自由を持たなければいけないと思います。子どもが何を勉強したいのか、どういうことを習いたいのかということを考え、議論し選ぶことを保障しなければいけない。学ぶことを選ぶ自由を持たなければいけない。

僕はときどき思うのですが、新学年が始まって、今は教科書無償ですから「はい、1年間はこの教科書で勉強しますよ」と渡します。これは運動がたたかいといった保障だけれども、その反面子どもから選ぶ自由を奪っているわけです。本当は、日本じゅうの学校で、学年の初めに、一週間、二週間、何を勉強したいのか、子どもを中心にして議論をして、私はこれを勉強したい、おれはこれを勉強したいということを考える時間があって、そういう希望を生かすカリキュラムをつくれないかと思っています。

学習指導要領を簡素化・大綱化して、子どもたちも手にすることができるようになります、これを叩き台にして議論することもできるわけです。子ども、親、教師の側が学習指導要領をたえず議論・検討する習慣をもつことが必要です。

### (3) 評価の公開と異議申し立ての権利

評価については、指導要録の公開と子どもの異議申し立ての権利を認めなければいけないと思います。指導要録の公開は、この前、川崎市が全面的に公開に踏み切りました。これはいいことだと思います。

指導要録の公開が広まっていくと、なかでも人物評定について教師のつけ方が変わってくると思います。今でも「人物評定はできるだけ悪いことをつけるな」と校長は指導しているようです。いざ公開となって、文句を言われたら困るというわけです。公開すると困るような成績のつけかただったら、むしろこのほうが困ります。

公開とセットになって、評価への異議申し立ての権利が成りたつ。非公開ならば、異議の申し立てようがありません。評価権を教師が独占しているかぎり、子どもの学習の自由は実現しません。

授業が教師の一方的な知識つめこみならば、評価も教師による一方的な測定に陥る。教師と子どもが共につくる授業ならば、評価も教師と子どもの合議がよい。授業のしかたと評価のしかたは、表裏一体のものでしょう。

### (4) 座学は午前中に限る

さらに、学校の授業時数を減らすことです。机の前に座る知識教科の授業時数を減らして、これは午前中だけにして、午後はもっと体を動かす活動一ものをつくったり芸術活動をしたりする時間に使ったほうがいいと思う。

そのためには授業時数を減らすと同時に、教育内容を組み替えるべきだ。組み替えていかねばなりません。

そうしようとすると、教科の縦割りシステムという厚い壁にぶつかります。「教科王国」にいかに穴を開けていくかという課題が浮かんできます。授業時数を減らそうとすると、すぐ教科間に授業時数の分捕り合戦が起きますが、教師はそうした教科セクト主義から自由になる必要があるのではないかと思う。

### (5) 子どもを学校改革の議論の主人公にする

このような学校改革の議論は、今度こそ、子ども・青年を中心にして行っていきたい。これまで臨教審であれ、日教組であれ、女性民教審であれ、大人が議論して改革案を提起してきました。こう

いうスタイルから脱けだしたい。子ども・青年たちが議論の主体になっていく中で、永畠さんの言われたような「学び問う」を中心とした新しい学校がつくられていくのではないかと思います。

## 私学ブームをどう考えるか

原 田 瑠美子

### 私学ブームはバブル

「15歳人口」は1989年に207万人をピークとし、1999年には141万人まで減少する。このままでゆけば、90年代の終わりには1,000校の高校が不要という計算になる。

90年代の生徒急減期へ向けて、「私学危機」が叫ばれてから、久しいものがある。私学危機を乗り切るためにはどうしたらいいか、教職員組合でも真剣に話し合ったし、私学経営者の間では、生き残り策が必死に模索された。目玉商品づくりということがさかんに言われ、進学率を上げるための特進クラス、コース制導入、英語科、国際科、演劇科などの設置、中・高一貫教育への移行、大学付属校化・系列校化、スポーツ振興による有名校化、ブランド物の制服、施設のデラックス化など、生徒集めの目玉が考え出された。また、専任教員の補充を手控え、非常勤講師で穴埋めしたり、クラス定員を50人台のままにしておいたりして安上がり、合理化路線をとるなど、ありとあらゆる経営戦略が取られてきた。

さて、いよいよ90年代に突入。生徒が減ったにもかかわらず、私学への応募者が増えているという現象が生じた。公立離れが進み、どこの私学も応募者が増加するといった私学志向となって表れたのである。とくに私立中学への人気が高まり、1991年の都内の公立小学校から私立中学受験者は21.1%、5人に1人の割合となり、進学者は12.7%となっている。

こうした「私学ブーム」はなぜ起きたのだろうか。あるアンケート調査によると、私立中学受験の最大の理由は、「高校受験で苦しむたくない」「一流私学をめざす」「特定私学の校風をしたって」「公立中学への不安」「塾ですすめられて」などが挙げられている。公立は画一的だけど私学は何かやってくれそうだという親なりの期待がうかがえる。それが、90年代初めの好景気とも相まり、子ども

の数も少ないし、私学へ通わせるということで親の中流意識も満足させることができるので、高い授業料を払ってでも私学へ入学させるということになったのだろう。

生徒集めのための目玉商品づくりはいろいろと行われたが、真に教育の内的実力が高まって「私学ブーム」が生れたのではなく、公立に対する不安が相対的に私学の人気を高めた面が強い。だから好景気が去れば、私学ブームもバブルとしてしぼんでしまうだろうと私は予測していた。

私の予測は今年あたりからあらわれはじめている。去年まではどこの学校も志願者が増えていたが、今年は志願者を減らしている学校が出てきた。大学受験も、今まで幾つも掛け持ち受験していたのが、受験料が大変だからということで、受験校を絞っている傾向がはっきり出ている。その結果受験料収入激減で経営がピンチに陥っている私大が少なくない。

親は期待して私学に子どもを入学させたものの1クラスの人数は多い、施設も良くない、特進クラスといっても一握りの生徒だけで、あとは切り捨て。かなり期待していたことと違うということが見えてきた。そして、不況下、そんなに教育費をかけることができなくなり、私学への志願者が減りはじめたのだろう。不況が深刻化する情勢にあって、この傾向は強まっていくと予測できる。

バブルでふくらんだ私学なら、バブルがはじけた後、しぼむのは当然のなりゆき。私学が生き残れるかどうか、私学の教育内容そのものの質が評価される時代に入ったと言えよう。

公立学校の画一的な管理教育、偏差値一辺倒の受験教育に対する 地域で公立学校を再親や子の不安や批判は根強い。だから、高い授業料を払ってでも、 生しよう“自由な校風”の私学へ逃げていったのである。

だが、バブル景気がはじけた今、高い授業料を払うことには限度がある。自分たちの税金でまかなっている公立学校を、自分たちの学校として、地域の市民、親、子がつくり変えていくという原点に戻ろうではないか。

永畠さん、小沢牧子さん、そして私がメンバーだった「女性による民間教育審議会」では、誰でも行きたい時に、無料・無試験で入れる、学校運営に、生徒・親・地域住民の参加を保障した開かれた公立学校をイメージし、いくつかの提言をまとめた。公立と私立と

の関係についても触れているので、それらの提言を紹介したい。

### 無試験・無料で高校教育を

私たちは、“高校就学権”をすべての人に保障することを提言いたします。

高校就学権を保障するということは、当然「学力で差別して、ある子は高校にいれるが、ある子は高校にいれない」ということではありません。つまり、高校の入学試験を全廃するということです。

私たちの提案は、いま15歳で行なわれている偏差値による選別や、選別のための高校格差をなくすというねらいももっています。したがって、一つの高校で、さまざまなタイプ、さまざまな学力の子がいっしょに勉強することになります。その子どもたちが、どの子も興味を失わず、理解し、学ぶよろこびと意欲をもちづけられるよう、高校の教え方や内容を大幅に変える必要があります。

もう一つ、大事なことがあります。

それは、小・中・高をとおしていえることですが、子どもたちに学校教育を強制しないということです。“義務教育”ということばを私たち親は、むしろ「子どもたちが、学びたいときに、学びたいことを、どこでも学ぶ権利をもてるように、おとなが責任を持つことだ」と考えています。

とくに高校ぐらいになると、子どもは自分の意志をはっきりもちます。ある子は、しばらく社会で働いてみたいと思うでしょう。ある子は、とうぶん学校というところへ行きたくないと思うかもしれません。ある子は、学校を1年休んで、外国へ行ってみたいと考えるでしょう。

いまの学校だと、いったん学校から離れると、もう二度とふたたび学校へもどることは困難です。しかし、公的に“高校就学権が保障”されていれば、いつでも中断したり、学校にもどることができます。

これが、生涯教育の精神であるべきですし、それによって“学校へ行かない自由”と“行く自由”的両方が保障されるのです。それで、私たちは、あえて“高校義務化”といわずに、“高校就学権の保障”ということばを使いました。

最後にもう一つ、大事なことを。

それは、高校就学権を保障することによって、帰国生、障害や経済的事情で高校へ行けない子、年をとつてもう高校にはいけないと思っている祖父母、家計を支えるために自分が高校へ行くことは無理だと思っている父母、すべての人が高校教育をうけられるということです。

もちろん、私たちは在日外国人にも同じ権利を保障したいと考えています。

### 高校就学権の保障のための改革

#### 公立高校での就学権保障

提言★33 進学する公立高校は、原則として地域の数校（定時制高校を含む）のなかから選ぶ。

提言★34 中学や高校は、高校選択の情報を提供し、見学・懇談の機会を十分に用意する。

提言★35 各公立高校は、いっさい、学力テスト・内申書・推薦による選抜をしてはならない。

提言★36 希望者がその公立高校の定員をオーバーした場合には、地元優先枠を設け、残りを抽選、または順番待ち（ウェイティング・リスト）方式で決定する。

#### 私立高校での就学権保障

私たちは、原則として、私立の学校がもっと自由につくれ、自由に教育できることを願っています。そのほうが、私たちにとってより多様な学び方ができるからです。

しかし、私立の学校といえども、営利のために、全体の子どものしあわせを破壊するような教育は慎んでいただきなくてはなりません。いま、一部の私立学校が、極端な“偏差値エリート”教育に走り、それが異常な進学戦争の元凶になり、日本の教育のゆがみを助長していることについての、謙虚な反省がほしいと思います。

私たちは、私立教育の自由が大切だと考えるからこそ、子ども全体のしあわせ、教育のあるべき姿についての責任をになつていただきたいと思います。そうでなければ、私たちの税金からの私立学校への助成を、私たちは拒否することでしょう。

私たちは、子ども全体のしあわせを考え、教育のあるべき姿

を求めて、公立高校の改革を提言しました。

それは、そのまま、私立学校への期待でもあります。私立学校のみなさんは、私たち親の期待とともに歩み、そのなかで、私立の自由と個性をよりいっそう發揮してくださるよう願ってやみません。

そこで、高校就学権の保障を実現するため、私立高校にご協力願いたいことを、以下に述べます。

提言★39 私立高校は、私たちの無試験での高校進学の希望を尊重し、可能な限り、無試験の生徒を受け入れる。

提言★40 私立高校の学区は、各学校が自由に決定する。

提言★41 私立高校は、無試験での高校就学希望者を受け入れることについて、公立高校や私立高校関係者と協議し、全員受け入れができるよう協力する。

提言★42 私立高校が、自校の個性を創るために、独自の入試を実施し、一定枠の選抜により生徒を入学させることは自由である。しかし、選抜した生徒数に応じて私学助成は削られるべきである。

提言★43 私たちは、納税者として、私学助成を受けた学校の経理の公開を要求する。

独自の建学の精神を持つ私立学校の存在はそれなりの意味がある。公立学校にはない独自の校風の中から傑出した人物を育てた歴史もある。そのような私学は今後とも存続していくだろう。

だが、やはり基本は公立学校である。公立学校を自分たちの学校として再生していくという考え方を広げていきたい。

## 居場所としての学校をめざして

小 沢 牧 子

学校が変わるべきが  
来ている

学校は一日中、子どもや大人が必要に応じて使える“地域の大切な居場所”にしよう。そして子どもたちの勉強時間は、半日だけにしよう。この二つが、以下に私のべようとしてすることです。

学校はいま、いやおうなしに変わらざるをえない局面を迎えてい

ます。そこには、大きくみて三つの背景がありそうです。

第一は、さきに「子ども文化の消失と未来」(P. 90) の項です  
でにのべたように、旧時代の集団主義体質を維持する学校と、個別  
性を強調する消費社会の間の大きなズレです。

子どもたちは、学校の外つまり家庭や地域では、消費社会の一員  
を生きます。その場は消費社会の経済原則によって支えられている  
事実があるのですから。学校の内と外の価値基準は、しばしば対立  
的です。内では一斉に時間を守り、服装や身なりをそろえ、きまり  
に服従することが強く求められます。一方外側では、フレックスタ  
イム制の進む社会があり、自分の好みの商品を買い求めることが自  
然な環境があり、多様さの中で自分で判断することが望まれる図式  
があります。学校の内側は、かつての産業社会の価値基準、外側は  
現在の消費・情報化社会のそれに支配されていて、子ども・若者た  
ちは、校門の内と外でその二つの世界を生き分けているのです。そ  
れはなかなかにラクではない営みにちがいありません。

二つの世界のズレは、つじつまを合わせ切れないほど広がってし  
まっている——そのことが誰の目にも明らかになっています。

第二に、これは第一の理由と裏表のことなのですが、学校の内側 学校の外側に出る子  
へ入りたがらない子どもたちが年ごとに増えて、その数が無視でき どもたち  
ないほどになっているという事実があります。佐々木賢氏 (P. 41)  
のお話からは、高校中退者を中心とする浮遊層のありさまがわかり  
ます。また、不登校の子どもの数の増加はうなぎ登りで、'91年度  
に年間30日以上欠席した小・中学生の数は、6万3千人と報告され  
ています。(文部省学校基本調査)。

さきごろ私が出会った小学3年の不登校の女の子は、「学校にい  
るのがこわい」と表現していました。さきにのべた二つの世界を生  
き分けるストレスに加えて、点数・成績による序列化は、子どもた  
ちの間に相互の緊張感を強めつづけているのだと思われます。

不登校・退学によって学校の外側に出た子どもたちの思いは、内  
側にいる子どもたちのそれと、多かれ少なかれ重なっています。国・  
文部省は、このような事実を見ないわけにはゆかず、学校の“絶対  
性”を後退させざるを得ないところに立たされています。

第三の背景は、世界情勢の変化です。三年半前、ベルリンの壁が  
ひらいたことに象徴される東西の緊張緩和は、日本の教育政策にも

影響をもたらすでしょう。国家間の緊張の度合が教育政策に反映するという歴史的事実を、私たちは学んでいます。1950年代の締めつけ強化については、永畠さんが書いておられる通りですし（P. 82）、1960年代には、米国の対ソ緊張感から生じたスパートニク・ショックの嵐が日本をまきこみました。いま'90年代の世界情勢は、学校の「自由化」の条件を用意しています。

### 「居場所」を切り拓く実践に学ぶ

さて、以上の三点をふまえて、私たちは市民の側から、求める学校のあり方について急いでのべておく必要に迫られています。国・経済界が考えている「学校の自由化」は、「自由競争化」のことなのであって、その先には子どもたちがいっそうバラバラに分けられていく図式が用意されているからです。私たちが求める自由化は、人と人のつながりを深め、ふくらませ、強めることができるものでなければなりません。

臨教審がとなえた自由化・個性主義は、自由競争主義と読み代えるべきもので、その未来に決して幻想をもつことはできないのです。

私たちがいささかでも希望を行く先に見ようとするとき、そのモデルのひとつは、不登校の子どもや親たちによって切り拓かれた「居場所」という言葉と実践であるように、私には思われます。居場所はすなわち、人びとが出会い、何かをいっしょにする場のことです。

子ども、大人を問わず、人間が孤立させられ、お互いが出会いにくくなっているいま、人は人とのつながりを強く求めています。学校という場は多勢の人が数として集まっていますが、たての序列化と強い管理のもとに置かれている限り、仲間意識は生まれにくいのです。友達との横並びの出会いと関係に飢えているのが、いまの子どもたちの状況なのだと思います。

### 地域の学校の再生を

地域の学校がもつ意義は大きく、その存在は大切です。子どもたちにとっては、たまたまその地に住み合ったさまざまな仲間と出会い、縁を深める場所であり、親たちにとっては、子どもたちが日中安全に、そして願わくは楽しく過ごせる身近なところなのです。とりわけ働く親たちにとっては、その願いは切実です。子どもに学力をとか、個性を伸ばして、また競争に勝ちぬけるために、などのいわゆる教育願望や「親のエゴ」がうずまく場でもあることを承知の上で、それについてはあえてここではふれません。ただ、その種の

親の欲望もまた、「いろいろな人に会える、居場所としての学校」という重要な意味を見えなくさせ、大きく歪めてきたということは、明確に認識しておく必要があります。

「学校を軽くしよう」ということばがしばしば聞かれるようになりましたが、単に減量をするだけでなく、「序列化の場」から「地域の居場所としての学校へ」という、質のとらえ直しが重要です。

もちろん、まず減量が必要です。小沢有作さんも言われ、(P.103) 第4回公開研究会で保坂展人さんが強調されているように、学校の勉強は半日で十分です。(私が親として体験したのは、旧西ドイツの学校で、ここは小学校から高校まで半日制でした。) 午後は、学校を利用したいと希望する子どもや大人が、ゆっくりと自由に使え、人に会える場として活用したい。繰り返しますが、学校は地域にとって、便利で貴重な空間です。

自由な居場所、出会いの場こそが学校の原点でなくてはならない——、不登校の子どもと親たちののっぴきならない実践は、そのことを私たちに示しました。学校はその事実を学んでほしい。そのために、教師の人びとこそ、その事実を見つめ、学校をそのような場に近づけるために身を寄せてほしいと思います。

望む者が誰でもゆける居場所性を十分にもった学校へ。その学校を子どもと大人がたっぷり使いこなそう。公立学校というものの国家支配的性格を十二分にわきまえながらも、あえてそう言いつづけたいと私は考えています。その努力の上にしか、学校の再生の道はないと思うからです。そして学校という場は、たまたま住みあった大人と子どもたちが暮らす地域にとって、とても大切なところなのです。

## 子どもと教師が楽になるための発想転換

原 田 瑠美子

本来、学校は子どもにとって楽しい場であったはずだが、今や子どもを縛りつける重苦しい存在となってしまった。また、教師も理想と現実の間で、苦しみ、疲れ果てている。

子どもや教師がもっと楽になるためには、教育制度の改革や学校

行政の弾力化が必要なことは言うまでもない。だが仮にそうした変革がなされなくとも、子どもや教師、親が発想を転換し、価値観を変えることによって、もう少し気楽に学校と付き合うことができるのではないだろうか。

私は教師になって23年、何度か教師という仕事がつらくなり、やめようと悩んだことがある。しかし、現在はやっぱり教師の仕事は楽しいなと思えるようになったが、その自分の体験にふまえ「教師が楽になるための発想転換」について次の4点を挙げてみたい。

### 学校を“絶対化”しない

「教育=学校」と思い込みがちだが、学校は国家の教育機関であって、教育そのものはいろいろな場で可能である。第4回の公開研究会で青年が発言していたように、学校で学べることもあるが、学校外でも学べることもあるし、学校で学べないこともある。それをどうも学校でしか学べないと思いがちになり、学校を絶対化してしまう。

教師は、子どもを丸ごとつかんで子どもの全てを教育するのだと大それたことを考へないほうが良い。私も教師になりたての頃は学校の中だけで教育を考え、子どもを全てかかえこもうとして、家庭における生活まで全部つかみ、自分が変えてやるんだと力んでいた。子どもはいろいろな場で生活し多様な環境や人間関係の中で影響を受けて育っていくのであって、学校や教師はその一要素にすぎない。学校に来ているときに教師が子どもたちをしっかり受けとめてやれば良いのだと考えると、随分余裕が出て子どもたちと触れ合うことができるのではないかだろうか。

### 一人でも信念を貫く

体罰や管理教育をおかしいと考えている教師がいるにもかかわらず、学校現場で歯止めがかけられないのはなぜだろうか。それは教師が組織や集団の中で主体性を持ちえていないからだと私は考える。

最近、教師はものを言わなくなっている。集団の中で孤立することを恐れ、みんなに合わせようとする傾向がある。意に反することでも教師集団の一致ということで従ってしまう。妥協して、自分の信念に反することをやらざるを得ないから、精神的につらくなり、教育への情熱も失せていくのだ。おかしいと考えることには従わない、加担しない、自分一人になんでも筋を通す強さを持ちたいものだ。管理、統制が厳しく、一人で闘うなんて無理だというなら、柔軟にうまくすり抜ける戦術だってある。

集団としてどうまとまっていくかという発想の前に、教師一人ひとりがまず主体性を持ちたい。そしてみんなでまとまって闘うことができない時は、うまくすり抜けてもいいからしたたかに信念を貫こうではないか。一人だって平気と腹をくくればこわくない。

学校の中での子どもの評価は、成績が良いか悪いかあるいはきまりを守っているかいないかという画一的なものさしではかられがちである。だが点数とかきまりというメガネを外して見てみると、子どもがいろいろな顔に見えてくる。そうすると、子どもと付き合っても楽しいし、子どもも慕ってくる。ところが子どもを競争馬みたいに点数で序列化してみたり、きまりを守っているか、違反していないかという眼で見ていると、子どもの顔が見えなくなってしまう。いくら教えてもわからない、成績が上がらない、注意してもきまりを守らない、だらしがないなどイライラしてしまう。そうなると、子どもは近寄ってこないし、心もつながらない。子ども一人ひとりが違った個性を持っているのだから、それを見つけてあげようという見方をしていくと、どの子もみんないとおしくなってくる。そして子どもとの触れ合いがとても楽しくなっていく。

“良い子” “悪い子”  
という見方をやめる

教師は自分の学校の中だけに閉じこもっていては視野が狭くなる。学校を超えたつながりをもつ  
学校の中にいると、外から見ると非常識なことにも慣れてしまうと  
いうか感性が鈍くなってしまう。私自身、この教育総研の第一委員会のメンバーに加わって、また違う目で教育や子どもを見直すことができた。学校の中だけで教師としての役割を担わされていたら、お先真暗という気分に落ち込んでいただろう。学校を離れて教育を大きく見ていくと、学校の中でのことはたかだかこの程度のこと、そんなに落ち込むことはないのだとわかってくる。

教師は学校を超えて教育を考えいかなければ窮屈になる。研究会、地域サークル、あるいは趣味の仲間でも良い。学校を超えたつながりをもつことで視野がぐんと大きくなり、余裕も生れる。

私が一番言いたいこと。「先生たち、そんなに頑張らなくて  
も良いんじゃない。“教師”という役割、責任感をちょっと緩  
めてみたらどうかな。ありのままの自分、自然体で子どもに接  
したら、もっと毎日が楽しく過せると思う」

教師が楽になれば、当然子どもたちも楽になれる。さらに子どもたちにとって、学校という存在が重圧にならないための発想転換として、次の2点を加えたい。

学校へ行っても行かなくともいい

従来は自分にあった学校はどこかと「学校を選ぶ」という発想だったが、もはや「学校へ行くか行かないかを選ぶ」という発想に切りかえたほうが良いと私は考える。「教育=学校」、しかも「義務教育」と言わざると、学校は行かなくてはいけないところ、学校へ行かないと子どもは駄目になってしまうという思い込みがあった。ところが、学校へ行きたくない、行けないという子がたくさん出て来た。この不登校の子たちや親たちは社会的脱落者になるのではないかとずいぶん悩んだ。だが学校に行かなくても子どもは十分に育つということを不登校の子たちが実証してくれた。今までの公開研究会でそういう実例がいっぱい出た。たとえば、第4回の公開研究会で不登校になった子の母親が教師から「協調性のない人間になってしまう」とか「体系的な学問が身につかない」とか言われたが、そんなことはなかったと報告していた。知りたい時、必要な時に学ぶことが一番身につくのであって、体系的といつても、学校で習ったことはテストが終われば忘れてしまう。学校外でも他人と出会う場があれば社会性を育むことができる。学校外の子どもたちが育つ場、小沢牧子さんが提案している「居場所」をたくさん保障してやることが大事ではないか。

学校へ行くか行かないか、行きたくなければ行かなくてもいい。行ったとしても、行きたい時に行けばいい。自分の必要に応じて学校とつき合っていく。そのぐらい思いきって学校を軽くしていけば、子どもたちは息を吹き返すことができるだろう。

自分らしく、豊かに生きる

学校へ行きたくなれば行かなくてもいいと言われても、日本の学歴社会の中で学校へ行かなければ不利になるのではないかという不安を、子どもは持つかもしれない。

だが、学歴社会の中で、受験競争のレールに乗っていく生き方が、果たして幸せな人生につながるのだろうか。

幼い頃から塾通い。断片的な知識を詰め込まれ、クイズのようにどれだけ速く答えられるかを鍛えられる。そうした受験勉強では、本来の学ぶ楽しさは味わえないし、考える力も想像力も育たない。

友だちは競争相手であり、仲間としての結びつきも育まれることはない。

受験戦争に勝ち進み、“一流大学”へ、そしてさらに“一流企業”へと昇進。だが“一流企業”へ入ったものの、今度は“企業戦士”としてこき使われる。たとえ、地位や収入があったとしても、心豊かに自分らしく生きなければ、決して幸福とは言えないだろう。

学校へ行っても、行かなくても要は同じ。自ら問い、学ぶ姿勢を持つこと。そして、自分を発見し、他者とのまじわりの中で自分しさを伸ばすことだ。学歴よりもそうした価値観の方が大事だということを、親や教師が子どもに伝えていけば、子どもは学校へ行かなくたって、自分の好きなことにチャレンジし、自分を伸ばしていくべきいいのだと自信を持つ。

あと、数年で21世紀。“物質的豊かさ”より“心の豊かさ”がますます問われる時代になっていくだろう。子どもも大人も、もっと大らかにゆったりと毎日を生きていこうではないか。

# 教育総研 理論フォーラム

No. 1 「世界の激動の中で、いま日本の教育を問う」

日高六郎 鎌倉孝夫 増田裕司 海老原治善 銀林浩 小沢有作 嶺井正也

No. 2 「家庭と子ども・青年の文化」

第1委員会 〈子どもと文化、家庭と学校のかかわり〉 中間報告

No. 3 「学びの原点から見直す—学校5日制と教育課程」

第2委員会 〈学校5日制と教育課程〉 中間報告

No. 4 「『豊かな社会』と学校間格差の中で—現代日本の高校教育」

第3委員会 〈高校・大学教育改革と入試改善〉 中間報告

No. 5 「公教育費確保の新たな枠組みづくりを求めて」

第4委員会 〈教育条件改善と行財政〉 中間報告

No. 1～5 各1000円

No. 6 「学校・家庭・文化を衝く 子どもたちの現在」

第1委員会最終報告

1500円

No. 7 「学びの原点に近づく—これならいける学校5日制」

第2委員会最終報告

1500円

No. 8 「変貌する社会と高校教育改革」

第3委員会最終報告

1700円

No. 9 「教育地方自治確立をめざして—教育行財政システムの改革—」

第4委員会最終報告

1200円

## 第1委員会

〈子どもと文化、家庭と学校のかかわり〉

教育総研 理論フォーラム No. 6

学校・家庭・文化を衝く  
子どもたちの現在

定価1500円(本体1456円)

1993年6月10日 発行

委員長 小沢 牧子(心理学研究者)

編集 国民教育文化総合研究所◎

東京都千代田区一ツ橋2-6-2 日本教育会館内

TEL 03-3230-0564 FAX 03-3222-5416

研究所員 山部 芳秀(国民文化会議)

発行 (株)アドバンテージサーバー

東京都千代田区一ツ橋2-6-2

研究委員 永畑 道子(作家)

TEL 03-5210-9171 FAX 03-5210-9173

〃 小沢 有作(東京都立大学教授)

〃 原田瑠美子(東横学園中・高教員)